
IS インフィニット・ストラトス シン・アスカの激闘

ちくわヘルシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IIS インフィニット・ストラトス シン・アスカの激闘

【Zコード】

N1524V

【作者名】

ちくわヘルシー

【あらすじ】

メサイア防衛戦にて、激闘の末アスランに敗北したシン。幻想の中ステラと『明日を見て生きること』を約束したシンが目を覚ませば、そこは見知らぬ倉庫のような場所。奥に進むとそこには、鎧のような『何か』があつた……

色々あつてシンが入学したのは『女子しかいない（他一名除く）』とんでもない学校だつた！ 果たしてシン・アスカの明日はどこに向かう！？

戦闘あり！ ラブコメあり！『IIS インフィニット・ストラト

ス『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』の夢のク
ロスオーバー、ここにあり！

……つてな感じのモノが書けたら良いなあ。

プロローグ『加速する明日』（前書き）

以下の事にご注意ください。

- ・この作品は『シン・アスカ』を主役に据えています。彼が嫌いな方は回れ右してください。

・『シン・アスカ』は原作……もとい高山版を『ベース』にします。全て設定が高山版通りではないので、ご了承ください。

・原作双方の雰囲気が壊れているかもしません。

・は俺の嫁！という方、ご注意ください。あなたの嫁はシン・アスカに取られるかもしれません。

最後に、このような形で失礼ですが、既に同発想でＳＳを書いていらっしゃる作者様方に心よりの敬意とお礼を申し上げます。

プロローグ『加速する明日』

ねえ、ステラ。君は今の俺を見たらどう思うかな？ 怒るかな？ それとも笑うかな？

あ、いきなりこんなことを聞いてゴメン。つい……

大丈夫。約束は、忘れてないから。君の言ったとおりに、俺は前を見て、明日を生きている。それが君との約束だから。

ううん、君だけじゃない……父さん、母さん、マコにレイの分まで……みんなの分まで明日を生きるって俺は決めたから。

過去に囚われるなって、アスランは言つた。確かに俺は、過去に縛られていたかもしない。けど、失った過去を守ることが間違いだなんて、俺には思えない。だって、君やレイ達と過ごした時間は……俺にとって大切なものだったから。それを切り捨てるこことなんて、できない。

アスランも、きっと分かってくれると思う。あの人だつて、大切なものを守りたかったわけだし。それに……なによりあの時、俺を止めてくれた。過去に囚われるだけで、憎しみで戦うことは間違いだつて、俺に教えてくれた。

俺は過去を放つてはおかない。ちゃんと失った過去を背負つて、それから、前を……明日に目を向けるんだ。今度こそ、大切なものを守るために。誰かにすがつて、答えをもらうなんてことはしない。だから、安心して、ステラ。振り返りながらかもしない。時々、足を止めることがあるかもしれない。けど、俺は歩き出すことを決めたんだ。

大丈夫さ。だって

生きている限り、明日はやつて来るから。

……うん、ステラ、ゴメン。たつた今、大丈夫だつて、言つたばかりなのに……

俺は、真つ直ぐ前を見つめることができない。うつむいたままだ。

足も全く動かせていない。立ち止まっている。歩き出せていない。

田の前には、学校の校門がある。俺はそこをぐるめることができないでいる。

どうしてかつて？ 周りを見てくれれば、分かるはずだ。

俺は顔を上げて、周囲を見渡す。そこには

校門の前にたたずむ俺を、好奇の田で見ながら抜き去つっていく、制服姿の女子、女子、女子女子女子女子女子……男子は一人もいない。女子だけだ。

ある女の子は、何も言わずにこっちを見つめ……別の女の子は、友達らしい子と手を取り合つて、キヤツキヤとはしゃぎながら……さらにまた他の子は、携帯のカメラをこっちに向けて……やめてくれ、フラッショをたかいでくれ。

ああ、きっと動物園のパンダはこんな気分だつたんだろうな。マユ、今度動物園に行く時は、ちゃんとパンダに挨拶しような。「今から写真撮りたいんだけど、良いですか？」つて。何も言わずにシヤツターを切るのは失礼だ。よく分かった。

……ゴメン、話がそれた。ええと……とにかく、数えてもキリがないぐらいの女の子が俺の周りにいる。敵機としてアーサーに報告したら、多分卒倒するぐらいに。それがいつせいに、こっちを見

ているんだ。その視線に圧倒されて、情けない話だけど、俺は動けないでいる。

逃げられたら良いんだけど、そういう訳にもいかないんだ。なにせ、今の俺が着ている服も、周りと同じような白地に赤いラインの入った制服。つまりは、そういうことだった。

今日この学校は入学式で、今日から俺はこの高校に通うことになつていて、ついでにこの学校には男子があと“一人”しかいないつて……

どうしてこんなことになつたんだろう？ うん、力が欲しいとは思った。守る力が欲しいとは思った。たまたま、それを手に入れることができた。

でも、知らなかつたんだ。この世界では……その力は「女性にしか動かせない」代物だつたなんて。なんで俺がそれを動かせるかも、分からなくて。

あ～、もう、いい加減頭が混乱してきた。本当にそもそも、俺はどうしてここに来たんだよ……？

頭を抱えながら、もう何度も目かは分かないけど、俺は記憶を掘り起こし始めた。

目の前には紅いモビルスーツと黒い宇宙が広がっていた。

そのモビルスーツ……ジャステイスがだんだんと遠くのほうに離れていく。右腕のなくなつたその機体が、俺をじっと見下ろしていた。

実際にはジャステイスが退いているわけじゃない。俺の方が落ちているところだった。

メサイア防衛戦。

デュランダル議長が唱える、戦争のない平和な世界を創るための計画『デステイニアープラン』を成功させるために、俺は最後の任務についていた。

任務の内容は、戦略兵器『レクイエム』と起動要塞『メサイア』の防衛、それを落とそうとするオーブ軍の遊撃。作戦が成功してオーブを討てば、全てが終る。

議長の言うことが、本当に正しいのかは分からぬ。強制された平和で人が本当に幸せになれるのかって、アスランの言うことも分かるけど、だからって俺も戦わないわけにはいかないんだ。これで戦争がなくなるんだつたら、仲間を守れるなら、たとえオーブを討つことになつても俺は戦う。

だから俺は、アスランと戦つていた。あんたが正しいっていうのなら、俺に勝つてみせろって、そう言つて。

アスランの言う『人の向かうべき明日』。

俺が欲しかつた『戦争のない明日』。

俺の明日がどんなものになるのか、分かるはずもなかつた。

右腕と右足を切られたデステイニアが、ゆつくりと後ろに傾いていく。

機体の制御が利かない。

カメラは生きているけど、もつ意味なんてなかつた。

さつき左腕も持つてかけた。武装も、スラスターもやられている。コクピットの中で鳴り止まないエマージェンシーが、完全に俺の敗北を告げていた。

ああ……俺は負けたんだ。

でも不思議だ。悔しくてたまらないけど、嫌じゃない。素直に負けを認められる。

「アスラン……あんたやっぱ強いや……」

暗い宇宙の中で、周りは色々な光であふれていた。ビームの閃光が走る。ミサイルの爆発が鎖を作り、それに、モビルスーツが一際大きな輝きを見せては消えていく。みんなまだ、戦っている。必死に、守りたいもののために。戦争のない、平和な世界のために。

さっきまで俺も、その中の一つだったはずなのに。デスティニーはもう戦えない。俺の力が足りなかつたからだ。

「シン……」

少しの間だけ俺のほうを見ていたジャステイスが、背を向けて宇宙に消えていった。

アスランの行く先はきっとレクイエムだ。そのままレクイエムは墜ちるだろう。

それを止めるのが、俺の任務だつたのに。

駆けていくその光の筋を、俺は見ていことしか出来なかつた。

すみません、議長。

「ごめん、レイ。みんな。俺、止められなかつたよ。

俺はまた、守れなかつたんだ。

月面の荒れ果てた大地がだんだん近づいていく。

落ちていくデスティニーの中で、俺の意識は遠くなつていった。

結局俺は、誰も守つてやれなかつた……

周囲には何もなかつた。

自分以外に何も見えない暗い空間の中で、まるで意識だけが浮いているみたいだ。体にも力が入らないし、それに、ひどく寒い。いつたいここはどこなんだろう？ レクイエムとメサイアは？ 議長は？ レイは？ ミネルバのみんなはどうなつたんだ？

……もう、俺が気にしてても意味は無いかもしれない。
どうせまた、守れなかつたんだから。

俺はどうなつても構わない。戦争のない、平和な世界のために、つて戦つてきて……それでも、何も変えられなかつたんだ。全てが、オープにいたあの時のまま。

軍に入つてから、俺は強くなつたと思つた。全て叩き潰して、戦争なんて無くしてしまえるつて思つた。大切な全てを、今度こそ守つてみせると思つた。

なのに、父さんと母さんとマコが死んだときと同じだつた。スティラも守れなかつた。田の前で死んでいた。

奪つていつた奴らが憎かつた。議長がくれたデステイニーさえあれば、そいつらを倒せると、平和な世界の邪魔をする奴を、全てなぎ払えると思つた。

でも、最後はアスランに負けた。あの人は、憎しみで戦うなつて言つた。それじゃあ心は永久に救われはしないつて。

……だつたら、俺が今まで戦つてきたのは何だつたんだ……？

これでやっと終ると思ったのに。もう戦わなくていいんだって……
それなのに……

誰も守れなくて。何も守れなくて。ずっと守れなくて。

できるようになったのは、誰かを撃つことだけだったのか？ 誰から奪うことだけだったのか？ だったら俺のしてきたことは……

無駄だった。何もかも……

暗闇の中でどうにかなってしまいそうだった。泣き叫びたいぐら
いなのに、もう涙も出ないし、指一本すら動かせない。そのまま意
識の底まで沈んでいきそうな、その時だった。

「そんなことないよ……」
「え？ 誰？」

後ろから柔らかい光と一緒に、誰かの声が聞こえた。
暖かい、優しい光と声だ。その少し幼さの残る声に、はっとして
振り向く。

振り向いたそこにはステラがいた。

「ステラ……シンに会えて良かった……」

ステラは笑っていた。出会った時と同じ金色の髪がはねている。
でも、最後に会った時とは違って、嬉しそうに、本当に嬉しそうに
笑っていた。

俺が守りたかった、守りきれなかつたはずステラの笑顔……光は
優しく俺を包んでいるけど、なんだか眩しくて、はっきりと目を開
けていられなかつた。

「だからシンも前を見て。明日を……」

その声を最後にして、ステラの姿は遠くに消えていった。やつをまでの刺すような寒さは無くなつていて、辺りは光でいつぱいになつていて。

ステラ……そつだな。俺はまだ、生きている。

枯れていたはずの涙で、目がにじむのが分かつた。それを腕でぬぐつて、なんとかこらえる。いつもみたいに、泣きわめくことはしあくなかった。

「ステラ……約束するよ。俺、今度こそ、守つてみせる」

姿は見えないけれど、さつと聞こえてこいる。ステラは俺のそばにいてくれているはずだから。はつきりと決意の言葉を口にすると、俺の意識まで、光の中に溶けていった。

満ちていく光の中で、ほんやりとしか覚えていないけど、何かを見た気がする。

差し伸べられた誰かの手。

それは、こっちにおいてとつて俺に向かつていて……
どうしてだかは分からぬけど、俺はその手をつかんだ。
覚えているのはそこまでだった。

目が覚めたときには、つす暗い部屋に放り出されていた。まず非常電源を起動させようとか、無線が生きているか確認しようつと手を

伸ばしたけれど、その手に触れるものがなくて、自分が「ククピット」の中にいるんじゃないってことに気付く。

「……？」

なら、どこかの医務室か？ という疑問も、自分が固い床に転がされていることで、違うと分かる。医務室がいっぱいになつていても、流石に床に放り出したりはしないだろうし。幸いにも、俺はどこも怪我なんてしていなかつたけど。それに、戦闘中らしい慌ただしさも振動もない。静かなものだつた。

まだ少しふらつく頭を抱えて起き上がる。床を踏みしめられるのだから、重力があるみたい……ちょっと待て、重力？ 回収された後に地球上でも連れて行かれたのか？

ヘルメットは……ない。どこかに置いていかれたらしい。パイロットスーツは着たままだ。ますます、よく分からない。拘束もされてないから、敵艦の中つてわけでもなさそうだし……

辺りを見渡すと、うずたかく積まれたダンボールの山だと、見慣れない機材が積み重ねられている。何かの倉庫？ だつたら俺は怪我が無いからって倉庫に投げ出されたのか、なんて考えると、ちよつと腹が立つ。

何でも良いから、ここを出なきや始まらない。そう思つてみたものの、結構な広さもあるらしいし、隙間なく物が詰め込まれた棚とかのせいで視界が狭い。すぐに出入口は見つからないだろうけど、とりあえず辺りをふらふら歩き始める。

「誰か、いないのかー！？」

声をあげてみても、返事は聞こえなかつた。自分の出した声が、倉庫の高い天井から跳ね返つてくるけれど、すぐにまた静寂が戻る。

状況もさっぱり理解できないせいで、苛立ちは募るばかり。

「どうなってるんだよ、いつたい！？」

思わず声を荒げたその時、奥のほうから、ブンと機械が動き出したような音が聞こえた。今まで気付かなかつたけど、その音の方角から光が漏れていた。それを追つてはみるもの、なんだか奥のほうに入り込んでしまつてゐるみたいだ。そうは言つても音が気になつたから、かまわずに進む。何も無いよりマシだ。

荷物の迷路を、目的地の光だけを頼りに進んでいく。機材の山の壁と暗がりのせいで、時々つまずきそうになりながらも歩いていくと、パソコンの画面らしい明かりが目にに入った。そろそろゴールらしい。最後の角を曲がったところの、一番奥に、それはあつた。

「なんだ、これ……？」

打ちひしがれるような格好でたたずむ、灰色の、人型の何か。胴体を覆うアーマー、腰のサイドスカート、そして無造作に投げ出されたその腕と足は、まるでモビルスーツを小さくしたみたいで……でも、所々には装甲がないし、何より頭部がない。こんな歯抜けた形じゃあ、自立して動くなんてできないだろうし……カメラまでないなら、作業用のロボットでもないのか？ それともただの作りかけか？

肩と背中、それから腰に繋がれた仰々しいケーブルは、隣のパソコンに伸びていて……画面の中はすさまじい速さで文字が躍つていた。

覗きこんでみると、わけの分からぬ用語のオンパレード。P.I.C整備完了、ハイパー・センサー整備完了、コア・ネットワーク動作確認終了、シールド・エネルギー充填完了……動作確認終了とか出しているんだから、整備はほぼ完璧なんだね、きっと。

ただ、この灰色の鎧みたいなやつが動き出すなんて思えないし……鎧、か。サイズも人間大だし、新しい作業用スーツなのかも。いや、それにしては、ずいぶん物々しいような……

触つたらまずいよな、とは思つたけれど、物珍しさもあってそれに手を伸ばしてみる。あと数センチでそれに触れそうになった時

ドンッという爆音が俺の体を揺らした。

『火災発生、火災発生！研究所第一棟の開発室から出火！』

続いて、緊急事態を知らせる警報が鳴り響く。サイレンの音に反応して、伸びた腕は勝手に引っ込んでいた。

「火事！？ 嘘だろ！？ こんな時に！？」

すぐに来た道を引き返して、出口を探し始める。もしここに弾薬があつて引火でもしたら、間違いなく俺は吹き飛ばされる。そんなのはゴメンだ。変な機械に構つてなんていられなかつた。

戻りの道すがら、何度も爆発音が聞こえ、地面が揺れ動く。音のする距離はそんなに離れていない。煙がまだこつち来ていないのだけは救いだ。急がないと……

意外にも、引き返してみれば出口は近かつたし、その前にはヘルメットが落ちていた。これで煙を吸い込む心配はしなくて済む……少しだけ安心してヘルメットを持ち上げると、中からカラーン、と何かが入つている音がする。

手を入れてつかんでみれば、硬い、長方形の感触。取り出してみたそれは、ピンク色の携帯で マユの形見の携帯だった。

「何でこれが……つて、今はそんなこと考えてちゃダメだ！」

艦に置いてきたはずだったけど……とにかく、これが見つかったなら、なおさら死ぬわけには行かない。携帯を握りしめて、片手で

ドアノブを回して扉を開く。

扉の先の廊下には、すっかり黒煙が立ちこめていた。ステッツ越しにも伝わる熱気が、火が近づいていることを俺に教える。扉を閉めて、右に向かつて駆け出した。建物の構造を知らないせいで、どこから逃げればいいかが判断できないけれど、まず出火元から離れることが先決だ。

回りこんだ廊下の先の窓を開け、外がどうなっているかを確認する。下には庭が広がっていて、避難したらしい人たちでごった返している。庭を中心にして、左右と向かいに、それぞれ似たような建物がそびえ立っていた。

「おい君！ その下の庇から降りられるか！？」

窓から身を乗り出していると、こっちに気付いた庭の白衣の人が声をかけてくれた。下の庇？ よくよく真下を見ると、確かに庇があつた。なるほど、これならなんとかなりそうだ。

「今はしごも用意したから、急いで！…」

「はい、大丈夫です！…」

落とさないようステッツの中に携帯をねじ込み、飛び降りよう窓枠に手をかけると、また大声が聞こえてきた。でも今度はもっと切羽詰つたような、悲痛さも感じられる声だった。

「放せ！ まだ娘が中にいるんだ！… 放せってんだよ！…」

「主任！… 無茶ですってば！… 消防の人を待たないと…」

後ろの人に羽交い絞めにされても、必死に建物の中に飛び込もうとする人がいた。まだ中に入っているのか？ なら助けないと…

考えるよりも先に声を張り上げていた。

「その子、どこにいるんですかーー？」

俺の声に気付いたその人が、はつと顔を上げる。顔はまだ若々しいけど、無精ひげと、着崩した白衣がだらしない。けどその顔は、そんなこと関係なく必死で、俺にすがるような目を向けていた。

「何言つてるのーー。君も早く「多分四階だーー。今お前さんがいると」の一つ上だーー。頼むーー。」

後ろにいた人は止めようとしたけど、それはもう一つの嘆願にかけ消される。返事をする時間も惜しい。窓に背を向けて、俺は階段を探して煙の中に入り込んでいった。

直後に、大きな衝撃。まだ爆発は止まらないらしい。急がないと火事で燃えるより先に、建物が崩れる。見つけた階段を数段ほど飛ばしながら駆け上がって、廊下に出た。廊下はもう火に包まれていて、3階よりも熱気は一段と増している。

「誰かいるかーー。いたら返事してくれーー。」

返事の代わりに聞こえてきたのは、女の子の泣き声。声のする部屋へ、炎を避けてひたすら走りこむ。扉を開けると、部屋の奥で女の子が震えていた。机の下に潜りこんで泣きじゃくっているその年このは10ぐらいだろうか、長く伸ばした栗色の髪を先でまとめている。マコを思い出させるその見た目……大きく一度、心臓が跳ねた。

振り払つように頭を振つて部屋に入り、机にしゃがみ込んで手を伸ばす。

「もつ大丈夫……」

恐怖からなのか、女の子は何も言えなかつたけど必死に俺の体にしがみついてきた。

煙を吸わせないように注意しながらも、その子を抱えて部屋を後にする。見つけたのは良いけど、早く逃げないと……

廊下の炎はさらに高くうねり、爆発は建物を揺らし続ける。この階からじやあ避難はもう無理だ。危うく炎に飲み込まれかけていた階段を飛び降りながら、再び三階の廊下に入る。

「つー? しまつた、ふさがれた! ?」

通路の角を曲がつてみれば、どこを通つてきたのか、火は道をもう完全にふさいでいた。背後からも炎が迫つているのに、前も後ろも遮られた形だ。

「ひつちだ! !

唯一残つていたのは倉庫ぐらいだった。少しでも時間稼ぎになるように入つて扉を閉めたけど、焼け出されるのも時間の問題だ。

「くそつー! 何とかならないのかよー! !

扉に拳を打ち付けても答えが出るわけも無くて、虚しく音が響くだけだつた。

「……つー! !

女の子のしがみつく力がいつそつ強くなつた。涙でぐしゃぐしゃ

になつた顔をこっちに向けて、煙でカラカラに渴いたのだから、なんとか声を絞り出している。

「お兄ちゃん……大丈夫？ 助かる？」

「大丈夫。俺がちゃんと、君を守るから。お父さんの所に連れて行くから」

「……ほんとに？」

「うん。だから、大丈夫。安心して」

そう言うと女の子はちょっとだけ安心したのか、うなずくともう一度だけ手に力を込めた。
俺はその顔を真っ直ぐ見ることもできなかつた。

今の自分に何ができる？

怯えさせて、その後は気休めの言葉をかけるだけか？

ちくしょう……！

ちくしょう！

ちくしょう……！

約束したばかりなんだ！！

明日を生きるつて、ステラと約束したばかりなんだ！！！

なのに！！

自分も守れないのかよ！？

この子一人も守れないのかよ！？

もう俺には、そんな力も無いのかよ！？

掌を強く握り締めて、歯を食いしばる。

『力』が、欲しい。

約束を守る『力』。

奪う力じやない。

守る『力』。大切なものを……今度こそ。

今度こそ俺は守らなくちゃならないんだ。

薄暗いはずの倉庫が、急に真っ白になつていぐ。

倉庫のもの一切が、いや、壁も見えない。

抱きかかえていたはずの女の子も見えなくなつて、何も聞こえなくなつた。

まるで時間の流れから切り離されたみたいに、周囲が静かになる。

白い空間の奥に見えたのは、ケーブルに繋がれていたあの鎧もどき。

動くわけでもない。何か言つわけでもない。

ただ、そこにあるだけだ。

それでも、はつきりと分かつた。

俺のことを呼んでいる。

気付いた瞬間、まるでテレビの画面を切り替えたよつて、世界が元通りになつた。

弾かれたように体は動き出していた。

道なんて覚えていないのに、足は勝手に奥へと突き進む。

同じ角を曲がり、たどり着いた場所に座っているそれは、周りのことなんて全く気にかけずに、俺の前にあつた。

「これ……『HS』だ」

女の子がぼそと呟く。『HS』、ところが前に聞いた覚えはない。

これが何かなんて知らない。

でも、たつた一つだけ理解できることがある。

これは、『力』だ。守るための『力』だ。

抱えていた女の子を一度おろして、安心させるように髪を軽くな
でた。

「大丈夫だから、安心して」

じつちを見上げながら、なでられた頭をおさえていた女の子に背
を向ける。

俺はその灰色に手をかざした。

お前が、俺のことを呼んだんだよな？ なら頼む。

俺に『力』をくれ。

『力』が必要なんだ。

だつて俺はまだ

「俺はまだ、何も守れてないんだ！！」

手を触れた途端に、金属がこすれたような音が聞こえた。

次の瞬間には、頭の中には膨大な情報が滝のようになだれ込む。
普通だつたらそのまま流されていくような情報も、自分の頭はO
Sにでもなつたみたいに瞬時に処理していった。

力の何もかもが、分かる。力の使い方、特徴、装甲の限界、最大
出力、意識に浮かび上がるパラメーターも、その見方も、何もかも。

機体を縛り付けていたケーブルが、排出される水蒸気と共に一つずつ外れていく。

鮮明になっていく視界と同時に、機体の灰色はこじみ出るようになり、色鮮やかな青と白に染まった。ハイパーセンサー最適化完了、フレイズ・シフト、展開……完了。

宇宙に上がったときのあの感覚、体がふつと浮上する。推進機正常動作、確認。左腕を突き出せば光が包み、そこに盾が現れる。機動防盾……展開。

各種追加装備 使用可能装備無し。
全システム クリア。

『 Ignited - 起動』

視界に映る起動の文字が消え、装甲が淡く輝きを放つ。

背部のスラスターからの排気が、軽く周囲のものを振り動かす。

見えるのは狭く、ちっぽけな世界。いつだって理不尽で、容赦無く俺を打ちのめしてきたはずの世界。

だけど確かに今この世界に、俺と『力』はあった。

起動動作が終了したのを確認した俺はすぐに、女の子をまた抱き寄せた。

「しっかりつかまっててくれよ」「う、うん……」

驚きで田を見張る女の子に念を押して、抱え擧げる。左腕の盾でその子を覆うようにすると、右腕で腰のサイドスカートからダガーを引き抜き、地面から一メートルほど浮き上がって、ドアの方に向き直った。

盾の装甲が押し広げられるように開き、スラスターに光がともされていく。

「行くぞっ！！」

体をぐつと前に傾け、背中と足のスラスターを一気にふかす。邪魔な障害物をダガーで払いながら、加速をつけて倉庫を一直線に駆け抜けた。

生身だつたら絶対に反応仕切れない速度でも、センサーが感知して体がそれに追従する。

のたうち回つて搖らめく炎も、今は何の脅威でもない。

その勢いを保つたまま、ダガーを突き立てて倉庫の扉をぶち破り、さらには建物の壁も簡単に貫いていく。1枚、2枚……止まりはない。

「はあああ――――――！」

壁を切り抜けて最後の窓を叩き割り、太陽の下にたどり着く。センサーを通じて見える世界では、光を反射して輝くガラスの破片が宙を踊っていた。

外に出られれば一安心だ。そう思つて下に着地しようとしたけれど、止まらない。

いや、止まらないどころか

「げ、減速できない！？」

空中制御が上手くできないせいで、ほとんど減速できなかつた。マズい。この勢いじゃあ、向かいの建物に突つ込む。そろそろ腕の中にいるこの子も無事じゃ いられない。

ダガーを放り投げて、両手で女の子を抱きしめる。前傾姿勢だつたのを反転させ、足のスラスターを点火。無理やりに急降下して、背中から地面に接触した。衝撃が背中を激しく打つて、体を震わせる。放り出されそうな意識は、スーツのおかげだろうか、なんとか繋ぎとめられた。

「止ま……れええええ————！」

芝生のきれいに植えられた庭を、土を盛り上げて深くえぐつていく。それから庭を通り越して、外周のコンクリートの上で火花を散らしたところで、ようやく動かなくなつた。

プスプスとコンクリートが煙を上げる。庭にいた人たちが大勢、慌ててこっちに走つてくるのが見えた。

「だ、大丈夫？ 怪我はない？」

まずは女の子の安否を確認。外傷はないはずだけど……

「だ……だいじょうぶ……」

クルクルと目を回していた。あんな無茶に付き合わせたんだから、それも仕方ないか。

……でも、無事だつた。助けることができた。守れたんだ。

「良かつた……」

安心したらガクッと体の力が抜けた。それから限界だつたらしい。身にまとっていた装甲は、一瞬光つたかと思つと、もう消えていた。まぶたは重くて、目を開けているのがつらい。

「あ、お父さん！！」

「マユ！？ 無事か！？ 怪我は！？ 大丈夫か！？」

「うん、平氣！ このお兄ちゃんが助けてくれたの！？」

「ああ、そうだな……つておい！？ お前さん大丈夫か！？ おい、

タンカだ！？ 誰かタンカ持つてこい！？」

マユ？ 名前、マユってことのか……なら、ホントに、守れてよ
かつた……

その安堵がとどめの一押しだった。他の人が近づいてくるのと、逆に周りの喧騒は自分の耳からどんどん遠ざかっていく。

そういうえば、俺はどうしてここにいるんだっけ……？

まあ、今はそんなことこのいか……

頭の中はぱじぱじぱじぱじしたまま。だから今は、何も考えないで眠りたかった。

「君！ しつかりして！！」

「お兄ちゃん！？ 大丈夫！？ お兄ちゃん！？」

ほんのちょっと前まで、モビルスーツに乗つて戦つていたのに……次に気付いたら、ステラに会えて……

今度は妙なスーツ着て、空を飛んでいて……

明日が、急に加速したみたいだ。

明日を生きるって大変だな

プロローグ『加速する昭和』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて溶けてしまいま
す。

お気軽に「感想をください」。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第一話『図書の回かつ先と、学園生活の始まり』（前書き）

以下の事に「注意ください」。

- ・キャラ崩壊しているかもしれません。「注意ください」。
- ・作者の力量不足により、「都合主義の超展開になつております」。
- ・これまた作者の力量不足により、「話が中途半端になつております」。

申し訳ありません。

第一話『明日の向かう先と、学園生活の始まり』

やつぱり、思い出しても意味が分からない。
マコつて名前の女の子を助けて、眠っちゃつて……目が覚めてから聞かされた話は、あまりにも非現実的すぎた。

まず、ここには俺のいた世界じゃない。

「コーディネイターはいないし、宇宙にプラントはない。地球にはオープなんて国もないし、おまけにあんな悲惨な戦争状態でもない。Z A F Tのこととか、モビルスーツのこと聞いても、そんなことは知らないと返されるだけだつた。ありえない、とは思つたんだけど……新聞にテレビ、それ以外にも自力で手に入る情報を全部確認してみたら、どうやら本当らしかつた。

ちなみに、建物の火事については……原因は不明らしい。武器の開発室から出火したせいで、可燃物や爆発物に燃え移つたりしたのがあれだけの大火灾に繋がつたらしい。でも、自動制御の防災機能が全部停止していたことが調べで分かつた。それに肝心の、どうして開発室から火が出たのかは、結局分からぬそうだ。

身元は不明だし、相手からすれば、意味の分からないことを言うこともあって、当然、初めのうちは俺が犯人じゃないかつて疑われた。事情聴取されたり、いきなり病院に連れて行かれそうになつたり、今度は怪しげな嘘発見器にかけられそうになつたり大変だつたけど……なんとか俺の言つてることは嘘じやないつて信じてもらえた。

かばつてくれたのは葛城さんだつた。

葛城さんつていうのは、俺がいた建物……「日本I S 技術開発研

究所・通称『葛城研』の主任の人で、マコのお父さんで……見た目はだらしないオッサンだけど、かなり偉い人らしい。研究所も政府直属の研究機関ってことで、すごい重要な場所みたいだ。

葛城さんは、俺の言うことを信じてくれて、頼る当てのない俺の面倒をずっと見てくれた。それにも色々理由があつて……大きな理由の一つは、俺が動かしたあのパワードスース……『IS』だった。

『IS』っていうのは、正式名称だとインフィニット・ストラトスっていう飛行型のパワードスース。宇宙進出に望みをかけて作られたらしいんだけど……戦争がしたい最低な奴らはどこにでもいるみたいだ。ISはその性能を『兵器』として使われるようになつて……結果として今は『スポーツ』として、各国の威信をかけて取り組まれているらしい。

俺のいた世界だつたら、「戦争するのはもう金もかかつて嫌だから、モビルスーツは兵器じゃなくてスポーツ用にしましょう」ってところか……？ モビルスーツでプロレスだなんて、きっと「頭部を破壊されたら失格」とかいうルールができるんだろうな。どうして『スポーツ』のかつて？ 実は……ISには、『兵器』としてはとんでもない欠陥があつた。なんとこれ、「女性じゃないと使えない」。そのせいで、女性の地位は飛躍的に向上し、この世界はどこでも「女尊男卑」の風潮。ここまで聞いたところで、俺の頭は一度パンクしそうになつた。

女性にしか使えないって言つたのに、じゃあ俺の動かしたアレは？

それが納得できなくて聞き返したけど、返ってきた言葉は「分からん」の一言。俺と同じ口にISを動かした男がいるらしいけど、こんな例は世界中どこにも無かつたらしい。

それどころか、俺が動かしたIS『イグナイティッド』は、女性でも動かせなかつた『欠陥中の欠陥機』で……パソコンでデータを取

れるだけ取れるよつにして、後は倉庫にうつちやつてた、いわゆる出来損ない。でも、ISの中心部分のコアは動いたまで、後で確認したら、追加装備の設計に特殊装甲の形成とか、勝手にしてたそつだ。設計された装備の製造は、研究所が急ピッチでやつてくれた。そういう訳で、俺はISを動かせるつて理由でこの国……日本の政府の人たちに、国籍とか戸籍とか、身分証明になるものをすぐに発行してもらえた。國のお偉いさんにとって、自国所属のIS操縦者が一人増えるだけでも大きな力になるから、なんとしても囲い込んでおきたいつてことみたいだ。ISのコア自体は登録されたものだから、自分の国のものだつて言い張れるし。外部にも俺の情報はあまり出していないつて話だ。

それで国の研究所の責任者としては、データを取ると監視に都合がいいからつて言つて、葛城さんは俺を研究所に置いてくれたんだ。

『なあに、安心しろ。お前さんがそれを動かせる限り、誰も下手に手出しへできないさ。

それに、お前さんがマコを救つてくれたんだ。これぐらい……あの子の親としてさせてくれ。マコもお前さんこのことを気に入つてるからな』

笑つて言つてくれたその言葉が、とても嬉しかつた。

それからは、1ヶ月以上の研究所での生活。ISとかこの世界のことを勉強して、実験のためにISを動かして、葛城さんの子ども……マコと遊んで。お母さんは、早くに亡くしたそうだ。マコは俺を見つけると飛んでくるから、空いている時間はほとんど、マコと一緒にいた。一人で料理をしたり、テレビを見たり、動物園に連れて行つたり……戦争がないつてことは本当に平和で、まるでオープに戻つたような時間が続いた。

こんなに幸せでいいのかつて、初めのうちはずっと思つてたんだけど……マコに言われて、俺は自然に笑えるようになつてたことに気付いた。誰だって、自分の大事な人には幸せでいてほしいって言つて……今の生活を、受け止められた。

もちろん、帰るつもりがないわけじゃない。まだあの世界でも、俺のできることがあるはずだって、はつきりと分かつた。戦争のない、平和な世界の大切さはここで暮らしていく、あらためて感じた。……俺は戦争を無くすために戦う。それには、誰かにすがらないで、自分で答えを選ぶことをしなきやつて、思えるようになつたんだ。

……けれども、帰る方法は全然見つからなかつた。葛城さんでも、俺が元の世界に帰る方法は、さっぱり分からないつて言つてたし……

それに、そのまま研究所暮らしをしていられるわけじゃなかつた。俺は公立IIS学園の入学を決定させられたんだ。しかも半強制。IIS学園は、日本にあるIIS操縦者の養成機関で、世界の各国から生徒が集められて、候補生として勉強をする場所……だそうだ。

まさかアカデミーを出た後に、また学校に逆戻りなんて思わなかつた。けど、国にも建前つてものがあつて、ここに入学させないと政府としても面倒なことになるらしい。卒業後もうちの国でよろしくつて偉そうな人たちが頭を下げている光景は、スポーツのスカウトそつくりだつた。

それで俺は、今日からは学校での寮生活が決定していた。マコと離れるのは寂しいけど、IIS学園は全寮制だから仕方ない。居候生活も、結構心苦しいし。

とにかく俺は、田の前の明日を精一杯生きるだけだ。それが約束なんだから。

失つた過去も、今ある現実も、その先の明日も……大切なものの全てを、守つてみせる。

みんな見ててくれ……！　俺は今度こそ……！

せうやつてIIS学園に勇んでやつて来たのが、ほんの少し前のこと。

さつきまでの真面目な話はどこへやら……今の俺は校門の前でプレッシャーに負けて、頭を抱えたパンダな状況だ。

ええい！　このままここに突っ立ってても、埒があかない！

頭から手を離して、貝殻の欠片を通した首飾りを握りしめる。ステラにもらつたものを模した、俺のIIS『イグナイティッド』の待機状態だ。

……ステラ、俺に力を貸してくれ。

ほんの少しの間目を閉じて、よし、覚悟完了。意を決して、足を踏み出す。

それに、希望はある。

俺と同じ日に、この学園の入試でIISを起動させた男子。そいつと一緒になら、きっとこの現状から抜けだせる。

視線の集中砲火にざわめきの網をかいぐつて、俺は教室に向かつて歩き出した。

「えーっと、1年、1組……あつた、ここだ

俺のクラスは1年1組。扉は残念なことに閉まっていた。扉の開く音で、確実に視線がこっちに向くから嫌だったのに……はあ、しようがない。

なるべく音を立てないように開けたけど、教室の中にいた女子が何人か俺に目を向けてた。

あれ？ 男子が一人？

誰かがそう言つたら、教室中の目が俺を捉えてざわざわと困惑した声が覆つた。

でも俺はそんなこと気はならなかつた。俺の視線の先には、
に座つて、文字通りに身を縮めている男子がいたからだ。

手一杯なのか、まだ俺に気づいていない。気持ちは痛いほどよく分かる。

教室に入ったら、さわめいていた教室は水を打ったように静かになつた。コシコシといつ足音だけが響く教室のど真ん中、最前列の席へ。

「良かつた。同じクラスになれたんだな」「え……？ だ、誰だ？」

俺に向けられたのは、困惑と驚愕の入り交じった表情。でも、すぐにはほつとした、安心の表情に変わった。同じ存在を見つけて安心感が、身をまとっていた緊張を急速にほどいていく。

「男子……俺以外の……！」

「ああ。俺、シン。シン・アスカっていうんだ。よろしく」「あ、俺は一夏。織斑一夏だ！」よろしくな！」

そして交わされる硬い握手。次の瞬間、割れるような……

「 「 「 もやああああああああああああ——」

本当に窓ガラスが割れるんじゃないかなって思えるぐらいの、悲鳴にも似た叫びが教室を振るわせた。

「男子！ 嘘！？ 何で一人！？」

「やつた！！ 神様このクラスに入れてくださつてありがとひびきります！！ 来年のお賽銭は奮発して500円入れます！！」

「男の熱い友情！！ 今年の夏コミはこの一人で決まりね！！」

きやあきやあとはしゃぐ女子の集団。他の教室からも、何事かと人がわらわら集まってきた。おいおい……さつきより状況が悪くなつてるぞ……

真剣に教室外への脱出も考え始めたところで、都合よくチャイムが鳴つた。女子は全員クモの子を散らしたみたいに去つていいく。助かつた……

「席、隣みたいだな。改めて、これからよろしくな

一声かけて席に着くと、一夏も笑つてそれに答える。

一夏はかなり気さくな性格みたいだ。良かつた。これなら打ち解けるのもすぐだらう。

「俺のほうこそ、男子一人で心細かつたから助かつた。あ、呼ぶときは一夏つて呼んでくれ

「ああ、俺もシンでいいよ」

軽い会話を交わすけれど、それもすぐに緑色の髪の女の人が入つてきて終つた。

……あれ、試験の時の人だ。副担任の山田真耶つて自己紹介したから……先生だったんだな。てつくり生徒だと思ってたんだけど。

「それでは畠さん、一年間よろしくお願ひしますね」
「…………」

可哀想なことに真耶先生に反応する声は全くなかつた。俺も「反応してあげたかつたけど……背中に感じる視線がそれを妨害する。正直、甘い考えだつた。男子が一人なら、少しさはこの視線の雨も納まるんじやないかつて。そんな単純じやなかつた。

珍獸が一頭に増えれば、それに伴つて視線の質が一倍に……つまりはパンダの抱き合わせだ。周りのお客さんは大喜び。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えつと、出席番号順で」

ここは学校の教室じゃなくて、作戦前のブリーフィングルームの間違いじやないのか？俺の知つている教室とは、緊張感がまるで違つた。余裕が、ない。

一夏も俺と同じみたいで、ちらりと畠を窓側に向ける。畠が合つたその女の子はふいと顔をそむけ、心なしか一夏は肩を落としていた。知り合いか何かか？

「えつと、次は……シン・アスカくん。自己紹介お願ひしますね」「は、はい！」

もう自分にお鉢が回つてきた。ヤバい、何も考へてない……振り向いて教室を見渡す……視線が痛い。下手なことを言つわけにもいかないし、逆に何も言わないのも問題ありそつだしひ……

「え……し、シン・アスカです。一年間よろしくお願ひします」

そう言つて頭を下げる合間にも、脳をフル稼働させて次の展開を

模索する。

何をしゃべれば良い？ ありきたりだけど趣味についてか？ しまった……趣味なんて読書ぐらいしか言えないぞ。な、なら得意な事は……ナイフ戦か？ いや、物騒すぎて確實に周囲は引く。他には……モビルスーツの操縦なんて言えるわけないだろ……！ まずいマズイ不味い……！

「えへっと、アスカくんは皆さんより年が一つ上ですけど、特例でこの学校に入学することになりました。皆さん仲良くしてくださいね」

「こいつ笑って付け加えてくれた山田先生。助け舟、ありがとうございます。」

「年上なんだ。あこがれちゃうなー」

「年上！？ ならシン×一夏より、一夏×シンよね……」

女子の反応の声が、俺に再考の猶予をくれる。年上……そういうばそつだっけ。よし、これを取つ掛かりにすれば……！」

「えっと、俺は皆より年上だけど……ぜんぜん気にしないで、俺のことは気軽にシン×て呼んでくださいー。敬語もいりませんー。とにかく、よろしくお願ひしますーー！」

なんとかここまで言つて、勝手に席に座つた。もうこれ以上は無理だ。女子はまだ不満をうだし、山田先生はオロオロしてゐるけど……申し訳ありません、無理なんです。

はあ……悪いけど、まともな自己紹介は一夏に頼もつ。

「……織斑一夏くん。お願ひします」

「は、はい！」

お、一夏の順番か。どうだらう、俺より上手くできるのかな？

「えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

とりあえず最初に自分の名前を書く。問題は次からなんだけど……一夏を見上げてみれば、まだ緊張した様子で……次のセリフが出てこない。

少しの間を置いて、口を開いて出た言葉は……

「え……以上です」

数人の女子が、がたたつと机を揺らした。そんな期待するなよ！
あれ凄くツラいんだぞ！？

心中で一夏のフォローをしていると、ふと、立ち尽くしている一夏の背後に誰か近づいて来たのに気付いた。その人は手にしていた出席簿で一夏の頭を叩く。すさまじい速さと正確さ。

「げえつ、関羽！？」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

まるでコントのようにスパスパ頭を叩かれる一夏。息もぴつたりだ。

凛とした、つて形容するのが一番合つだらう。黒のスーツを着こなして、鋭い目をクラスに向けるその人のまとう雰囲気は……軍人のそれと全く同じだった。

女人人は織斑千冬つて名乗った。織斑……つてことは一夏の親戚

なのか？ 知り合いつぽいし。まあ、それは後で聞いてみるとして

……

「逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。いいな

やつぱり軍人だろ、この人。アカデミーの教官たちと言つてゐるところがよく似てる。

そんなことをぽんやつと思つていたら、背中から強烈な歓声が俺を襲つた。

「キヤアアアア――――千冬様、本物の千冬様よ――
「私、お姉さまのためなら死ねます!」

歓声は衝撃つて言つても良いぐらいで……な、何なんだよコレ――?
? 俺の知つてゐる学校と全然違つぞ―― ラクス・クラインのコンサート会場!?

羨ましい事に、気圧されて身をすくませてゐる俺とは違つて一夏は落ち着いていた。

「で? 挨拶も満足にできんのか、お前は

「いや、千冬姉、俺は

「学園では織斑先生と呼べ

「……はい、織斑先生

落ち着いてはいたけど、何度も頭を叩かれていた。理不尽だ。これは羨ましくない。

そんなやりとりをしていくと、ようやくチャイムが鳴つた。そんなに時間がたつたはずじゃないんだけど……

ショートホームルームでこれだけの密度かよ……この先が思いや

られる……

ため息が出たけど、それもチャイムの音でかき消された。

「ゴメン。年、一つ上だったのか。ホントに敬語なしでいいのか?」「いいくつていいつて。気を使われるのも嫌だし」「そう言つてくれると助かるよ……なにせ二人だけだもんな……」「ああ……だよな……」

一時間目が終了した休み時間。俺達は一人して、教室の雰囲気に呑まれつつあった。それはそうだろう? 俺達の見物に来る生徒が、他の学年からも来歩いて廊下まであふれてるんだし……

「ちょっとといいか」「え?」

そう言つて一夏に近づいてきたのは、窓側に座つていたさつきのポニーテールの女子だった。なんだか不機嫌そうな顔で、雰囲気も硬い。

「……算?」「やつぱり一夏の知り合いか。誰なんだ?」「ああ、幼馴染の……」「篠ノ乃だ……こいつを借りていいくぞ。廊下でいいな?」「あ、でも……」

俺の方を横目で見る一夏。猛獣の檻に一人残していくようなことが心配だつたらしいけど、知り合いがいるなら邪魔をするのも悪い

だろう。

「俺のことはいいから、行つてこいよ」

「ああ、わらい……」

二人は廊下に出て行つた。後にぞろぞろと女子を引き連れて……視線の半分ぐらいはそっちに誘導された。ふつ、これで少しは……

「あのつ、アスカくん!!」

「へ……？ うわつ！？」

安心した途端に、俺の机の周りは女子に包囲されていた。さつき篠ノ乃が一夏に声をかけたのがきっかけで、皆が後に続けといわんばかりにこっちに寄つてきたみたいだ。

「ねえねえ、ISを動かしたのはいつ！？ どうやって！？」

「趣味は！？ 特技は！？ 好みの女の子のタイプは！？」

「身長・体重・座高に血液型は！？」

「同じ学年だけど、先輩つて呼んでもいいですか！？」

「男の子に興味は！？ 攻め、受けどっちが好き！？」

質問が機關銃のように浴びせられる。当たり前だけど、全部に答えられるわけ……というかいつぺんに言われたら……

「ご、ゴメン！… 一斉に質問されても答えられない！…」

「あ、そっかー。じゃあ、アレ用意しなきや…」

そう言つとみんな大人しく席に戻つていつた。ん……？ アレつて何だ？

首をひねつていたらチャイムが鳴つて、一夏と篠ノ乃が帰つてき

てた。篠ノ乃是相変わらず不機嫌な顔つきのままで、一夏はそれを見て首を傾げるばかりだった。

後で発覚したんだけど、アレとは分厚い質問表のことで、俺と一夏はそれを書かれるはめになった。勘弁してくれよな……

「悪いな、シン……いきなり迷惑かけて……」

「気にするなよ。まあ、電話帳と間違えた、は流石にマズイと思つけど……」

今度は一時間田終了後の休み時間。机にうなだれながら一夏はさつきのことと謝つてきた。

といつのも、一夏は授業の予習を全くやつていなかつたらしい。必読のはずの参考書を、電話帳と間違えて捨てたというのが原因で、それに、正直にそのことを話してしまつたせいで、また織斑先生に頭を叩かれていた。

そういうわけで、参考書の再発行までは、俺と一緒に参考書を使うことになり……ついでに、授業の補修も俺と受けることになつた。実は俺も、参考書はたいして頭に入つていなくて……ISの動かし方に整備の仕方、IS戦闘の戦術とか……そういうのばつかり勉強していくたせいで、他のことはさつぱりに近かつた。

俺だつて昔と違つて『ISなんて、実際に動かせりやそれで良い』なんて思つていないわー。ただ、『他は……別に後回しでもいいや』つて思つてただけだ！

「ど、とにかく放課後はがんばろうつなー。あつとなんとかなるつて

！」

「や、そうだよなー！」

「ちょっと、そこのおー一人、よろしくて？」「

「ん？」

「へ？」

無理に一人で作り笑いをしていたら、長い髪をした金髪の女子が近づいてきた。手を腰に当てるその姿は、ビートなく品がある……気がする。

「また一夏の知り合いか？」

「いや、知らないけど……」

「わたくしを知らない？」このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？ やはり男というのは……一人もいるとは聞いていませんでしたけど……まあ、程度が知れますわね」

その口ぶりは、知らないという俺達をあざけるようで、気持ちの良いものじゃなかつた。なんなんだよコイツ……代表候補生とか言つて……あれ？ 代表候補生つて何だ？

目の前の女子に聞くのも癪にさわるから、隣の一夏に聞くことにする。

「「なあ、一夏」」

そう言うと俺達は顔を見合わせた。きょとんとした顔で。

「「代表候補生つて何？」」

きれいに声が重なつた。ついでに、クラスの女子が数人ずつこけた音も聞こえた。

「「……へ？」」

間の抜けた声もきれいに重なった。どうやら俺達はお互に、最低限知らなきやいけないことも知らないぐらい勉強が足りないらしい。今日から眞面目に勉強しよう……心に固く誓つた。

セシリアとかいう女子はわなわなと肩を震わせて、机を勢いよく叩く。

「あなた方、本気でおっしゃつてますの!~」

「おう。知らん」

「白痴げに言つなよ……」

言い訳は無駄とでも言つよう、堂々と言い放つ一夏。変に見栄を張らないだけ立派といつて、バカ正直といつて、あんまり人のこと言えないけどさ、俺も。セシリアも呆れてぶつぶつ何かを呟いていた。

「で、代表候補生つて?」

「国家代表 IIS 操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……単語から想像したらわかるでしょ?」

「そういわれればそうだ」

一夏はさらりと会話を流していく。といふか、代表候補生つてそれだけのことだったのか。

「そう……エリートなのですわ!」

俺たちの様子にお構いなく、また機嫌よくしゃべりだした。エリートなのを殊更強調したいらしい。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくす

ることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける?」

流石にううとうしくなってきた。でも、相手をしなことうるやこだらうし、したらして面倒くさい……まつたく。

「そうか。それは俺たちラッキーだ」

「……あなた方、馬鹿にしてこますの?」

「別にそんなわけじゃないぞ」

俺も一応の否定はしたものの……一夏まで、軽く皮肉混じりの返答になつてきた。

「まあ、わたくしは優秀で優しいですから……ISのことで分からぬことがありますがあれば、そうですわね、泣いて頼まれればあなた方に教えて差し上げないこともなくてよ? 何せわたくし、入試で、唯一! 教官を倒したエリート中のエリートですから

「あれ? 俺も倒したぞ、教官」

「あれって倒せば合格じゃなかつたのか?」

「は……?」

そう言えば入学が決定した翌日には、試験つてことで研究所で模擬戦をした。相手はあの山田先生で……全然向かつてくる気配がないから、こつちから仕掛けで、組み倒してナイフを首に当てて終了。何でこつちに来ないのか不思議だつた。教官なら、避けられて壁に衝突して沈黙、なんてドジな事もしないと思うのに。

「わ、わたくしだけと聞きましたが?」

動搖を隠しきれない様子で、セシリ亞が言った。そんなこと俺達

に聞かれてもな……

「女子ではってオチじゃないのか？」

一夏が答えた後、ピシッと何かに亀裂が走る音がした。あ、たぶんコレ危険信号だ。

「あなた方も教官を倒したと、そういうことですのーー？」

予想した通り。ヒートアップして顔を真っ赤にしながら、セシリアがこっちに詰め寄る。今にも掴みかかりそうな雰囲気だ。

「お、落ち着けよ。な？」

「そうそう、一度落ち着いたほうが……」

「これが落ち着いていられ」

授業開始のチャイムの音が鳴つて話を遮った。今の俺達には鐘の音が福音に聞こえ

「また後で来ますわ！ 逃げないことね！ よくつてーー？」

第一ラウンド終了の「ゴング」インターバルだった。三時間目の後には、もう一度戦いの「ゴング」が鳴る。

「シン……審判はどこだ？ 降参だ、タオルを投げ入れてくれ」
「逃げるなって言つてたから……そんなことしたらリングの外で乱闘だな。さつと」

お互の考え方を読めたわけでもないのに、俺達の口からは打ち合わせたかのような言葉が出た。一人で顔を見合わせて、ため息。

「「はあ……」」

今度のため息は、教室に入ってきた織斑先生の声にかき消された。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間田の教壇に立つのは織斑先生みたいだ。山田先生までノートを取り出しているんだから、大事な授業なんだりつ。へつへーん、これならばつちり予習してあるぞ！

内心でガツツポーズを取る俺。背筋を伸ばして、さあ授業

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな

「クラス対抗戦に、代表者？ 織斑先生、そんなの後回しにして授業してよ、授業。」

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

俺の思いも虚しく、代表者についての説明を丁寧にする織斑先生。普通の学校でいつ学級委員長つてことか。まあ、誰かがやつてくれるや。

「はいっ。織斑君を推薦します！」「私もそれが良いと思います！」

一夏を推薦する声が女子からあがつた。隣の一夏の顔をつかがつてみれば、心ここにあらず、といった顔。気付いてないな、コレ……

「一夏、お前の名前呼ばれてるだ？」

「……は？ ちよっ、俺！？」

「自薦他薦は問わないぞ。他には？」

一夏は慌てて席を立つけど、流れはこのまま一夏で決定だろ

「はいっ！ 私はアスカ君派ですっ！！」

「そうそう！ アスカ君の方が良いと思いますっ！！」

……流れが変わった。とこりより、分断した？

「え？ 私は織斑君の方が良いな。なんだか優しそう」「いや、ここにはアスカ君じゃない？ あの赤い目、かつここにょ～

「私は……織斑君の方がタイプかも」

「いつそのこと二人まとめては、ダメ？」

クラス中がきやあきやあ騒ぎ出した。ていうか俺もかよ！？

「待つてくれっ！ どうして俺も！？」

立ち上がり振り向けば、期待やら好奇心やらの視線が俺を貫いた。恐る恐る隣の席の子の顔を見れば……『ごめんなさい、でも、私は織斑君派なの。あなたの気持ちには応えられないわ』みたいな

顔をして、目を逸らしていた。いや、俺にはそんな気持ち無いから。後ろの席の子は……『大丈夫ですっ！ 私はアスカ君派ですっ！』つていう顔でにっこり笑い、親指をぐつと立てていた。えっと、全然大丈夫じゃないから。

「静かにっ！ 織斑、アスカ、一人とも邪魔だ、席に着け。推薦は二人、投票で良いな？」

織斑先生の容赦のない一声。一夏と二人で待つたをかけようとしたその時、俺達より先にセシリアが声を張り上げた。

「待つてください！ そのような選出認められません！」

ああ、俺も認められない。もつと黙ってくれ。ていうが、あんたが代表になつてくれ。

「大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ このセシリ亞・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……どういう意味だ、それ。

「物珍しい」という理由だけで極東の猿にするなんて、わたくしのような島国にまでサークスをしに来たのではなくてよ！』

……おい。なんだよ、その言い方。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！』

「おい。分かつたからもつ良いだろ。静かにしてくれよ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない」と自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で

「ブチッ！ コイツ！ いい加減にしろよ……」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なつ……ー？」

「そこのヒリート様だつたら、そもそも立派な料理ができるんだらうな。あんたは」

「なつ！？」

堪忍袋の緒が切れた。後ろをこりみつけてやれば、セシリアは顔を真っ赤にして怒り狂っている。

「あつ、あなた方！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「ヒリート様のくせに、そんなことも分かんないのかよ？」

「なつ、なんですつて！？」

一夏ははつと、言ひ過ぎたつて顔をしていたけれど、俺の方は売り言葉に買い言葉。勢いは止まらなかつた。

「おー一人、決闘ですわ！」

セシリアが思いつきり机を叩いた。上等だ。相手になつてやる。

「おう。いいぜ。四の五の言ひ分けはすこい」

「ふんー、やつてやるやーー！」

一夏も覚悟したようだ。もう引くに引けない状況だから当然か。

「決闘は一対一、わたくし一人ですが……まあ、ちょうど良いハンデでしよう」

「そうだな、二対一なら負けても言い訳になるもんなんあ？」

「つー？ あなた、まだ言いますのつー？」

「いい加減にしないか！……話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。三人とも用意しておこう。それでは授業を始める」

織斑先生が手を叩いたところで、話が終った。

さつきまでクラスを包んでいた熱気も、沸騰していた俺の頭も、授業が進めばすぐに収まつていった。

……冷静になれば、言い過ぎた。この国の人を馬鹿にするようなことを言われて、我慢の限界で、俺達一人とも口が滑った。ケンカ腰で相手に突つかるのは良くないって、艦で学んだはずなのに……よみがえるアスランとの確執の日々。お互いに自分のことを話さず、相手の言つことを聞かず、衝突し、すれ違い、拳旬の脱走、追撃。そして

ああ、悪夢だ。そんなことはもうゴメンだつて思つたのに……

……まあ、仕方ない。話して聞く相手じゃなさそうだし。

それにイギリス代表候補生だかなんだか知らないけど、そんな相手に負けるぐらいじゃ……明日を、大切な全てを守るなんてできやしない。

勝つてから、セシリ亞にちゃんと謝るとしよう。

そうだ、後で一夏にも謝らないと……ケンカを売ったのも半分以上は俺なんだし。

いや、今は田の前の授業に集中しなきゃ……

黒板の板書が、気付けばとんでもない量になってる。慌てて俺はノートにペンを走らせた。これからまた、大変そうだ。

第一話『明日の向かう先と、学園生活の始まり』（後書き）

いつも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくてひびが入ってしまいます。

お気軽に「感想をください」。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第一話『本当の決闘は明日...』（前書き）

以下の事にご注意ください。

- ・勝手な都合により掲載が大幅に遅れました。この場を借りて謝罪します。すみませんでした。
- ・相変わらずのご都合、急展開です。
- ・今回特に期間が開いたため、違和感が生じる箇所があるかもしれません。

第一話『本当の決闘は明日一』

「うう……い、意味が分からん……シンは分かるのか？」
「なんとなく……つてぐらいかな……」

入学式の日。放課後になり、俺と一夏は机に沈没していた。
一日の勉強もあんまり理解できるものじゃなかつたうえに、慣れ
ない環境の追い打ち。女子はみんな俺達について来るし、こっちを
指差して何か言つてるし……現在進行形で。

「あ～、まるでウーパールーパーだな」
「ウーパー……？ なんだそれ？」
「昔流行つた珍獣の名前。どんな動物かは知らん」
「だつたらパンダの方が分かりやすくないか？」
「パンダ……どっちにしろ珍獣だな」

珍獣からは脱却出来そうになかった。しばらくは透明な檻の中の
珍獣さんか……
レイ、助けて。俺達パンダになりたくないよ。ウーパーなんとかも
嫌だけど。

「織斑くん、アスカくん。良かつたです。まだ一人とも教室にいた
んですね」

顔を上げれば、そこに立つていたのは書類を手にした山田先生だ
った。

「はい？」
「どうしたんですか？」

「えっとですね、織斑くんの寮の部屋が決まったので……はい、これが番号」と鍵です。それに、アスカくんも」

ああ、鍵は今日受け取ることになつてたつけ。俺達一人はそれぞれ、部屋の番号が書いてある紙に鍵を受け取つた。全寮制つてのは聞いてたし、俺も慣れてるから問題ない。ただ……部屋の番号が俺と一夏で違つのが気になつた。男一人で相部屋、じゃあないのか？

「俺の部屋、決まってないんじやなかつたですか？ 一週間は自宅から通学つて話でしたけど」

「今日から寮に入るのは決まってたけど……一夏と同じ部屋じゃないんですか？」

一人で山田先生に質問をぶつけると、先生は少し言ひにくそうに俺達に説明を始める。

「織斑くんの方は、寮に入れるのを最優先にしたみたいで……用意していた個室はアスカくんの方に割り当てられたので、しばらくは織斑くん、相部屋で我慢してください」

説明を受けて納得はしたもの、女子との相部屋といふことで、一夏は少し戸惑つてゐるようだつた。なんで俺の方が個室なんだ？ 女子を一人個室に入れれば……

そう思つて口を開きかけたら、山田先生がヒソヒソと声をひそめて言つてきた。

「アスカくんの事はまだ、あまり政府は情報を出したがらないみたいで……個室になつたのも、そういう理由なんです。少しだけ、ガマンしてください」

言つてしまえば正体も身元も不明だつた俺に関しては、政府も慎重になつていいみたいだ。表立つて出てた情報も、ほぼ全部一夏のものだつたしなあ……そのせいで、一夏の方は大分面倒なことになつてゐらしい。身代わり羊みたいで、ちょっと悪い気がする。

「なんか俺だけ個室つて悪いな。ゴメン」

「別にシンのせいじゃないだろ？ そんなこと言わなくていいって手をひらひらさせながら一夏が答える。『氣の良い奴だな、ホントに。』

「で、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰つていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配をしておいてやつた。ありがたく思え」

そう言つて威圧感たっぷりに登場したのは織斑先生だつた。そのフレッシュシャーがあまり俺の方に向いていないのは幸いだけど、一夏の方は悲惨だ。同情する。

「ど、どうもありがとうござります……」

「まあ、生活必需品だけだがな。足りないものがあつたら、アスカ、お前が貸してやってくれ」

「はい、了解です」

「……敬礼はいらん。ここは軍隊じゃない」

「えつ！？ あ、すみません」

気付いてみれば右手を上げたあのポーズ、勝手に体が敬礼をしていた。ちょっと周りを見てみたら、皆が不思議そうな顔をしている。いけない。この人の雰囲気、軍の人たちそつくりだから……気をつけ

けよ。あんまり良い顔してないし。

「じゃあ、時間を見て部屋に行つてくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取つてください。大浴場は……今のところ二人は使えません」

「え、なんですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

自分の言つたことの意味に気付いて、がっくりと一夏がうなだれた。周りが女子だけつて大変だ。風呂に入るつていう当たり前の事にも、気を使わなくちゃいけない。

「えつと、それじゃあ私たちは、会議があるので、これで。アスカくん、織斑くん、道草食わないで、ちゃんと寮に帰るんですよ」

食いませんよ。食べるところを見物されて指さされるのがオチですから。教室を出て行く二人の背中に、心の中で呟いた。設備の見学は……明日アリーナと整備室の場所だけ確認しておこう。後はまあ、おいおいで構いやしないさ。

「千冬姉も、自分のフレッシャーを分かつてくれよな。敬礼の一つや一つも自然と出るつて、なあ？」

「え？ あ、うん。織斑先生、ちょっとおつかなぐてぞ」

さつきの敬礼の事を冗談めかして、一夏が笑つた。つられてこっちも笑うけど、やっぱり敬礼するのは不自然だつたかな……いや、あれぐらい、大丈夫だろ。

「じゃあ、部屋に行つてみるか。後でシンの部屋にも行つてみていか?」

「もちろん。何かあつたら俺の部屋に来てくれよ。相部屋だと、大変だらうしな」

「悪い、ホント助かる」

回りのまじめ声に反応する氣力も、とっくに失きてる。一人で席を立つて荷物をまとめて、外に歩いていった。せめて部屋だけでも安息の地であつてほしいと思いつがひ。

部屋に入つてみれば、艦にいた時よりはるかに豪勢な様相だつた。シャワーも付いてるし、キッチンまであるし、ベッドは大きこし……ホントに一人部屋?

荷物を部屋の隅に置いて、ベッドにそのまま倒れこんだ。疲れた体をベッドのフカフカが抱きとめてくれて、とても気持ちがいい。

「うえ……疲れた……」

この世界に来てから、久しぶりに慌しい一日だつた。最初の方のゴタゴタさえ無ければ、マユと一緒にのんびりと暮らしてただけだつたから、それも当然か。ああ、そうだ。

制服のポケットから携帯を取り出した。ピンク色の携帯は、オーブにいた時からずつと変わらない。同じマユの写真が入つていて、同じマユの声が聞こえて……それを聞く俺だけが、あの時とは変わつていた。

「はい、マユです。でも、いみんなさい。マユは今、電話に」「マユ……『めんな、俺』

何度携帯を開いても、何度マユの声を聞いても、笑うことなんてできなかつた。いつでもそれは辛いことで、心が苦しくて。思い出すのは楽しかつたことなの。この世界で会つたマコの前では、笑えるよくなつたのに。

「どうして、お前の前じゃ笑えないんだうな……」

同じマユなのに、俺が見せられる表情はまるつ違つ。それじやダメだつて、分かつてはいるんだ。

俺が守れなかつたマユも、今この世界にいるマユも、一人とも俺の大切な人だから。いつか笑つてこの携帯を開けるよつて。過去と明日を守れるよつて。

「俺……がんばるからな。だから、マユ……また明日」

そつと携帯を閉じて制服にしまつて、一日の疲れがどつと押し寄せた。このままうとうと眠りの世界に……まだ食事も済んでないけど、今日はいいか。

部屋の外からはまだいろいろな声が聞こえたけど、それも気にならなかつた。悲鳴のよつな叫びも、ここじゅあ日常茶飯事なんだろうと。

……でも、何かゴスッという硬いもので頭を叩いたよつな音も聞こえた。気のせいかな、うん。

それから決闘の当日まではあつといつ間だつた。

連日の女子の包围網をかいくぐつて、俺と一夏はなんとか学園生活を続けられている。人間、慣れれば案外どうとでもなるんだな。問題なし。

授業は相変わらずさっぱりなモノも多いけど、山田先生が放課後の補修をしてくれるから、なんとかなりそうだ。よし、こっちもオッケー。

補修が終つたら、俺はアリーナでISの訓練。まだISを持つていない一夏には、篠ノ之が指導をすることになつていた。篠ノ之のお姉さんはISの開発者だし、教えるには慣れた人が良いだろうつて話だ。これで完璧。万全の状態で月曜日が……来るはずだつたんだけど。

「なあ、筹。ISのことを教えてくれる話はどうなつたんだ?」

「…………」

「篠ノ之、俺も質問して良いか? それってどうことだ?」

「…………」

「「目をそらすな」」

事態は深刻。一夏の訓練はほとんど剣術だけで、肝心のISの訓練ができていない。おまけに、一夏は専用機すら届いていない。つまり、戦えない。万全どころか、問題外。

「篠ノ之! お前が『一夏には私が全て教えるから、任せとおけ』って言つたんだろ! どういうことだよ!?」

「あ……ISも無しに訓練などできないのだから仕方がないだろう!」

「だからって、知識とか基本的なこととか、もう少し教えてくれても良かっただろ!?」

「…………」

「「目をそらすなつー!」」

当口まで安心しきつていた俺達は、現状が非常に危ういことなんの疑問も持たなかつた。一夏は俺に聞くつて選択肢を忘れていたし、俺は俺で自分の訓練に夢中で……

三人とも、一の句が継げなかつた。アリーナのピットを、重々しい沈黙が包む。

「「うなつたら俺一人でなん「織斑くんつ！ 専用ISが届きましたよつ！」」

「「え？」」

転びそつた勢いで駆けてきた山田先生。その後ろからは、織斑先生も来ていた。ていうか、もしかして間に合つた？

「織斑、すぐに準備をしろ。ぶつつく本番でもにじりよ。アスカも早く動け。アリーナの使用時間は限られているんだ」

「え？」

「は、はい」

「敬礼はいらんと言つた」

「一夏、この程度の障害は軽く乗り越えてみせろ」

「え、あの……」

「「「早く！」」」

ピットの搬入口が開くと、その向こうには真っ白なISがあつた。騎士の鎧、が第一印象だ。俺が始めてISを見つけたときと同じよう、コイツも一夏のことを見つてゐるみたいだ。開かれた装甲が、そんなことを思わせる。

「これが

「はい！ 織斑くんの専用IS『白式』です！」

「すぐに装着しろ。フォーマットとフィットティングは実戦でやれ、

いいな

「アスカくんも、早く準備しないとつー…」
「了解です」

一夏も準備を始めたんだ。俺も集中しないと。

一瞬だけ目を閉じて、首から提げた貝殻を握りしめる。瞬間に、全身を灰色の装甲が包んで、次いでフェイズ・シフトの白と青が染め上げていく。

光と共に盾が現れて、それを腕に付ける。盾に刻まれた十字を中心、一回り大きく展開した。

アーリーナの先にいる相手の情報が眼前に映し出される。

操縦者セシリ亞・オルコット。『Sネーム』ブルー・ティアーズ。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り
了解。ある程度の下調べはしてきてるから、そこまでは知つてるんだけどな。

「一夏、いけるか？」

「ああ」

「……やっぱり最初は不安か」

「大丈夫だ……つて言いたいけど、嘘はすぐばれるよな

軽く笑う一夏だけ、緊張した声なのはすぐに分かってしまう。俺だって初めてMSに乗った時、訓練だったのに手が震えたもんな。緊張するのは、当たり前だ。後ろの三人も、今は明らかに不安な表情が見て取れる。

「安心しろよ、一夏」

「え？」

「俺が、お前を守るからさ」

「あ、ああ……」

「そうか、手つてみせる。こんなところで負けをせやしない。負けたりしない。」

「フォーマットとファイットティングの時間は俺が稼ぐ。一夏はそれで攻撃は控えてくれ。足を止めるなよ？ 動きまわらないと、良い的にされるからな」

「お、おう。籌、行つてくる」

「あ……ああ。勝つてこい」

黙つてうなずく一夏。ゆっくりゲートが開くと、相手は俺達を悠々と待ち構えていた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

身に付けるのは青いES『ブルー・ティアーズ』。装備はレーザーライフル『スター・ライトmk?』。特殊装備は機体名と同じ自立起動兵器……ドラグーンと同じ、か。セシリ亞の装備は中距離に特化している。一番厄介なのは、あの自立兵器だ。一人同時に相手をするのも苦じやないだろう。

「最後のチャンスです。今ここで謝るのなら、二人とも許してあげないこともなくってよ」

「悪いけど、謝るのは俺達が勝った後だ」

「それに、そういうのをチャンスとは言わないな」

「そう、残念ですわ。それなら」

セシリ亞が一いち方に銃口を向けた。もう試合は開始されているから、撃つてこられても文句は言えない。被口ツクオンを確認、狙いはよし、俺のほうか。

「お別れですわね！」

閃光が走り、空を裂いた。左肩の辺りを狙っていたみたいだけど、それをかがみながら避ける。体を上げながらライフルを手にして、それをセシリ亞に向ける。

「一夏！ 散開するぞ！」

「おうよー！」

一人で左右に分かれ、狙いを分散させる。なるべく同時に射撃が来るよう、ライフルを突きつけてけん制する。

「手に分かれても、わたくし、セシリ亞・オルコットとブルー・ティアーズの前では無駄ですわ！ さあ、仲良く円舞曲を踊りなさい！」

来た。四機のブルー・ティアーズ 言い換えると、ビットつて言つらしい が飛び立ち、一斉射撃を開始する。それもほとんどが一夏の方を狙っている。ファイットイングの済んでいない一夏の機体じや避けきれずに、何重にも被弾していく。

「くつー！」

「一夏！」

「よそ見している暇はなくてよー！」

一夏の援護に入ろうとした俺の前を、レーザーが横切つていった。にやりと笑うセシリ亞。銃口は俺に向いたままで、自分にも一夏にも近づけるつもりはないらしい。それでも、構つてなんていられるか。セシリ亞に背を向けて、スラスターを加速させる。ライフルの

射撃を旋回しながら回避、ビットの群れにライフルを撃つて、距離をとらせた。

「武器は何かないのかつ！？」

「装備、装備はつ！？ 近接ブレードだけかよつ！？」

射撃武器も存在しないらしい。ビットにはほとんど対応する術がないわけだ。なら

「ビットのけん制は俺がやる！ 一夏は被弾しないように、セシリアだけ見ててくれ！」

胸部のバルカンをビットに発射。直撃することもなく、すいと避けられた。ふわりと浮いたビットの照準が一夏から俺に変更される。引きつけられれば、十分だ。

「やつてみせるぞ、俺はあつ！…」

試合開始から三十分近くが経過した。

「一十七分。持つた方ですわね。褒めて差し上げますわ
「そりやじつも……」

正確には一十七分らしい。セシリアの嘲笑に、一夏は力なく答えた。

一夏のエネルギー残量は大分削られたけど、この程度なら十分に持つはずだ。俺も被弾はほとんどないし、ビットの動きもドラグーングに比べればたいしたことない。一夏のT-Uのファイティングが完

「了すれば、このまま勝てる。

「特にあなたはしぶといわね……でも、逃げてばかりでは勝てないのは分かっていて?」

「ふん、逃げてただけじゃないさ」

セシリアは周囲に浮かぶビットを撫で、余裕を見せながら笑う。こっちが意図的に手数を減らしていくことには気付いていないみたいだ。

「さあ、そろそろ閉幕と参りましょ!」

ビットが再び接近していく。四機が俺を囲い込み、レーザーの弾幕を張る。でも、動きがおかしい。俺に当たるつもりじゃなくて、俺が動けないように網を作りあげている。じりじり……っ! そういうことかよ!!

俺がセシリアの目的に気付いた時には、一夏はブレードを構えて相手に突進していた。

隙を見せたのも計算の内だ。

あいつは俺じゃなくて、先に一夏を落とすつもりだ。

「一夏、罠だ! 戻れっ!!」

「遅い、ですわ」

「つ!」

笑みを浮かべたセシリア。間合いに入った一夏が距離を取ろうとしたけれど、間に合わない。スカートからもう一機のビットが外され、一夏を吹き飛ばした。爆発が白い機体を飲み込み、光を放つ。ミサイル しかも直撃だ。

「一夏っ!!」

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機ありますよー。」

黒煙から、ぐらりと落ちる影が見えた。まだシールドエネルギーは残っているみたいだけど、追撃は確実にもらひ。

「邪魔だあつ！…」

右手のライフルから放たれたビームが、レーザーを撃とうとしたビットの一機を吹き飛ばす。不用意に近づいてきた一機のビットも、左手で抜いたダガーで切り裂き、残りの一機を無視して一夏に近づくこの距離じゃ間に合わない！

「お別れですわ」

銃の先に光が集まる。けれど、漂っていた黒煙を吹き飛ばしたのは、レーザーの光じゃなくて、中から現れた眩い白だつた。

その光は一夏の体を包んで、その装甲を作っていく。壊れていた装甲部分も修復され、曲線は鎧の白を一層引き立てて見せた。でも、その騎士の外見とは裏腹に、手にしていたのは東洋の太刀に似た武装。

「ようやく、終つたのかよ」

「ま、まさか……一次移行！？ 初期設定だけの機体でここまで戦つていたって言つの！？」

安堵のため息がもれた俺とは対照的に、セシリアはうつむかえていた。

純白の機体『白式』は、ようやくその本当の姿を見せた。これから、俺達の反撃だ。

で、その一夏と言えば……アレ？ 俺達を無視してぶつぶつ何か言

つてるぞ。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ……俺だつて、守つてみせる」

「……一夏？」

「あなた、何を　　ああ、もつ面倒ですわ！」

セシリアの機体から『サイル搭載のビット』が発射された。右手の刀で一夏はそれを切り捨てて、一気にセシリアの懷に潜り込む。

「おおおおっ！」

その刀身が光をまとつて、鋭い一撃が　　当たる前に、ブザーの音がアリーナに鳴り響いた。

『織斑一夏、失格』

「あれ……？」
「はあ……？」

え？　今、一夏の一撃が入るところじゃ……？　何でだ？

ぽかんとしたまま、その場にいる三人で目を合わせる。俺を含めて、誰一人状況が分かつていない。当の本人も、頭の上にマーケが浮かんでいた。

『織斑、何をしている。お前は失格だ。早く戻つて来い馬鹿者』

織斑先生が、一夏を呼び戻す。俺と一夏は一寸高度を下げて、向かい合つた。とにかく、一夏は失格……なのか？

「なあ、一夏。いったいどうして失格になつたんだ？」

「俺にもなんだか……とつあえず戻らなこと、千冬姉にじびやかれる

「悪い……仕ってやるつて、言つたのに」

「俺のほひーじや、啖呵切つとこにこれじやあな……シン、勝つてくれよ」

「ああ……任せてくれ」

そうだ。試合はまだ続いている。一夏に託された分、しつかり勝つてみせないと。

ピットに戻る一夏を見届けた後、空中で呆けているセシリシアに向き直つた。

「セシリシア！ 決着をつけろぞーー！」

「 つー そうでしたわねーー！」

残つた一機のピットが接近してきた。動きはもう見切つている。バルカンで誘導したところを、ビームライフルで打ち抜いた。爆風が軽く機体を震わせる。

「なつ……ーー？」

ブルー・ティアーズは全機落ちた。武器のエネルギーも十分。今なら、アレが使える。

イグナイトッドの武装画面を開き、装備メニューを選択する。

シリエット選択

呼び出しに応じて、胴体や肩部を染め上げていた青が、炎のよくな赤に変わっていく。

腰にライフルをマウントして、盾の装甲を取り回しやすこよひこ元に戻す。

背中に追加されるスラスター。それに繋がれた、一対のブーメランと大剣。

それは、相手を両断する絶大な力。

ソードシルエット・展開完了

全長を軽く超える大剣を両手に取り、連結させる。高々と頭上に上げ、振り回し、相手に構えなおしたところでビームの刃が現れた。今の今まで温存しておいた、切り札。イグナイティッドの換装装備『ソードシルエット』。インパルスに酷似したその装備は、陽の光を浴びて赤い姿をより強く輝かせる。

「まさか……戦闘中のパッケージ換装！？ そんなことが！？」

「行くぞっ！」

スラスターを全開にして、ライフルを構えるセシリ亞に向かって飛び上がる。照準を合わせる暇も与えないで、一気に飛び込みながら大剣を力任せに振り上げた。

「でやああああっ！…！」

「つ！？」

反射的に盾にされたスター・ライトmk?を真つ二つにして、胴体に強烈な斬撃。ビームの刃は装甲をたやすく吹き飛ばして、相手の体に食い込んでいく。残っていたシールドエネルギーをあつという間に削り取り、最後に剣を振りぬいて弾き飛ばしたところで、セシリ亞のエネルギーは底を突いた。

ブザーの音が決闘の勝利を告げる。俺達の勝ちだ。

『勝者 アスカ・織斑ペア』

「やつたぞ、一夏！」

「シン、すごいな今の一。そんな装備あつたのかよ！」

「へへっ、反撃用に取つておいたんだ」

ピットに戻つて、出迎えた一夏と笑いあう。これで小間使い、奴隸は回避できたわけだ。

「試合が終つたのだから、さつと出で行くぞ。いいな」

「了解、あります」

「敬礼は……まあ、今は良いだろ」

おじけて見せた俺達の敬礼を認めてくれた織斑先生。意外に優しいところもあるんだな……なんて甘い考えを、次の一言が容赦なく蹴り飛ばす。

「忘れていたが……これがTBS起動のルールブックだ。補講の課題として、明日までに覚えるように」

「じやりと落とされた二冊の本は、そりやもつ辞書みたいな分厚さで……これを明日まで？ やつぱり鬼だ、この人……」

「何にせよ今日はこれでおしまいだ。帰つて休め」

あんた休ませる気なんてないだろっ！ と突つ込みたいのをぐつと飲み込んで、一人でそのルールブックを手にする。重い、ページはペラペラ、字は細かい……

「……シン、帰るか」

「……そうだな」

勝利の喜びも、明日の憂鬱に簡単にかき消された。寮に帰る足取りと、ついでに脇に抱えたルールブックと、おまけに気持ちも重くて仕方なかった。

「情けない……それぐらい、覚えてみせろ!」

篠ノ之の無茶な要求にも、何も反論する気力がない。部屋に戻つて、また即行でベットにダイブしよう。勝つたから良しとしよう……そう思つて、そのまま寝ることにしてしまつた。

俺も、一夏も、その時には全く気がついていなかつた。

勝つても問題は残つていてることに。俺達一人は、まだ敵同士だといふことに。

でも、俺達は笑つて手を振つて、自分の部屋に帰つていつた。

「…………」

次の日の教室、朝のホームルーム中。俺と一夏はお互に机の上で手を合わせ、硬く目を閉じていた。無言、無言。相手を思いやる一言なんてありえるはずもなくて、逆に、自分が助かれれば良いという血口保身の思いが頭の中を駆け巡る。

「織斑くん……織斑くん……アスカくん……」

教卓には投票箱があつて、その中から取り出された用紙に書かれた名前を、山田先生が読み上げる。今ので、イーブン。互角だ。そ

して次が最後の一票……これが明暗を分ける。

「織斑くんっ！」

「やつりつりつ！ たあああつつ！」

「ぐつ……ちくしょりつ……」

ガタンと机を揺らし、俺は渾身のガツッポーズを取った。同時に一夏が「ゴンっ」と机に頭をぶつける。撃沈、確認。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

「一夏、俺の分までがんばれよっ！」

そう、今行われていたのはクラス代表の選挙。クラスの投票の結果……僅差で俺は負ることができた。試合に負けたけど勝負には勝った気がする。ていうか、勝負に勝てればどうでも良いや、この場合。おかげで一夏がクラス代表だ。公明正大、まさに文句なしの結果

「異議ありっ！ 昨日の試合、勝つたのはシンだろっ！？ シンが代表の方が筋が通るんじやないですかっ！？」

異論が出た。当然、一夏の口から。

「勝つたのは『俺達』だろ。だから、今の投票で一人の内で結果を決めたんじやないか。見苦しいぞ一夏っ！」

「ぐぐぐつ……そつだ、セシリ亞！ お前は納得いかないだろっ！？」

？」

突然名前を呼ばれたセシリ亞は一瞬驚いたようだけど、「ホンと

咳払いした後、立ち上がりて高らかに宣言した。

「昨日の試合……私が負けたのは、一夏さん」と“シンさん”的ペアです。ですから、私は今回の投票に参加していませんし、ビビリが代表になつても異論はありませんわ」

うん、セシリアは良く分かつてくれていた。これなりも「反論の余地はない。

「投票の結果じゃ仕方ないよね~」

「私はちょっと残念だけど……でも、織斑くんでも面白そうだからいつか！」

「そんな……」

クラスの総意がまとまりた。ちょっとだけ一夏が気の毒になつて、少しだけフォローを入れることにする。

「まあまあ、俺も一緒に訓練するからさ。一人でがんばらつくな？」

「はあ……分かったよ」

「わ、わたくしもクラスの仲間としてEIS操縦の指導をして差し上げますわ！ それなら一夏さんもみるみる上達を」

「待て、一夏の教官は私が頼まれたぞ」

セシリアに篠ノ之が立ち上がり、お互ににらみ合いを始める。別にみんなで訓練すればいいじゃないか……なんで喧嘩するんだ？

「座れ、馬鹿ども」

織斑先生の出席簿が華麗に炸裂する。一人とも、しぶしぶと座りなおした。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいとクラスのみんなが声をそろえた。まだ苦い顔をしている一夏を除いて。

もちろん俺も返事した。異存、ないからな。
とにかく、これで一件落着だ。明日からはもう少しだけ楽な日常になるだろう。一夏は、大変だろうけどさ。

第一話『本当の決闘は明日一』（後書き）

いつも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて氣化してしまいます。

お気軽に「感想をください」。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第三話『今日も、明日も、明後日も』（前書き）

以下の事に「注意ください。

- ・ 設定がいい加減です。ご指摘はバンバンしてください。
- ・ 展開早いです。すみません。
- ・ はつきり言って、妄想の產物です。気に入らなかつたらすみません。

第二話『今日も、明日も、明後日も』

四月も下旬になった。過^はいしやすい気候は変わらず、授業の間も居眠りしてしまうぐらいで……俺は何度も織斑先生に頭を叩かれていた。でも、この授業はちょっとした実技訓練。退屈な座学から開放されるということことで、俺も一夏も喜んでいた。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらひ。アスカ、織斑。試しに飛んでみせろ」

言われて前に出た俺達は、それぞれ自分のISを展開させる。展開をイメージする時はいつも、待機状態の貝殻を握りしめる。意識を集中 と言つより、こいつすると頭の中を勝手にイメージが湧いてくるからだ。

行くぞ、イグナイテッド

すぐに全身から光があふれ出し、灰色の装甲が現れる。それも青と白を基調とした色で染め上げられて、もう一度だけ輝きを見せる。俺のIS『イグナイテッド』。第二世代ISとして開発されながらも、誰にも操縦できなかつた欠陥機。特徴として様々な換装装備『シリエット』を備え、特殊装甲『フェイズ・シフト』が実体弾・実刀のダメージを無効化する。そして、初めてこの世界にやつて来た時から、俺と共にある『力』。

宇宙に上がったように体は浮き上がり、センサーに接続された視覚は世界の全てを彩つてみせる。展開時間は、研究所で訓練を始めた時よりずっと短くなつた。うん、快調だ。

「よし、飛べ」

二人でつなづきあつて、空に向かつて急上昇する。急上昇、急下降は『角錐を展開させる』イメージでするらしいけど……そんなのより、インパルスのコクピットで見た景色を思い返して動くほうがよっぽど楽だつた。

「一夏、どうだ？ 空を飛ぶのには慣れたか？」

「全然だな。そもそも何で空に浮かんでもられるんだ、これ」

もつともな意見。正直、俺だつて良く分からぬ。

「理屈は後回しで良いんじゃないか？ 動かせなきや意味ないんだ

し」

「ま、そうだな……つと、セシリ亞が来たぞ」

眼下のクラスメイトの中から、一人青い装甲をまとつたセシリ亞が飛んできた。流石に速い速い。代表候補つてやつはかなり優秀だつた。

「それについては反重力力翼と流動波干涉の話になりますわよ？」

「いや、それはまたの機会に」

「おひ、説明してくれなくていい」

下で俺達の話を聞いていたらしい。そんな話はうんざりだ、といった顔をする俺達を見て、セシリ亞は笑つていた。

決闘が終つた後、俺と一夏はしつかりと謝罪。セシリ亞も、自分にも非があつたとして同じように謝つてくれた。人間、素直に謝るのが一番良いらしい。それからセシリ亞は、俺達二人の訓練に合流して色々と教えてくれるようになった。特にE.Sに慣れていない一夏の訓練をよく見てくれていて、俺としては大助かりだ。

俺だつて、人に教えられるほどの知識はないし……なんとなく空を飛ぶ感覚を伝えられる程度だ。まあ、篠ノ之の『すどひ、がつ、ぎゅん』よりはマシだと自負している。分かるわけないだろ、あんなの……シッコミを入れたら怒られたけど。理不尽だ。

「ア」の三人、急降下と完全停止をやって見せひ。田嶋は地表から十センチだ

「うづつ……完全停止かよ……」

苦手な技術の要求がされた。背中で地面を削り取ったあの衝撃が思ひ出される。

「あら、シンちゃん。空戦用のパッケージもあるのじゃなくて？ そちらに換装すれば、これくらい訳もないのでは？」

「そうだよなあ。それに、空を飛ぶのは俺よりよっぽど上手じゃないか」

「実はさ、その、問題が……」

「う。はつきり言つてとんでもない大問題。課題と言つてもいいんだけど。

俺のイグナイティッドの問題点。MSとエリの操縦の違い。この二つが非常に重大な課題だった。

「ほり、セシリ亞も行つたことだし、俺達も行ひやせ？」

「う、うん……そうだな……」

先に下りていき、完全停止までこなしたセシリ亞を見下ろして、二人で息を合わせて急降下を開始する。集中して地面を見つめ、それがすぐに眼前に迫つて

「うわあつ……」
「おわあつ……」

俺と一夏は、ものの見事に撃墜した。いや、墜落つてのが本当の言い方らしい……結局、落ちたことには変わりはないけど。しかも頭っから。嬉しくないことに、センサーは周りの笑い声を余すことなく拾ってくれた。チクショウ……

「馬鹿者共。誰が地面に激突しろと言った」

「……すみません」

機体を浮上させて、穴から這い出る俺達。傷どころか汚れ一つない装甲は、俺達のちっぽけなプライドを汚し、傷つけ、穴を開けていた。

イグナイテッドは確かに、装備の換装を主眼とした機体だ。追加装備も今あるだけで三機は葛城さんに作つてもらつたし、まだ製造中のシルエットに、イグナイテッド自身が銳意設計中のシルエットまである。

ところが、今の俺が使えるのはソードシルエット“だけ”だ。

何でかつて？……イグナイテッドは、追加装備全てに『プロテクト』を掛けている。『丁寧に、俺の操縦技術に合わせてだ。そのせいで、折角作つてもらつた装備は呼び出しに応じすらしてくれない。結局、研究所での訓練でプロテクトが解除できたのはソードシリエットだけだった。これだつて、『対艦刀を使えるようにするためにESを装着しながら鉄パイプを振り回す』って情けない特訓の成果だ。大変だつたんだぞ……

とにかく、これが問題点のその一。『イグナイテッドの装備でさえ俺は使えない』ってこと。

だったら、それを使えるようになれば良いんだけど……ここに障害になるのが問題点のその一。『MSではできた挙動が俺にできるわけじゃない』ってことだ。

MSを動かすのはペダルやら操縦桿やらだけだ。EISを動かすのは、つまりは自分自身。いくらインパルスを動かせたって、イグナイテッドは同じようには動いてくれない。

それでも、イグナイテッドのMSが補助してくれるし、イメージとしてインパルスの挙動は思い浮かべられるから、後はそれを自分がトレースするだけだ。

そうは言つても……確かに、ナイフを振り回すとか、銃を構えるとか、生身でやつたことのある動きは問題ない。だけど、『対艦刀を振り回す』とか『空中で旋回』なんていうのは、生身で体感したことなんてあるはずなくて……結構、苦労した。鉄パイプもその訓練の一環だった。

おまけに、苦労してできるようになったのは『インパルスと同じ動き』で……MSは全速力で降下した後、地表十センチで止まれやしない。要するに、MSができない挙動をマスターするにはもっと苦労が必要。

空中を飛び回るために、今は地面に激突か……情けない。

「一夏、平氣か……？」

「平氣じゃない……主に心が」

「耐えよつ……今はガマンの時だ」

「」の後セシリアが心配して声をかけてくれた。傷薬のよつひ、それが酷く心にしみた。

「 とまあ、思いつゝ限りこんなところだな。お前さんのイメージ、それから反応に機体が追従して動くようになり再調整する、ってところか」

「はい！ 葛城さん、ありがとうございます！」

「今度帰ってきたときには、またばっちりデータ取らせてもらつからな～」

「了解です！ それじゃ、また！」

携帯を切つて、パソコンの前に再び向かう。電話中に書いたメモが、今の俺には宝の地図 いや、まさにその宝に等しいものだった。

「やつてやるぞ、ひくしょおーつー！」

墜落の日の夜、部屋に戻つた俺はパソコンで空中での姿勢制御のシミコレーートに没頭していた。イグナイテシドに接続して、プラグラムを懸命に打ち込む。武器の展開は簡単にできた。でも、そんなことより、その前に篠ノ井に言われた「情けない」の一言が心に深く刺さつた。見てろよ……一夏と一緒にアイツの鼻をあかしてやるー。

「対機体重量比反重力制御修正、対地センサー反応レベル0.92変更、スラスター モジューールと反重力力翼間にOFCをコネクト、相互反応アダプション……確認！ 今度は神経接続のフィードバック感度ポイント上昇、空間SOD認識の再修正……終了！ これでどうだ……？ まだ遅いぐらいかよ！？ だつたらどうする……？」

パソコンの画面の中の俺は、もう何度目か分からぬ墜落をしていた。ブレークが掛けられるよつになつたのは大きな進歩だつた。待つてくれ、もう地面とはサヨナラさせてやるからな。手元にあるIUS用のプログラム教本を片手に、出来る限りの変更を加えていく。

なんたつて葛城さんにアドバイスをしてもらつたんだ。いくら俺には分からなくても、あの人があえてくれた通りにすれば上手いくはず。イグナイテッドも、自動的に俺に合わせよつと最適化してくれてるんだ。俺だつて……

「ひつなつたらこつちだ！ 装甲間神経リンクージ強化、空間ポジショニングの再調整、それからアラートの感度上方修正、Sエリアクトに対応…… いけるぞ！」

グラフィックで作り上げられた機体は、地面に激突する前にピタリと止まつた。成功だ！

「よひやく出来た！ くづくづくづく……」

苦労した甲斐があつたというも。イスをぐるぐる回して、両手をあげる俺。きっと誰かに見られていても気にとめなかつただろう。さて、後はシミュレーション通りに動ければいいんだけど、試すのは明日にならないと。アリーナ開いてないし。

「あ、そう言えば

時計をちらりと見やると、自由時間を少し過ぎたところだった。今日は寮の食堂で『織斑一夏クラス代表就任パーティー』なんでものをやるらしい。今頃、一夏は渋い顔をしてることだらう。クラス

全員参加が基本だから、俺も行かないとな。

「就任祝い、だな。コレは」

さつきまで使っていた『葛城さんメモ』を手に取る。俺みたいな基本の基の字も知らないような奴でも、教本と照らし合わせれば調整できるようなことらしい。きっと一夏にも役立つだろ。流石は主任研究員の葛城さんだ。頭が上がんないよ、本当に。

「ゴメン、遅くなつた……って、なんか人数多くないか？」

「あ、アスカくん。きたきた、待つてたよ」

「さあ、いじつちこつち」

食堂の中は明らかに一組の人数を超える人が集まっていた。一夏は真ん中の方で、何やら見知らぬ人に、ボイスレコーダーを突きつけられてうろたえている。クラスメイトに案内されて近づけば、その矛先は俺に向かってしまった。

「シン！ 交代だ、よろしく！」

「お、君が噂のもう一人、第一学年『最強』の男！ シン・アスカくんだね！ 私は新聞部副部長一年の黛薰子。よろしくね～」

目をキラキラさせながら名詞を渡された。ていうか、そんな噂なんて知らないぞ、俺。

「えへ、有名だよ？ 入試主席のセシリ亞ちゃんを倒した、期待の専用機持ちだつて」

「勝つたのは俺と一夏。一人で勝つんだから、そんなわけじゃ……」

•
•
•
L

「あ、いいよ。ダメなトコでちあがねから」

…… こいつのが噂の先行の真実か。情報は武器になる。そして
その武器は俺達に牙を剥く…… でも、個人の力はあまりに無力だ。
セシリアのインタビューに行つた黛さんは放つておいて、一夏に
『葛城さんメモ』を渡すこととした。

「ほら、クラス代表就任祝い。がんばれよ！」

「なんだ、コレ？」

「HHS用の調整のコツとポイント。やつを俺もプログラムし終えたから、一夏も使えるよ。効果は保証するぞ？」研究者に聞いたんだからな

「シノ……お前つて奴は……」

笑いながら返して手を差し伸べると、一夏も強くその手を握り返した。ガシッと握手をする俺達。男の友情なんて単純なものだ、なんてルナに馬鹿にされそうな場面だな。うん、でも、シャツターチられてるんだから、新聞部としてもおいしい場面でもあるんじゃないか？

「うわ、やつぱりひがみも尊通りなんだ！」スクープだね！

「……あの、それってどういう噂なんですか？」

しかも、つてどうこうとですか？ なんだか凄い嫌な予感が

「アスカくんは男色家で織斑くんに気があるって聞いたんだけど？」

吹き出した。盛大に吹き出した。周りの女子達は『やつぱり』と

か『どいつ』とか口々に言ひてゐる。どつかりそんな噂が立つたんだよ！？

「ちょっと待てよー。どつしてそんな話になつてるんだ！？」
「だつて、よく織斑くんと一緒にいるし。様々なアプローチで織斑くんに迫つてゐるって」

迫つてない。普通にクラスの仲間として付き合つてゐるだけだ。

「で、織斑くんも満更じゃないって」
「んなわけねーだろつ！！」

一夏も大声を張り上げた。でもさ、当事者の否定の言葉つて、大抵は無視されるんだよな。主に勘違いしがちといふか、暴走しがちな面子に。

「シンせん……まさか、男の方に興味がおありとは思いませんでし
たわ……」

「誤解だ！ すつ“い誤解だ！ 別にそんなことはないぞーー！」

「一夏、私が見ないうちにそんな趣味に走るとは……不潔だ！ 恥
を知れーー！」

「算！ 今の否定の言葉が聞こえなかつたのかよー？ 止めろーー！
木刀をしまえーー！」

ぎやあぎやあと騒いでいるうちにまた写真を撮られた。いつの間にか一組メンバーが全員集合して。見出し記事にはさぞ似合つ写真になつてゐことだらうな。そんな集合写真、俺いらない。

結局、『織斑一夏クラス代表就任パーティ』が終了したのは十時過ぎだつた。疲れきつて部屋に戻る俺達とは対照的に、クラスの皆

は元気いっぱい。篠ノ之は最後まで冷たい視線を俺に向いていた。やめてくれ、そんな目で俺を見ないでくれ。

次の日の朝には、教室の話題は俺の男色家疑惑から転校生の話題にシフトしていた。良かつた……女子は飽きるのも早いらしい。さつさと忘れてくれ。

「アスカくん、織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた? なんでも中国の代表候補生なんだって」

「転校生? 今の時期に?」

「しかも代表候補生か。へー」

「そんなことより! 一夏さん、クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょー!」

「そうだ、今のお前に女子を気にしている余裕があるのか?」

「あら、篠ノ之さん。一夏さんの訓練はわたくしがお手伝いしますから、あなたの出番はありませんよ?」

「ふん! 一夏が最初に訓練を頼んだのは私だ!」

セシリ亞と篠ノ之が登場。最近一人とも妙な対抗意識を燃やしていて、事あるごとに突っかかっている。原因はなんだ? 仲良くしてたほうが良いのは当たり前のなのに。その当たり前のことが、なかなか分かんないんだけどさ。

「一夏、模擬戦なら俺も相手するけど?」

「そりだな。シン、頼めるか?」

「任せておけつて」

「サンキュー」

「はっ!? おいアスカ!!!」

「抜け駆けはいけませんわ!!!」

抜け駆けってなんだよ、抜け駆けって。頼むから仲良くしてくれよ。

クラス代表同士のリーグマッチ、クラス対抗戦。一夏に面倒^{いざな}いことを押し付けた分は、しつかりサポートしないと。優勝商品なんでものもあるから、クラスの女子もそれなりのプレッシャーをかけてるし。ちなみに、その優勝商品は学食^{デザート}の半年フリー^{フリーパス}。うん、あんまり嬉しくない……

「織斑くん、がんばってね!」

「フリー^{フリーパス}楽しみにしてるからね!」

「専用気持ちのクラス代表は一組と四組だけだから余裕だね!」

わらわらと机に集まつてくるクラスメイト。俺も一夏もすっかり慣れてしまったのが驚きだ。

「 その情報、古いよ」

教室の入り口にもたれかかっていた女子の声が、クラスの喧騒に割つて入つた。黒い髪をツインテールに結んでいて、小柄な体の腰まで垂れ下がつていて。知らない顔だ。

「二組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……お前、鈴か?」

「さうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たつてわけ」

また一夏の知り合いらしい。代表候補生って名乗ったから……。あいつが俺の救世主様なわけだ。だつたら早速、お礼に良いこと教えてやらないと。

「おい、アンタ。早くどいたほうが良いぞ？」
「何よアンタ、邪魔しな」

言い切る前に、頭にバシンッと出席簿が叩きつけられる。織斑先生が来てるのに気付いてなかつたみたいだ。あーあ、だからどいたほうが良いって言つたのに。

痛々しいことに、頭を抑えて涙目になりながら、一夏を指差してなにやら吠えていた。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

「さつさと戻れ」
「は、はいっ！」

バタバタと勢いよく走り去つていく音が、教室から遠ざかっていく。

次いで、一夏を囲んでいた女子の頭を出席簿が乱撃。この速さと正確さはすさまじかった。

昼休みになつて、俺達は学食へ疲れた頭と空腹を癒しに向かつていた。あんまり癒しが過ぎると、午後の授業には居眠りをしてしまうのが玉にキズだ。

今日のメニューは……ラーメンだな。中国代表とか聞いているうちにふと食べたくなった。食券を買っていそいそと列に並ぼうと

「待つてたわよ、一夏！」

お盆の上にラーメンどんどんぶりを乗つけた女子に進行をふさがれた。転校生の鳳ファンとかいう奴、律儀に一夏のことを待つてたみたいだ。なら食券だけ買って待つてれば良かつたのに。ラーメンのびると思うんだけど。

「ほら、食券出せないからぢいてくれ。あと、のびるぞ」「わ、わかつてるわよ！ 大体、アンタを待つてたんでしょうが！ なんで早く来ないのよ！」

むしろラーメン手にして待つてるほつが不思議なわけで。けど、一夏もコイツも、お互に口調がとても親しげだ。多分付き合いはそこそこ長いんだろうけど……なんでだろう、二人の様子見をするセシリ亞と篠ノ之から『いかにも不機嫌です』といった雰囲気が伝わってくる。午前中に織斑先生の出席簿クラッシュを食らつたせいか？

「篠ノ之、あいつはお前とも知り合いでないのか？ 一夏とは小学生からの知り合いなんだろ？」

「知らん！ あんな奴のことは知らないし、一夏から聞いたこともない！」

「そつか。あ、テーブル空いたから行こつぜ」

食事を取りときはだいだい十人前後のグループが出来上がるから、テーブルを見つけるのも時間がかかることが多い。あつさり席が空いたのは、ラーメンを食べるのには都合が良かつた。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？　おばさん元気か？　いつ代表候補生になつたんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタじゃ、なにエレフ使ってるのよ」

食事中も、一夏と鳳はお互いに質問タイム。話がはずんでるようだから、口をはさむのも気が引けるし、黙つて見てよつと。俺だつてそれぐらいの気遣いはできるさ。それに、俺が聞かなくて……

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが

「そうですね！　一夏さん、まさかこちらの方と付き合つたりつしやるのー？」

ほり、俺の代わりに質問してくれる奴らがいた。でもさ、一人とも、少しさは気を遣つてやっても良いんじやないか？　機嫌斜めだから、言わないけど。

「べ、べべ、別に私は付き合つてるわけじゃ……

「そうだぞ、ただの幼なじみだよ。ん？　何睨んでるんだ？」

「幼なじみ……？」

「あー、えつとだな。篠が引っ越していくのが小四の終わりだつただろ？　鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中一の終わりに国に帰つたから、余つのは一年ちょっとぶりだな」

分かりやすい説明ありがとー一夏。だから篠ノ之は鳳のこと知らなかつたんだ。

「初めまして。これからよろしくね

「ああ。」

全然よろしくねって感じじゃないぞ。明らかに険悪なオーラが出てて、一夏も引き気味だ。

「ンンンッ！ わたくしの存在を忘れてしまっては困りますわ。わたくし、イギリス代表候補生のセシリア」

「じめん、あたしはアンタのこと知らないし、他の国に興味無いから

「な、な、なつ……！？」

セシリアが顔を真っ赤にしてこぶしを震わせていた。確かに、これは失礼かもな。昔の俺なら食つてかかるところだ。もうそんなことしないけど。

で、怒ってるセシリアのことを無視して、一夏との話を再開する。鳳^{ファン}。話の腰を折ったのはセシリアと篠ノ之だから、仕方ないか。積もる話つてのがあるんだろ、きっと。

「一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

気持ち顔が赤い。目線だけを一夏に向けて、ぼそぼそと鳳が言った。へー、面倒見の良いところもあるんじゃないか。

「あー、IS操縦の方はシンに頼むから、鈴はいいよ。手間だろ？ ありがとな」

何かが割れる音が聞こえた。ピシッつていった。ついでに言えば、セシリ亞をかんかんにさせた時も、全く同じ音が聞こえた。つまり、

第一級の危険信号。ビリしてだ？ 一夏、何かマズイ」とでも言つたか？

「ねえ、一夏……そのシンツテ奴は誰……？」

「俺のクラスメイトだよ。ああ、ほら。そこでビンぶり傾けてるや。

」

匕(ヒ)を指した一夏の箸にて、空いた右手で敬礼を返す。早いとこスープを飲み干したほうが良い。きっとこの後、また面倒ごとが起まる。

空になつたビンぶりをお盆の上に置いた途端、バンッヒテーブルが叩かれて食器が浮いた。

「アンタ、朝からなんなのよ！？ 一夏とビリいう関係なの！？ そもそも、なんで一夏以外に男がいるの！？ 答えなさいよ！！」

「あのや、ヒヒ食堂だから、あんまり大声出さないほうが……」

鳳(ヒン)の口からは火が出そうな勢いだった。なんとかなだめかそうと両手で静止のポーズを取る俺の背後に、腕を組んだセシリ亞と篠ノ之が急速に回り込む。

「フン、アスカは一年一組所属。一夏とはクラスメイトというわけだ。しかしだな……コイツはそれだけではない」

「そう……シンさんは学年でも『最強』を謳われる男子。なんと言つても一夏さんと共に、入試主席のわたくしをも打ち破つたのですから……」

「そして！ 一夏はアスカに教えを請い！ らにアスカは、私達に『どうじても』協力を要請している……つまりだな……」

「ええ！ 一組代表である一夏さんの訓練！ 担当はわたくし達だけなのですわ！！ あなたの入り込む余地など微塵もなくてよ……」

バックではメラメラと炎が燃え上がり、握りこぶしを作つて力説する一人。交互にセリフを読み上げて、息ぴったり。仲直りしたのか？仲の良いのはホントに良いことだ。

けどね……俺、『どうしても訓練手伝つてくれ』なんて言つたつけ？それにさ、大声出しちゃダメだつて。一夏含めて周りの皆がドン引きしてるぞ？ つこでに言わせてもうええ、そんな説明で納得してくれるわけ

「くう～～つ……！ そうね！？ コイツがあたしに、『一夏の特訓に協力してくれ』って頼めば良いのよね！？」

あ、納得してた。いや、そういうわけじや、ないんだけど……

「アンタ！ 操縦訓練の手伝い頼みなさ～～～ わつわつとする！」

「え、あ、いや……」

「アスカ！ そんな頼みを聞く必要などない！」

「そうですわ！ シンさん！」

最悪な板ばさみになつてしまつた。どう返事しても、俺が睨まれるんじやないか……

ねえ、ステラ。俺、何か悪いことしてたつけ？ こんな目に会つようなこと、したつけ？ 一夏にクラス代表押し付けたのがいけなかつたのかな？

助けを求める視線を一夏に送れば……首を横に振つた。諦めろ、のサインだ。嘘だろ……

「えつと、アンタどうして一夏の訓練に付き合つてくれるんだ？ 宣戦布告とかまでしたくせに、おかしくないか？」

「そ、それは……その……」

顔を真っ赤にして、『』によ『』によと聞き取れないことを呟く鳳。^{ファン}
しめた。なんだか分からぬけどひるんだぞ！ チヤンスだ！！

「訓練の手伝いはありがたけど、対抗戦が終るまでは待ってくれ。
もちろん、アンタが一夏の情報を盗もうって考へて考へるとは、思つち
やいないけど……やるからにはフェアじゃないと。俺も一夏もやる
からには本気だから、そんな敵に塩を送つてもひりひりうな真似はで
きない」

実は、ほんと嘘だった。敵の情報を得て対策をとるのは、戦闘
の基本だ。だからレイと一緒に戦闘シミュレーションを繰り返した
し、実際に効果もあった。

つまり、今のは口からでまかせ。スポーツで足を引っ張るのは、ま
た別の話だけど。卑怯なのは間違いない。

「くつ……仕方ないわね、分かったわよ」

よつやく刀を納めてくれたようだ。助かった……

「じゃあ、訓練の後に行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」

「あつ！ おい、鈴！」

訓練後に一夏と会う約束だけ勝手に取り付けて、鳳は去つていつ
た。話題をかつさらつてくれた救世主の転校生は、代わりにまた一
つ頭の痛い課題を残していった。

「一夏、特訓が優先だぞ。私が見てやるんだからな」

「あら、篠ノ之さんの出番はなくてよ？」

「何！？」

「なんですかー！」

いなくなつたらまたセシリ亞と篠ノ之は喧嘩を始めるし……何なんだよ、全く……

「お前の知り合いつて、あんなのばっかりなのか……？」

「わいい……返す言葉がねえや」

「いや……大変だな、一夏」

お互いの肩に手を置いた。同じような苦労を重ねて、俺達の友情は日増しに強くなつていく。今日も、明日も、明後日も……やっぱりそんなの嫌だ。こんな苦労はもうしたくないよ、俺。

ちなみに、午後の授業はこの疲れがたたつて二回ほど意識が飛び、きつちり同じ分だけ織斑先生の出席簿に叩き起こされた。意識が違うところに飛びそうな勢いで。

補修の時間には、山田先生に「アスカくんつて、男の子に興味があるつて……ホントですか？」って聞かれた。リンゴを赤いペンキに突っ込んだような真っ赤な顔で。

訓練の時間には、何故かアリーナで一対一の模擬戦になつた。セシリ亞と篠ノ之がしつこく一夏を狙うから、かばうのに必死だった。

部屋に戻つたところで、その日の記憶は無くなつた。

第三話『今日も、明日も、明後日も』（後書き）

いつも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくてのびてしまします。

お気軽に「感想をください」。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

- 以下のことに注意ください。
- 時間が開いたといつもベルじゃないので、整合性がとれているか分かりません。
- お叱りの言葉は遠慮なく……とこつかもつ罵つてください。
- というか、すみませんでした。
- 申し訳……ありませんでした。

第四話『明日を乱すもの』

地球だから重力があるのは勿論だけど、それ以外に四季があるってことが日本の良い所だ。オープも島国で、四季があつて、春が新生活の季節だつた。家族で花見に行くことも楽しみで、秋には同じ場所でバーベキューをしたりして、同じよつとママゴと駆け回るのが大好きだつた。

今の俺も、あの時のように季節の変化を感じていられる。

葉の緑も濃くなつて、すっかり五月といった様子になつた。

転校生の凰^{フアン}が来てから早くも数週間。クラス代表対抗戦を翌週に控えて、今日も今日とて俺達は訓練の毎日だつた。

ISを着けていない状態での剣術訓練、それからセシリアに操縦技術の指導をしてもらい、最後に俺との模擬戦をする。我らがクラス代表、織斑一夏の特訓は順当に進んでいた。もちろん、俺の方だつて順調に訓練を重ねていた。課題だつた空中での姿勢制御その他もろもろはクリア。実際に動かすのはまだなんだけど、ようやく“アレ”が使えるようになったわけで……はあ、長かつたな。

「来週からいよいよクラス対抗戦だ。アリーナの調整があるから、今日で特訓は最後だな」

放課後の夕日をバックに、第三アリーナに向かつて俺達は歩いていた。

篠ノ之の言葉通り、準備期間中にアリー^ナの使用はできない。自分の訓練もそうだけど、一夏の特訓ができないのは残念だ。まだやることはいくつもあるのに。

「 I S 操縦も様になつてきたな。今度こそ 」

「 わたくしとシンさんが特訓を担当しているんですから、これくら
いは当然ですわね 」

「 ふん。アスカとの模擬戦はともかくとして、射撃装備の無い一夏
の I S に中距離射撃型の戦闘法が何の役に立つたというんだ 」

睨み合いの開始。篠ノ之とセシリ亞、二人が揃うといつもいつも
これだ。もういい加減になだめるのも飽きたので、放つておくこと
にする。

「 一夏、今日は最終調整だな。模擬戦の内容、確認してくぞ? 」

「 おお、よろしく頼むぜ 」

「 今日は俺が中距離からライフルで狙撃するから、お前はそれを避
けて接近、攻撃。接近戦に持ち込まないと、ジリ貧になるからな 」

模擬戦なのに、この条件指定をしたのには理由がある。一夏の I
S には近接戦闘用のブレードしか装備がない。初期設定の装備は変
更できないらしいし、後付装備の余裕も無いという極端な机体が、
一夏の『白式』だった。織斑先生のアドバイスもあり、訓練は基礎
の移動技術と近接戦闘に絞つてある。特に実戦形式で、習つより慣
れろという側面が強い。

「 分かってるって。今日こそ一撃 」

「 二人とも、聞いているのか (いますの) ー? 」

「 はいはい、聞いてるよ 」

睨み合いの次には、いがみ合い。俺達は軽くいなして、第三アリ
ーナのドアを開けた。

「 待つてたわよ、一夏! 」

「凰？ アンタどうしたんだ？」

「今日はアンタに用はないの！ どいたどいた！」

「はいはい、分かりましたよ」

腕組みをして、仁王立ちをしていたのは凰だつた。その姿を認めた途端、さつきまで喧嘩していたはずのセシリ亞と篠ノ之の敵意が方向転換する。じつは、この時だけは仲良くなるんだよな、こいつら。

「貴様、どうやつてここに」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「あのさ、話が進まないから一人とも落ち着いてくれ」

この二人が絡むと確実に話がこじれるから、その場で待つたをかけることにする。証拠は食堂での一件だ。そして、被害を受けるのも多分、俺か一夏だ。

「一夏、反省した？」

「へ？ なにが？」

「だ、か、らつ！ あたしを怒らせて申し訳なかつたなーとかあるでしようが！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

そうそう。理由は知らないけど、一夏と凰は喧嘩をしてしまって、仲直りもしていらないらしい。喧嘩の原因が分かれれば、まだなんとかなりそうなんだけど……一夏に聞いたら『毎日酢豚をおごつてくれるつていう約束を覚えていたのに、なんでか知らんけど怒られた』『そうだ。うん、何を言つてるのか分かんないや。』

そんなわけで何度も、凰が俺に一夏の様子を聞きに来ることがあつた。気になるなら意地張つてないで本人に言えればいいのに、なんて言つと決まって怒り出すものだから、俺も途中から首を突っ込む

のは止めにして、凰と雑談するばかりだった。

話してみれば凰も嫌な奴じゃなかつたので、一夏とは仲良くなつていてほしいのが正直な所ではある。

「俺、先に中入つてるからな」

ややこじこじになる前に、さつさとアリーナの中に入る」とこした。だんだん一人の会話が言い争いに近づいてきてる。今までの経験上、この後は確実に相手が怒り出すのがオチだ。心の中で念仏を唱えながら、アリーナのドアを開けた。

「まつたく、落ち着いて、訓練させて、くれよ、と」

広いアリーナの中で準備体操。体をほぐしておかないと、ISの操縦は負担が大きいから、いつも念入りにすることにしていた。

一夏との模擬戦までは射撃訓練でもしておこうとか、そろそろ葛城さんが新しいシルエットの製造してくれてるだらうなとか、とりとめのないことを考えていると

ドガニッ！

ピットの中から轟音が聞こえた。やつぱり……何かやらかしたんだな。一夏は無事か？

ピットに駆け戻ると凰の姿はもうなくて、壁には直径三十五センチほどの丸いへこみができていた。確かこここの壁、特殊合金製でめつたなことじや傷つかないって話だ。こんな傷がつけられるのはISだけだわつ。

「セシリ亞、これ……」

「凰さんのISですわ。一夏さんと同じ近接型、しかもパワータイ

「…………」「…………」

「…………」「…………」

凰のエースは近接格闘型。接近戦を挑んでくれれば、一夏も対応しやすい。勝ち目の薄い射撃戦を開かれるよりかはマシだ。時間が惜しい。早く訓練しないと。

「一夏、早くアリーナに…………つて、どうした?」

「いや、ちょっとな…………失言しちまつて…………」

一夏は猛烈に後悔した顔で、ため息をついていた。けど、今はそんなことをしている場合じゃない。

「後悔するのは後回しにするべ。明日の試合、勝つんだろ」

「…………」「…………」

「剣術の動きの確認、それから一通りの操縦の復習をしたら、すぐに俺との模擬戦に入ろう。」

明日の一夏の試合、相手は凰だ。一夏のためにも、ここで負けさせるわけにはいかない。振り向いてみれば、一夏の目にはしつかりとした意志の光が戻っていた。

そして試合の日。俺達は会場ではなくて、アリーナのピット内で観戦することになっていた。メンバーは織斑先生に、山田先生、セシリア、篠ノ之内俺の、代表関係者。観客席の方は超満員で、リアルタイムモニターで観戦する生徒も多いらしい。超満員の理由は、物珍しい男子生徒の試合だから。俺が出ることにならなくて良かつたと思つてしまふのは、薄情なのだろうか。

アリーナの中では既に、一夏と凰が試合開始のブザーを待つている。ここまで来るともうできることが無いのが歯がゆい。けど、一夏も俺達もやれるだけのことはやつた。

(だから勝てよ、一夏)

心の中で呟いたその時、ブザーが鳴つて二人が刀を交えた。

凰の第三世代型 I.S.『甲龍』。巨大な双刃が一夏を立て続けに襲う。それでも、一夏も負けずに剣で連撃を捌ききる。ここまでは訓練の成果ありだ。問題なのは『甲龍』の特殊装備

『 甘いわよつー』

『ぐあつー..』

刃を受け止めていたはずの一夏の体が大きく吹き飛んだ。「衝撃砲『龍咆』」は、目に見えない砲弾だ。空間に加えられた圧力が砲身を作り出して、そこから衝撃自体が弾丸になつて撃ち出される。しかも全方位死角無しのおまけ付だ。まったく、I.S.の装備は良く分からないものが多い。

「剣で互角でも、固定装備の差がかなり出でてくるな……」

「ええ。早く勝負を決めないと、それだけ一夏さんの不利につながりますわ」

近接ブレード一本で戦うには厳しい相手だ。だからって、一夏も手をこまねいていたわけじゃない。

『雪片式型』の特殊能力は、自分のシールドエネルギーを消費して相手のバリアーを無効化する。攻撃特化の能力過ぎて両刃の剣だけで、威力は計り知れない。これを相手に当てるためには奇襲に限る

「**イグニッショント・リスト**」
ということで、そのための技術『瞬時加速』の習得までこじきつけた。
これさえ成功すれば、勝機が見えてくるはずだ。

「篠ノ之、大丈夫だつて。一夏は負けないさ」

しかし

「ほら、アイツは諦めてない。勝負に出るつもりだ」

ずっと不安そうな顔をしていた篠ノ之が、画面をきつと見つめなおした。

一夏の目。俺に向かつてきの時の、あの強い意志を秘めた目だ。何が一夏を動かすかは知らないけど、大きな思いが一夏を支えている。

一夏が刀を構え直して、加速の体勢に入つた。決めるつもりだ。

『アキラ君が死んだー!』

一夏が相手の懷に飛び込んだその時、アリーナを大きな衝撃が襲つた。一夏の攻撃でも、凰の攻撃でもない。二人の装備に、巨大な爆発を起こすような装備は無かつたはずだ。

パネルをタッチしてアリーナ内の画面を切り替えていくと、二人とも呆然として、アリーナの中央から上る巨大な煙を見つめている。

アリーナには外部、内部問わず攻撃を遮断するためのシールドが張つてある。なら、それを突き破つて乱入してきた奴がいるつてことだ。

「敵襲……！？」 くそつ……
「あ、アスカくんっ！？」

頭が状況を整理する前に、弾かれたように体が動いた。競技中の乱入者なんて、どう考へても穏やかな話じやない。ピットの入り口

のコントロールパネルに触れたけど、ブブーッツと赤いエラー画面が表示され、ゲートは開かなかつた。パネル隣に書いてある緊急時操作をしても、ゲートはうんともすんとも言わない。完全にロックされたらしい。

「だつたら、こつするまでだつ！！」

胸の貝殻に手を触ると、全身に装甲が展開されていく。クリアーになつていく視界の片隅に、所属不明ISの確認を告げる緊急画面が開いていた。さらに続いて、所属不明機がアリーナの中の一人をロックオンしていることも教えてくれる。すぐに助けに行かないと……！！

左腕に盾を展開させながら、右腕で腰のサイドスカートからダガーを引き抜く。

「アスカ！ 何をしている、止める！！」

「後で説教でも嘗倉入りでも受けますよつ！ 下がつてくださいつ！」

織斑先生の呼び止める声を無視して、俺はゲートを切りつけ始めた。けれど、そこらの鉄の扉とは違つて、ゲートは傷こしそつくるものの破れる気配はない。

『先生たちが来るまで、俺達で食い止めますから』

「織斑君！？ ダメですよ！ 聞いてますか、二人とも！」

背後では山田先生がプライベート・チャンネルを開いている。会話は聞こえた。二人とも逃げるつもりがないらしい。その通信の内容が、一層焦りを募らせる。もし一人に何かあつたら……そう思つてしまふと、がむしゃらに腕は動く。

特殊合金製だらうが、シールドが張つてあらうが、構うもんか。ここの先に大事な仲間がいるんだ。戦つてるんだ。

今度こそ守つてみせるつて、決めたんだ。

「開けつ！ 開けよつ！ コイツつ！…」

「シンさん……」

「アスカ、それぐらいの攻撃ではその扉は開かん。おとなしく待つていろ」

「だからって！ 何もしないで待つてなんかいられませんよつ！…」

ISのハイパーセンサーを通して聞こえる織斑先生の声は、明らかに震えていて、一夏のことを心配していた。

自分が助けにいけなくて、俺と同じで、悔しいはずなのに。たかが壁の一つ先なのに、その壁も切り裂けない。

隣のコントロールパネルのエラー音が、むなしくピット内を響いていた。

「ひつなつたら、ソードシルエットで……つて、篠ノ之？」
「篠ノ之さん？ 何をするんですか？」

さつきまで黙つて立っていた篠ノ之が、木刀を片手にゲートのコントロールパネルに近づいて行つた。

そして、木刀を高く振り上げると

「 はあつ！…」

人間相手ならかなり危険だらう威力で、コントロールパネルを思い切り叩きつけた。

一撃をもつたパネルがボンッと軽い爆発を起こした途端、ゲートが重い音を立てて開き始める。

その場にいたみんなが、啞然としていた。

「アスカ、開いたぞ！ 行けっ！！」

「つ！？ そ、そうだっ！！」

振り向く篠ノ之の言葉で我に返る。

ぶつつけ本番だけど、コイツを使うときだ！

武装のセレクターからフォースシルエットを選択する。認証を終えると背中に大型スラスターが装着され、その赤く縁取られた両翼を開いた。

空いた右腕で空中からライフルを取り出して、空中にふわりと浮き上がる。

青くきらめく装甲が、ゲートから漏れる光を反射させて一層の輝きを見せた。

フォースシルエット・展開完了

「アスカくんっ！ ダメですよっ！！ 危な

「アスカ。許可する、行つてこい」

「だったら、わたくしもっ！！」

「セシリ亞は後方待機だ。あまり大人数で行つても邪魔になる」

「うう…分かりましたわ……」

じつちを見上げるみんなに敬礼してから、スラスターにエネルギーを集めて、加速の体勢に入る。エネルギーの集約量は、イグナイテッド単体の比じゃない。

「アスカ……一夏を頼む」

「篠ノ之、ありがとう。任せろ、行つてくるつ……」

あごを引いて、スラスターの出力を一気に引き上げる。ほんの少し前なら制御のまるで利かなかつた速度でも、機体が思い通りに動く。訓練の成果、大有りだ。

視界に映る敵のターゲットサイトは、試合をしていた二人の凰の方に固定されていた。両腕に熱源が集中するのを感じ、凰は……いけない！ アイツ、気付いてない！

「おい、鈴つ！」

「つー？ しまつ」

「させらかつ！」

間一髪のところで、凰の前に躍り出て盾を構える。腕を伝う衝撃が消えた後、すかさずにライフルを発射する。不意打ち気味の一撃だつたけど、銃口のついた長い腕がビームを弾き、素早く俺にロックを向けた。

「二人とも無事だなつ！？」

「シン！ 来てくれたのか！？」

「アンタ、何考えて」

凰が言い切る前に敵が接近。振り回した腕から、ビームが何発も打ち込まれる。盾を構えながら銃で応戦してみれば、すぐに相手は攻撃の手を止めて回避を始めた。動きは非常に速い。

今まで見てきたE-Sの数は多くはないけど、目の前の巨大な機械は、明らかに他と一線を画していた。確かに人型だけど、腕は足元まで伸びていて、全長が2メートルほどになる。全身を張り巡らさ

れた装甲、首のない頭部。まるでMAだ。

「これも、I-Sなのか……？」

「そんなことよりっ！ 何考えてんのよアンタっ！？」

「シン、気をつける。AISの動き、どこか変だ」

「動き？ 見た目だけじゃなくてか？」

「あーもーつ！ 話を進めないでよっ！…！」

オープン・チャネル内に、通信が乱雑に飛び交う。通信を始めると、敵はロックオンをかけたまま、両手をだらりと下げた。

「なんつーか……動きがまるでロボットみたいだろ？ 人の乗つてる気がしねえ」

「無人機、つてこと？ I-Sは人が搭乗しないと絶対に動かないわよ？」

「……ありえない話じやないんじやないか？」

常識なんて簡単に覆る。陽電子砲を跳ね返す兵器も、都市一つ壊滅させる兵器も、月の裏側からの戦略兵器も……想像したことない兵器なんて、いくらでも見てきた。この世界だつたら、無人機ぐらいあつてもおかしくない。

「だとしても……無人機なら、どうだつて言うのよ？」

「人が乗つてないなら、全力で容赦なく攻撃しても大丈夫だつてことだ」

そう言つて、一夏が刀を強く握りしめた。一夏の攻撃はバリアーの無効化ができる。まともに食らえれば、いくらI-Sを装着していたとしても相当のダメージを負うだろう。下手をすれば、搭乗者の命に関わる。無人機相手なら、その気兼ねをしなくて済む。

「一夏、『零落白夜』はまだ撃てるか？」

「あと一発。次は必ず当てるみせる」

肯くその表情から、覚悟の強さが伺える。それなら、俺のやることも決まっている。一夏に無事に攻撃させたやることだ。

「分かった。隙は俺が作る……けど、無茶するなよ？」

「何言つてんだよ、自分は無茶するくせに」

「ちょ、ちょっと一夏！　コイツに任せて大丈夫なの！？」

ほんの少し笑みを浮かべてお互いを見やつていると、慌てたように凰が間に入ってきた。俺と一夏は知り合つて一月そこそこと。背中を任せる相手としては、不安に思われるかもしれない。

「鈴、シンなら絶対に大丈夫だ。実力は俺が良く知ってる

「でも……」

「心配なら、約束するわ」

一人の少し前に出て、振り向いて、はつきりと言つてみせた。

「一夏も、それに凰も……必ず俺が守る。約束するよ」

「へへっ！？」

向き直る時に一瞬だけ、凰の顔が赤くなつてるのが見えた。ああ、無責任な発言に思われたか？　怒つてゐるなら、後で謝らないと。

「ほら、鈴も手伝ってくれ。いい加減、敵さんも待ちくたびれたみたいだぜ？」

おしゃべりの時間は終わりだとでも言つよつに、深い灰色の機体がその手をふり上げた。

凰の前で突撃の構えを取る一夏。何か策が有るみたいだ。

無人機だつたら全力で構わない。

一夏の口にした言葉を反芻する。今までだつたら、考えられない話だつた。

自分が相手にしてきたのは、全員……人間だつた。でも、そんなこと必死で振りほどいて、いつつも戦闘を続けていた。

殺らなきや、殺られる。それじや何も守れない。そつやつて言い聞かせて。

それで平和になるのかなんて、本当は、自分では分からなかつたのに。

戦争はヒーロー、じつじぢやないつて言われたこともあつた。アスランからしたら、当然の話だつたんだろうな。敵だつて人間なんだつて、当然のことを見れないでいたんだから。それで苦しむのは、自分だつたのに。

傷ついて、傷つけられて。それなのに、全てを守つてみせるなんて、それこそヒーロー、じつじのヒーローそのものだ。敵を倒して、みんなを守つて。

誰かの明日を奪う」としか、俺にはできなかつたのに。

でも、俺は諦めたくない。守りたい。

ステラと約束した、俺の明日。

どんなものになるか、今でも俺は分からぬ。けど、はつきりと分かることもある。

今この場に、守りたい人たちがいるつてことだ。それぞれに、同じように明日があるんだ。

明日を守つてみせられるなら。今度こそ、守れるのなら。

やつてやるや。アイツを、倒して。

空に浮かんだいびつな機械が、その腕を俺に向ける。背部スラスターからビームサーベルを引き抜いて、敵と対峙した。その手の砲口に熱量が高まるのも、光が収斂していくのも、今の俺には全てが見える。怯えなくていい。

守るための『力』が俺と共にあるから。

熱線が近づいた。俺をかき消そうとする光の奔流に、スラスターを急加速させて飛び込んでいく。前方に掲げた盾が光を切り裂き、熱戦を押し返していく。銃撃が終つたその瞬間、盾を放る。すかさずその手の残光に向けてサーベルを突き刺した。

敵は避けるまもなく、伸ばしたままの右腕で光の刃を受け止める。砲撃直後の放熱をオーバーしたのか、がくがくと右手が揺さぶれる。なんとか光を弾いていたはずの掌は、耐え切れず爆発を起こして、ビームの閃光がシールドを突破し、肘の先までを貫いていった。

「今だ、一夏あつ！ いけえつ！！」

「うおおおおつ！！」

崩れかけた姿勢を立て直し、センサー・アイが音を立ててこっちを捉えなおす。左腕を離脱する俺に向け、砲撃をしようとした一瞬に、すさまじい加速で一夏が敵機に接近する。カメラが一夏をロックした瞬間には、敵の左腕は宙を舞っていた。それでも、敵はひるまない。全身のスラスターを点火して、一夏に体ごとぶつかっていき、体勢の整えられない一夏を吹き飛ばした。カメラ・アイを上に向け、上空に方向を転換しようとする。

「逃がすかよっ！」

敵の逃走ルートには、既に俺が回りこんでいた。手にしているのは、もう一本のビーム・サーベル。出力を最大まで引き上げて、大きく振りかぶる。一夏の攻撃の瞬間に、俺も準備していたことだ。逃がしはしない。

「落ちるおおつ……」

巨大な胴体に、サーベルを力任せに突き立てる。背部のスラスターを全開にして、その勢いのまま一直線、地面に叩きつける。装甲を貫通した光が敵を串刺しにしたところで、カメラから光が消えていった。ISのセンサーが敵の機能停止を告げる。心臓部をやつたらしい。完全な、沈黙。俺達の勝ちだ。

守りきれた。みんなを守ることができた。

「ふう……なんとか、なつたな……」

安心してサーベルから手を離して、力なくその場にブカブカ浮かぶ俺。ああ、ISの作り出す無重力の感覚が心地良い。空中遊泳つ

ていうのも、案外悪くないんだな。あれだけ宇宙にいたのに気がつかなかつた。

「シン！ 大丈夫か！？」

「一夏！ 怪我はないか！？ 凰も無事か！？」

逆さまになつたまま、近づいてくる一人の安否を確認する。多分、怪我はないと思つただけど……

「俺は大丈夫だ。それよりお前の方は 」

「ばつか、一夏！ アンタ、衝撃砲を背にして突撃したでしょ！ そんな無茶して死ぬ気！？」

「はあ！？ おい一夏！ あんまり危ない」とするなよ！ 何かあつたらビリするんだよ！」「

特攻の際に大分無理をしたらしい。危ないだろ、まつたく。

「まあまあ、シンのおかげで早いとこ決着ついたし。良いじゃないか

「あのなあ……無理するなよ。ホントにわ

「アンタも人のこと言えないじゃない！！ 砲撃に合わせてカウンター狙いに行つたでしょ！！ 失敗したら直撃よ！？」

「それは……成功したから良いだろ、別に！」

凰がやれやれといった様子でため息をついた。どうやら、俺もかなり呆れられてるみたいだ。悔しいけど、ちゃんとした反論ができない。

なんだかんだと喋つてゐる間に、先生達がやつて來た。後の処理は先生達に任せで、よし、一件落着。三人でピットに向かおうとする

「アスカ、どこへ行く？」

「へ？」

織斑先生に呼び止められた。気のせいだと思いたいけど、明らかに怒っている。先生の後ろに鬼が見えるのも、幻覚に決まっているわ……

「やつを言ひたな？ 反省文でも営倉入りでもなんでもします、と
な」

「あの、いや、それは……」

「来い、指導室で説教だ。たつぱり、な」

「うえええええええつー？」

全然、落着なんてしてなかつた。首根っこを引っぱられて、俺はふわふわ浮いたままアリーナを後にするはめになつた。黙つて俺の様子を見ていた一人は、両手を合わせて遠い目をしてくる。俺を助けいや、無理だな。

ステラ……俺、いつもこんなのはかりだ。たまには誰か助けてくれないのかな？ え、やつぱり無理？ うん、そうだよね……

「何か言いたいことはあるか？」

「いえ……ありません」

「もう、こんなことしちゃダメですよー！」

「はい……申し訳、ありませんでした……」

絞られた。たつぱり絞られた。修正された方がまだ安いぐらいに。反省文……というより、始末書もいっぱい書かされた。まあ、IS

を勝手に起動させて戦闘行為まで始めたんだから、これは仕方ないか……

それで、説教のほうは山田先生と織斑先生のセット。人数が増えるだけで、ここまで辛いものになるなんて……命令無視は良くないな。レイ、相変わらずの俺で「ゴメン」……

ちなみに、器物破損させた篠ノ之はたいしたお咎め無し。どうしてだろう……間接的な原因が俺だからか？　まあ、お咎め無しならそれで良かつた。

「よろしい、では部屋で休め。私は仕事に戻る」

「了解であります……」

「何度も言わせる？ 敬礼はよせと言った。まだ説教が足り」

「いえっ！ シン・アスカ！ 退席させていただきますっ……」

逃げるようにして生徒指導室を飛び出る。気付けばとっくに夕方を回っていて、空は赤みを帯びていた。窓の外を見れば校舎もきれいな朱色にそまつっていて、なんだか物悲しさも感じられる。多分、さつきまでのお説教のせいだな。

拘束から開放されたことだし、まず一夏の様子を見に行くことにする。全身打撲で保健室に行つたつて、山田先生から聞いたし……だから無理をするなって言つたんだ。

アレ、保健室つてどっちだっけ？ この学園、無駄に広いからなあ……たしか、別の棟だっけ？ なら玄関に出た方が早いか。

階段を下りて玄関口に向かうと、下駄箱で誰かがたたずんでいた。両手を背中に回して、下駄箱に寄りかかって、うつむいて……俺が来たのに気付いて、顔を振り上げた。

「遅いわよ。あたしがどれだけ待つたと思つてんの？」

「凰？ アンタ、なんでこんなところに？」

「質問に質問で返さないの」

そう言つて下駄箱から離れる凰からは、怒つてゐるような様子は感じられなかつた。単純に待ちくたびれただけみたいで、言い方にもとげはなかつた。

「悪かつたよ……で、何か用でもあるのか？」

「……さつきのお礼、まだ、言つてなかつたでしょ？ かばつてもらつたのに」

わざわざそんなことのために俺を待つていてくれたらしい。別に、大したことをしてわけじゃない。ただ、自分の思つたとおりに行動しただけなんだから。

「いいよ、礼なんていらない。みんな無事なら、それで良かつた」「私は良くないの！ ……その、ありがと、ね」

「う、うん」

実際にお礼を言わると、結構恥ずかしいものだ。なんだかその後につなげる言葉が見つからなくて、二人で無言になつてしまつた。うー、気まずい……」うつ時に、気の利いたことが言えない自分が恨めしい。

「あ、あのやー。」「ん？」

凰の口が開いた。言いにくい事を言つよつて、何を言つべきか迷つてゐるよつに。表情をうかがつてみれば、夕焼けに染まつて顔まで真つ赤にして、視線が行つたり来たりしている。

「どうした？ 何かまだあるのか？」

「あ、アンタ…… さつきのあのセリフ。アレ…… その、どうこう意味？」

さつきの、あのセリフ？ そう言われてもぴんと来なくて、記憶を必死に辿る。何か俺言つた？ 礼はいらぬいつことの意味か？ 別に、そのまんまの意味だと思うんだけど…… それとも別のことか？

「ほら、アリーナで…… お、俺がお前のこと守るみたいなこと、言つたじゃない……？」

「あー、なんだ。そつちか

「そう、アレ！ ……いや、私はそんな気はないんだけど、えっと

……

体をもじもじとさせて、上田遣いでさしきを見て、上田遣いと鳳が呟く。別に変なこと言つたつもりはないし、言葉通りの意味だ。

「そのまんまだよ。俺がアンタのこと守るつて、言つた。大切な人だから」

「……つーた、大切って、そ、それって……それ……」

そうだ。何度だつて思つたこと。俺が、今度こそ守つてみせると決めたこと……

「一夏もアンタも、この学園の大切な“仲間”だからな！ 俺が、皆のこと守つてみせるさー！」

ズガソシととんでもない音を立てて、下駄箱の後ろからとか、階段の陰とかから、女子が一斉に滑り出してきた。ありえないものを見たように、皆が皆、小刻みに体を震わせて、ついでに頭も横に振つている。ていうか、皆どこにいたんだ！？ 全然気配なんて感じなかつたぞ！？

「ア……も、……と同じ……ね……」

「へ？ 何だつて？」

周りの皆と同じように、ひざから崩れ落ちて肩を振るわせる凰が何事かを呟いた。それを聞き取れなくて、聞き返そうとしたら、凰がガバリと顔を上げた。

「アンタも一夏と同じような奴なのねっ！ 何よっ！ 一人で勘違いして、緊張してた私が馬鹿みたいじゃないっ！」

「はあ！？ ちょ、何だよ！？ どうじうことだよ！？」

「うるさいっ、唐変木っ！－ はあ……どう断ろうかとか、傷つけちゃ悪いなとか、いろいろ考えてたのに……私もう行くから……じやあ、またね」

頭を抑えて、フラフラと行つてしまつた。マズイな、何か悪いことした？ 身に覚えがないんだけど……

「アスカくん……今のはちょっと……」

「もしかして……アスカくん、鈍い？」

床にずつこけていた女子が皆、俺のことを哀れむような目で見つめてきた。今までとは質の違つた視線の包囲網。恐ろしいことに、以前とは比べ物にならないぐらい視線が痛い。何だ？ 俺、何か言つた？ 教えてくれよアスラン！ アンタなら分かるんじやないか

！？

「み、皆なんでため息ついてるんだ？ ちょっと待ってくれよ、なあ？ 僕の何が悪かったんだ？ 止めてくれ！ そんな目で俺を見ないでくれ！ いや、だけど待ってくれ！」

原因のはつきりしないまま、僕は一人で玄関に取り残された。あー、もー、何だつてんだよ……でも、とりあえず凰には明日謝つておこう……怒らせちゃつたみたいだし……

深くため息をついて、とぼとぼと保健室に向かって歩き出す。今度は夕日が本当に悲しく見えて、ついでに言えば、眩しかった。

第四話『明日を呪すもの』（後書き）

いつも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて一ヶ月間ゲームをハシゴして逃避してしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第五話『明日の仲間たち』（前書き）

以下のことにご注意ください。

- ・勢いで書いてます。推敲が足りていません。
- ・不定期更新です。すみません。
- ・気に入らないことがあつたら、遠慮なくおっしゃってください。
- ・話の切れ目が適当です。なるべく次回は早く更新します。

第五話『明日の仲間たち』

「あー……手が重い」

六月頭の、日曜日の夕方六時ごろ。織斑一夏は、寮の自室でベッドに沈んでいた。たまの休みということで、旧友である五反田の家に遊びに行き、エアホッケーの連勝記録を十六まで伸ばしてきたのだ。名譽ある連勝記録の代償は、腕に鉛のように巻きつくな疲労である。

「うーん……」

何の気もなしに部屋を見回してみても、ベッドは一つしか存在していない。先週までは幼馴染である篠ノ之箒と同室だったのだが、ようやく個室が用意されたのだ。個室といっても、キッチン・シャワー付きであり、広さも十分。先週までの慌しさが嘘のようであり、一夏はのんびりとした個室ライフを満喫していた。

慌しさの原因である箒は、『学年別個人トーナメントで優勝したら付き合え』をした後すぐに逃走。いったい何に付き合つのかは、聞かそびれてしまった。

学年別個人トーナメント 全員参加の、EIS対決のトーナメント戦。一学年訳百二十名なので、かかる期間が一週間。大規模なイベントであり、それだけ校外からも注目されるのだが

「優勝、ねえ……」

箒の発言が一夏の頭をよぎる。姉の織斑千冬に恥をかかせないぐらには、という思いもあつたが、今はそれより優勝候補のことが気になっていた。箒の優勝は、まず阻まれるだろう。一つの確信が、

一夏にはあつた。

(優勝は、シンだろうな)

シン・アスカ　　IS学園一年一組所属の一々名しかいない男子生徒の内の一人。そして第一学年最強を謳われる男。そして一夏にとつて、なくてはならない仲間である。

本人の謙遜に加えて、珍しい男子生徒であるからと本気にしないで、はやし立てて言つている生徒も多い。しかし摸擬戦での経験から、一夏はシンの実力を高く評価していた。

理由は分からぬが、シンは戦闘そのものに慣れていた。

ISの操縦技術は自分と同様に初心者であるのだが、いざ戦闘を開始するとその動きは自分とは比べ物にならないぐらい洗練されている。敵の動きを見て、どう動くべきなのかを体が知つているようなのだ。

さらに、尋常ではない反応速度もシンの武器である。生身での反応速度から、あの鈴を越えているのだ。ISを装着していても、その速さは頭抜けている。

そして最後。ISの操縦技術や知識、そんなハンデを覆すものを持つてゐる。意志の力だ。あの赤い瞳の中にある、燃えるような意志。どれだけの不利な状況でも、一筋の光を導くもの。度々口にする、守るといふ言葉。

悔しいが、今の段階で勝ち手はないだらう。現に一夏は、シンとの摸擬戦で一撃も当たられたことが無い。

それでも、一夏はシンに勝ちたいと思つてゐた。

「……やつてやる」

技術も、経験も、能力も　全て自身の上を行つてゐる相手。それでも、負けられないもの。

大切なものを守りたいという気持ちだけは、譲りたくない。袖の中のガントレットを宙にかざし、一夏は決意を新たにした。

（また訓練、がんばらないとな）

そこまで考えて、その訓練をいつもシンに見てもらつていふことに気付き、一夏は思わず苦笑した。普段は気にならないが、一つ年上であるからなのか、シンはとても面倒見が良かつた。生来の気質でもあるのかもしれない。

意外に子どもっぽいところもあるくせに、時には自分よりずっと大人びた面も見せてくる。

姉が一人いるだけの一夏にとって、シンは友人であると共に、頼りになる兄のようにも思えるのであつた。

「お兄ちゃん、今度は映画観に行こうね！　約束だよっ！」

「ああ、約束するわ」

六時過ぎの駅のホームは、帰宅する人たちでごつた返してゐた。これから俺も、その中に混じつて学園に戻らなきゃいけない。

けど、今日一日はとても楽しかつた。

笑顔で小指を差し出してきたマユと指切りをして、頭をくしゃくしゃとなると、マユは嬉しそうに目を細めていた。その顔を見ると、俺も胸がいっぱいになる。

「おう、何かあつたら連絡しろよ。特に、イグナイテッドの調子がおかしかつたらすぐ言えよ？」

「はい、葛城さん。今日はありがとうございました。見送りまでしてもらつて……」

「なーに、せつかくの休暇だ。マコと出かけるのも久しぶりだしなあ」

そう言つと葛城さんは、頭をかきながらからと笑う。普段の白衣姿から一転、シャツにジーパンというラフな格好だけど、相変わらずシャツの着こなしだらしがない。

ハブニングの中、クラス別対抗戦が終了。というわけで、イグナイティッドの調整、各シルエットのデータの整理、新シルエットの搭載などなど……学園ではできることをしてもらつたために、俺は昨日の夕方から研究所に帰つっていた。久しぶりにマコの顔も見たかったし。

そんな俺を気遣つて、葛城さんは土曜日の夜の内にIoSの調整を終了。日曜日は丸一日休みをとつて、三人で出かけることにしてくれた。マコのリクエストもあって、一日水族館観光。その水族館、定番のイルカショーも大きな人気なのだけど、なによりユニークなお土産が好評を博しているらしい。特に人気なのが『ドキドキ！マリンクッキー！』（税込み1,029円）で、様々な形のクッキーの中、サメ型クッキーを引いたら負けという、パーティーゲームにもつてこいな代物。俺もクラスのみんなにお土産ということで、三つほど購入しておいた。

そんなわけで、久方ぶりの家族サービスということも手伝つて、マコは一日中楽しそうだった。葛城さんも、マコも、元気そうで何よりだ。

「本当に……ありがとうございました。俺、嬉しかつたです」

「いいんだよ、マコも喜んでんだからな。なあ、マコ？」

「うん！ でも、私達のことだけじゃなくて、お父さんもたまには

休まないとダメだよ？」

「ははっ、違いねえや」

三人で笑っていると、先日の乱入者騒ぎも嘘のようだ。誰が、どうして、何のために、全部わからないらしい。この件に関しては口外禁止になつていて、膨大な始末書と一緒に誓約書も書かされたんだけど……大丈夫かな……

「はいっ、これっ！ 貸してあげるから読んでおいてね、お兄ちゃん！」

「え？ マユ、これは？」

手渡されたのは一冊の本。カバーがかけてあつてタイトルは見えないけど、結構な厚さがある。

「今度観る映画、その本が原作なの！ だからちゃんと読んできていね！」

「へー……分かつた。ありがとな、マユ」

「えへへー……」

もう一度頭をなでると、マユの頬が思いっきり緩んだ。つられて俺の頬も緩んでしまう。もうお別れの時間なのが、名残惜しくてたまらない。

「そろそろ電車が来る頃か。じゃあな、シン。今度会うときまでに、渡した装備は使えるようになつとけよ？」

「うえつ！？ まだブラストが残つてゐるのにですかー！？」

「お兄ちゃん、ガンバレ！」

今度は俺が苦笑する番だつた。追加された装備二つは

フォー

ス・ソード・ブラストの三つはインパルスと同じだったんだけど俺の乗っていた機体が元になつてはいなかつた。まさか“あの二人”的装備とはなあ……けど、だからこそとこつた気合も入る。一人には笑われたくない。

「じゃあお兄ちゃん、またねっ！」

「ああ、マコも葛城さんも、元氣で！」

「おーう、良いデータ待つてるからなー！」

改札を抜けて最後にもう一度、一人に敬礼をした。学園に戻ることが寂しい反面、みんなにお土産を渡すのも楽しみだ。大切な人たちと笑つていられる今、俺は幸せなんだろう。

いつか俺は帰らなければいけないけど。

それでも今だけは、もう少しだけ。

明日も、明後日も、その先も……いつしていられる」とを望みながら。

駅のホームの階段を、一段ずつゆっくりと上つていった。

そう言えば……映画つて何を観るんだろうな、さつき渡された本が原作って、マコは言つてたなあ。帰つたらけよつと読んでみようつと。

そして月曜日の朝。心機一転、今日からまたがんばるぞー、と、言いたいところなんだけど……朝から俺は頭を抱えていた。

「まじつたなあ……約束しちゃったもんなあ……」

「おはよつシン、……って、じつじたんだ? 頭抱えたりして

「あ、一夏。おはよつ、実はせ……」

挨拶を交わして早速に相談事。悩みの原因は、昨日マコに渡された本だつた。

読書が苦手なわけじやない。むしろオープにいたころは本はよく読んでいたぐらいだから、好きな方ではある。でも、内容の好き嫌いぐらいは俺にだつてある。

「今度マコと映画を観に行くことになつて、その原作だから読んできでねつて言つてこの本を渡されたんだ」

「ふーん、それで?」

「その本の中身がさ、その……俺の苦手な内容で……」

とりあえず一夏に本を手渡してみる。首をかしげて本を開き、一夏がタイトルを読み上げた。

“ボクはホントはオンナのコト!”……なんだコレ?“

“え、織斑くん、知らないの!?” 今すつじぐ流行つてゐるんだよ!?

「今度映画になるんだよね? いいな、観に行きたいな!」

周りで何かのカタログを見ていた女子生徒が、一斉に俺達を取り囲んだ。ああ、女子は好きなんだうな、じつじつ。確かにそういう内容だつた。

「なあシン、じつじつ話だつたんだ?」

「それは

「

「えっとね、主人公の『香菜ちゃん』は高校一年生。ホントは女の子なんだけど、お家の事情で男子校に通わなきゃいけなのね！ で、高校のルームメイトになつたのが『健一くん』って男の子なんだ！」

「自分が女の子だつてバレたら大変！ 香菜ちゃんは必死に男の子のフリをします！ ところがルームメイトの健一くん！ 香菜ちゃんが女の子だつてことにまるで気付きません！ 激鈍なんだねつ！」

「でもでも、すつぐ優しい健一くんのことを香菜ちゃんは好きになつてしまい！ 健一くんが好きっ！ でもそれを言つたら自分は高校にいられなくなつちゃうつ！ さあ、果たして香菜ちゃんは健一くんと結ばれるのかつ！？」

「 つていう話なんだ……」

俺が説明する前に皆が説明してくれたよ、ありがと。自分で話すのも気が引けていたから良かつた。

そう。この本、あまりにも少女趣味と言うかなんと言つかな内容で……つまり、俺の趣味じゃない。これを映画で観るのは非常に遠慮したかつた。けど、マコと指きりまでしてしまつたので、今更変更なんてできない。ため息の一つや二つ、吐きたくもなる。

あらすじを聞いた一夏は半ば呆れ顔で、苦笑いを浮かべていた。

「……健一くん鈍すぎやしないか？ 気付くよな、普通？」

「普通じゃないんだよ、健一くんは。先輩も含めて」

健一くんの先輩である『彰さん』。これもまた、とんでもない先輩だった。過去に行つたことといえば『彼女に同じプレゼントを延々とあげ続けていたら、いつの間にか彼女は自分の親友に取られた』とか、『彼女に指輪をあげた途端に長期間放置。当然、次にあつた時には彼女は指輪をしていなかつた』とか……優柔不斷で、全く頼りになりそうもない。

俺の上司でさえ、普段は頼りなくてもきつちり決めるところは決めたといつに……健一くんは残念なことに、彰さんにアドバイスを求めてしまう。ダメだつてば健一くん、そんなヘタレを参考にしちゃ。

「ははは……シン、ドンマイ」

「はあ……上映中に寝ちゃうそだよ、俺」

「映画ですか……いいですねえ、恋愛映画……」

だらしなく机に突っ伏す俺の耳に、副担任の山田先生の声が入ってきた。顔を上げると、山田先生は少し遠くを見つめてウットリしている。

「映画の中で抱き合つ一人、……その時、映画館の一人の手もそつと重ねられて……それから……」

「素敵っ！ 女の子の夢だよね、山ちゃんっ！」

「山びー分かってるなあ……」

先生と一緒に女子生徒が複数名、頬に手を当てて惚けていた。辺りの空気がほわほわとして、ハートマークがふわふわ浮いて……苦手だ、この雰囲気。女子ってどうしてこういう話が好きなんだろうな？ ハートマークを手で払いのけながらそんなことを考えていると、この空気におおよそ似つかわしくない声が教室に入ってきた。

「諸君、おはよう。全員席に着け」

「おはようございます！」

一組担任、織斑先生の一聲で教室の雰囲気は一変。みんなが整然と座りなおして、ハートマークはどこかへ逃げていった。流石は織斑先生。俺もその手腕を見習おうか……いや、やつぱり止めど。」。

「今日から訓練機を使用しての本格的な実戦訓練に移る。IFSスースは今日が申し込み日なので、各人のスースが届くまでは学校指定のものを使ってもらつ。忘れたものは学校指定の水着で訓練参加、それもないなら下着で受けてもらつからな」

あー、今日つてスースの申し込み日だつたんだ。皆が見てたカタログはそれだつたんだな。うーん……普通はパイロットスースとかつて所属とか階級とかで規格を統一するもんだと思ってたんだけど、IFSスースはかなり自由がきくようになつていて、学園でも個人のスース所有が認められている。こんな感じでもおしゃれに気を遣うんだな、女子つて。

ちなみに俺のスースは葛城研で作つてもらつた。デザインは俺が着ていたZAF-Tのパイロットスースを参考にしているけど、FAITHのマークは……葛城さんに頼んで消してもらつた。

信念・忠誠・信頼……もう俺には、FAITHを着ける資格があるなんて思えなかつたから。

「では山田先生、ホームルームを」「は、はいっ」

……つて、いけない。連絡事項、聞いてなかつた。仕方ない……後で一夏に聞こいつ。

「今日はみなさんには、なんと転校生を、しかも一一名一紹介します

！」

「え……」

「えええええつー?」「」「

また転校生がやつて来るらしい。教室中がざわざわとして、落ち着きがなくなる。今回は転校生の噂なんて立つていなかつたのだから、尚更だ。

「失礼します」

「…………」

クラスに入つてきた二人。その姿を見て、クラスは静寂に包まる。

銀の長髪、左目の黒い眼帯。そして小柄な体から発せられる『軍人』然とした雰囲気。

そしてもう一人。眩い金髪の、貴公子然とした立ち振る舞い。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

唚然とするクラス一同に礼儀正しく挨拶をして、優しそうな笑顔を向けた。

なあ……今度の転校生つて……

「お、男……？」

「はい。こちらに同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

ついに三人目の男子生徒。しかも一組に一同に揃つてゐる。これなら、女子の反応はそりや凄いことに……

「えつと、シャルルだよな？」

「は、はい」

「耳、ふさいだ方が良い……」

「ああ、早くしないと……」

「へ？」

混乱した表情のまま、転校生は耳をふさぐ。次の瞬間

「「「あやああああああ つーーー」」

大きな歓声が教室を、それこそ物理的に震えさせた。もう衝撃波と言つてもいいくらいに。

「男子！ 三人目だよ！」

「またタイプの違つた！ 美形の！」

「神様、このクラスに入れてくださいありがとうございます！」

今度のお賽銭千円札入れちゃいます！――

「いけない！ 夏「ミミの予定練り直さないと――」

「静かにしろ、全く……」

さやあさやあとはしゃぐ女子を、織斑先生が面倒だとばかりに一蹴する。織斑先生、ものすごい男前ですね。本人の前で言つたらどうなるかは想像したくないので割愛。

「えつと、み、みなさん。まだ自己紹介終わつてませんよー」

その一声で、また教室が静まり返る。これまた見た目から特徴的な転校生が、腕を組んで静かに目を閉じていた。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

従順な返事に正しい敬礼。軍の模範生のようなその動きに、クラスがもう一度唖然とする。ていうか……教官？ なんか一夏から聞

いたけど、事情があつて織斑先生はドイツで軍の教官を務めていたらしい。ということは、その関係者？ じゃあまず間違いなく……軍人だな。

「ここでは教官と呼ぶな。織斑先生と呼べ。それから……他の阿呆にも言つているが、敬礼は止める。ここは軍じゃない」「了解しました」

言いながらチラリと俺を見る織斑先生。ああ、俺は阿呆ですかチクショウ……まあ、今だに敬礼の癖が抜けないから、言い返せるわけないんだけどさ。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「…………」

「い、以上ですか？」

「以上だ」

けんもぼろん、一切を拒絶するような返事。何も言うつもりがないらしい。おろおろとする山田先生を尻目に、つかつかと俺の前にやってきて……

「！ 貴様が 」

「…………？」

腕が大きく振りかぶられ、それが俺の顔面に向かつて放たれた。明らかに敵意をむき出しにして近づかれれば、俺だつて身構える。いきなり打たれた平手を腕で払いのけた。小柄な体から想像できない、躊躇ない威力。

あまりの展開にみんな、ぽかんと口を開けていた。

「し、シン。大丈夫か？」

「いきなり何するんだよつ！？」

「ほつ……受け止めたか。腐つても教官の弟ではある、といつ」と

か

はあ？ 弟？ ノイツ何言つてるんだ？ それは隣の一夏だろ？

「ラウラ」

「はつ、何でしょうか」

「私の愚弟は、その隣の奴だ」

「つー？ ……了解です……」

一言返事すると、ラウラと呼ばれた生徒は顔を赤くして、俺達二人をキツと睨みつけた。そしてまたつかつかと空いた席に歩いていき、どさつと腰を下ろす。

待て、人違ひした拳句に謝りもしないのか？ そもそもいきなり人を叩こうとして何の言葉も無しか？

「おいつー アンタどうじうつもりだよつ！ 聞いてるのかつ！…

「…………」

「アスカ、それぐらいにしておけ。ホームルームはこれで終了。各人、すぐに着替えて第二グラウンドに集合だ。今日は一組と合同で模擬戦闘を行う。解散！」

「」の話はお終い、とばかりに織斑先生が手を叩いた。正直言つて納得できないけど……早いとこ教室から出て行かないといけないから、ぐつとガマンする。

いちいち空いてる更衣室をチェックして、そこまで移動しなければいけないのが辛いところだ。流石に女子と一緒に着替えられないと。

「アスカ、デュノアの面倒はお前が見てやれ。ああ、それから今日からお前はデュノアと同室だ。放課後荷物をまとめる。部屋を移つてもらひ」

「はい、了解であります」

勝手に敬礼をしそうになつた腕を抑えての返事。部屋の移動か：：たいした荷物があるわけじゃないから、移動は楽だな。誰かと相部屋になるのもミネルバ以来だ。

「えつと君がアスカくんで、そちらが織斑くん？ 始めまして。僕はシャルル」

「ああ、挨拶は後にして。早く抜けないと」

「シン、俺が前に出る。シャルルは一番後ろがいいな

「え？」

挨拶の言葉を途中で遮られて、事情が飲み込めていない様子のシヤルル。まあ、説明しなくても廊下の様子を見れば分かるはずだ。

「ちょっと走るけど、大丈夫だよな？」

「え？ う、うん」

「心配するなつて。シャルルのことは俺が守るからさ

そう言つてシャルルの手を取つて、一夏の後ろにつく。三人で一列縱隊、目指すは第一アリーナの更衣室だ。

「行くぞつ！」

「了解つ！」

「え？ え？ え？」

一夏の声を合図に三人で廊下に飛び出した。他のクラスから覗き

に来た女子たちを次々に抜き去り、階段へと駆け抜けていく。人だかりをかき分け、前へ前へ。

「転校生発見しました！」

「小隊単位で移動中！ 速いです、追いつけません！」

「ちいっ！ 第二部隊で足止めを！ 校舎を出る前に食い止めるのよつ！」

予想通り、今日は女子の人数が半端じゃなかつた。もののいいセリフや通信機が、その気合の入り方を物語ついている。通信機なんてどこから持つてきたんだ？ それにいつ部隊が編成されたんだ？

「ここまで来れば安心だな。シャルル、平気か？」

「うん、大丈夫だけ……」

「早く慣れたほうがいいぜ？ しばらくはこんな調子だらうからな」

階段を飛び降りるよつに下りて、追つ手を振り切り、早々と校舎を出ることができた。速度を落として、駆け足でアリーナに向かう。慣れてくればこれが準備運動代わりになるので、着替え時間の確保に加えてストレッチの時間も多少節約できるわけだ。

「それでも、何でみんな騒いでるの？」

「え？ 男が少ないから目立つんだろ？」

「つまり俺達はウーパールーパー状態なわけ」

まだシャルルは困つたような顔をしていた。ああ、多分ウーパーなんとかが分からぬんだわ。確か

「ウーパールーパー。二〇世紀の珍獣で、昔日本で流行つたんだとさ」

「ち、珍獸？」

「一夏、その例えだと分かり辛いって。パンダならもつとグローバルで……」

「あ、パンダなら知ってるよ。中国のカワイイ珍獸だね。あ……結局珍獸だ」

自分の言つたことに気付いてクスクス笑うシャルル。俺と一夏もつられて、三人で一緒に笑う。いや、仲間が増えたのはいいことだ。珍獸の仲間だけ。

「よし、到着！……つと自己紹介がまだだったな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「俺はシン。シン・アスカだ。シンって呼んでくれ。これからよろしくな」

「うん。二人ともよろしくね。僕のこともシャルルでいいよ」

プシュッヒドアの空気が抜ける音を聞きながら、俺達は自己紹介を済ます。シャルルの人懐っこそうな笑顔を見て、さつき叩かれかけた怒りが少し薄まつた。全く……ラウラ、だつたつけ？ アイツが男じやなくて良かつたよ。男だつたらまず間違いなく殴りかかつてる。俺も少しばかりの短いのが直つたつもりだけど、流石に、突然叩かれそうになれば頭に来るさ。

「えつと……ねえ、シン……」

「どうした？ 何でも聞いてくれよ？」

「いや、その……手……」

「ああ、悪い悪い」

そう言えばシャルルと手を繋ぎっぱなしになつた。いけない、気をつけないとまた男色家疑惑が浮上する……一夏どじろか、シャルル

まで巻き込むわけにはいかないからな。

でも、手を繋いだぐらいでどうしてそんな噂が立つんだ？ ヴィーノはショッちゅう俺達に抱きついてたのに、誰もそんな噂立てなかつたぞ？ ……アレか、人柄つて奴なのか？ なら俺の人柄は信用されないってことなのか……？ ちょっとショックだ。

「シン、どうしたんだ？ 早く着替えちまおつぜ？」

「あ、ああ。そうだな……あれ？ シャルル、どうかした？」

「いや、何でもないよつー？ き、着替えるから、そのつ、あつち向いてて……」

「ん？ ああ、いいけど……」

どうしたんだろう？ シャルルの奴、なんかもぞもぞして……何か着替えるのに不都合があるのか？

シャツを脱ぎ捨てながら、一夏とお互いに顔を見合わせる。一夏も不思議そうな顔。

そう言えど、こんなシチュエーション……ビックで、見たことあるよつな、いや、本で読んだことあるよつな……

「あつ！ 思い出した！ シャルル、お前もしかして……」

「つ！？ いや、僕はつ！ それはつ！？」

「ゴメン、気がつかなくてつー！ 俺達は手前で着替えるからー！ シャルルは奥に行つてくれー！」

「……へつー？」

「一夏、ほら、じつちだつて……」

「なんだ？ シン、どうこつことだ？」

気付いていないらしい一夏に、シャルルに聞こえたよつこ声のトーンを抑えて説明する。

「ほら、事故で怪我とか火傷の痕が残ることあるだろ？ あれ見られるの嫌がる人もいるんだって」

「ああ、そういうことか！ やべ、気が回らなかつたな……分かつた、気をつけろ」

アカデミーの本に載つていた、仮面をつけた金髪の人。火傷の痕を隠すために仮面を着けてるって話だつた。えつと白服のエースパイロットで名前は……なんだつたかな、ラウ・なんとかさんだつて。とにかく、そういうのを気にする人は気にするから、こつちも気を遣わないと。

……なんだかとんでもない勘違いをした気もするけど、気のせいだよな。気のせいな……はず。

「着替え終わつたか？ シャルル、悪い。俺ぜんぜん気付かなかつた」

「今度から、俺達もつと気をつけろよ」
「い、いや、いいよ別に。ありがとう……」

更衣室を出てグラウンドに向かう道すがら、改めて俺達は謝る。シャルルも許してくれたみたいだ。うーん、懐が広い。どつかの誰か達に見習わせたいよなあ……すぐに木刀振り回す奴を筆頭に。どこで聞かれてるか分からなから、言わないけど……

「シャルルは優しいな。どつかの誰か達に見習わせたいぜ……」

「どつかの誰か達？」

「ああ、木刀振り回す人間凶器の幼馴染とか」

「つー？ 一夏、それ以上言つちやダメだつー？」

しました。一夏は全く俺と同じことを思つていたらしい。そして、それを口にしてしまつてゐる。さらに言えば、一夏は気付いていな

い。鬼さえも逃げ出しあつた殺氣が三つ、背後から近づいてくることに……

「 すぐに銃を撃つ短氣なお嬢様に、これまた短氣で口の悪いセカンド幼馴染とかにな」
「 シャルル、逃げるぞ」
「 へ？」

俺は後ろを振り返らずに、シャルルの手を再び取つて全速力で走り出した。きよとんとしている一夏を置いていくのは少し心が痛むけれど、そんなことに構つていられないと俺の中の防衛本能が叫び声をあげる。

「 シン、シャルル。何で走るんだ？ まだ時間は余裕が」
「 そうだな、一夏……貴様が念仏を唱える時間はたっぷりあるぞ？」
「 ええ……一夏さん。覚悟はできています？」
「 短氣で口が悪くて、何だっけ？ もう一度言つてみなさいよ？」
「 つ！？ 築、セシリ亞、鈴！？ シン、助け」

背後から身も心も凍りつくような悲鳴。『ゴメン、俺……守るつて言つたのに。守るつて、言つたのに……頼りにならなくてゴメン。

「 シン、一夏のことのはいいの？」
「 シャルル、一夏のことのは忘れちゃいけない。アイツは良い奴だった」
「 ふつ……あははつ！ 一夏もシンも、にぎやかで面白いなあつー」
「 何だよ、笑うことないだろつ！？」
「 ふふ、シンも笑つてるじゃない」

一人で笑いながら、グラウンドに向かつて走り続ける。

今日の訓練も、気を引き締めてがんばろう。

また一人 大切な仲間ができただんだから

その明日を守れるように。みんなの明日を守れるように。

それから、遠くで悲鳴をあげ続ける大切な仲間が、無事に明日を迎えられますように。

第五話『明日の仲間たち』（後書き）

どうも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて『バイクと合体！ ちくわヘルシー究極体！』になつた挙句に爆碎してしまいます。お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第六話『明日からみんなへむ』（前書き）

- 以下のことにご注意ください。
- ・ 今回とても短いです。ごめんなさい。
- ・ 次回更新は土日になると思います。
- ・ 誤字脱字、バンバンご指摘ください。

第六話『明日からひみしへね』

大切な仲間といつ尊い犠牲のおかげで、俺とシャルルは授業の開始に間に合った。

六月の頭。まだ梅雨入りしていないおかげで、グラウンドはからつと渇いていて気候も申し分なし。朝の日差しもさわやかで、時々聞こえる小鳥の鳴き声が、さつきから耳にこびりついていた友の叫び声をさらさらと洗い流してくれる。

「一夏、お前の犠牲は無駄じゃなかつたぞ……」

整列に加わりながら、神妙な面持ちで遠い空に向かつて敬礼。失言には気をつけよう、マジで。

そんな俺の様子がおかしかつたのか、隣のシャルルも周りの女子もクスクスと笑っていたけれど、今は笑われても構いやしない。そうさ……散つていつた友の無念に比べれば……

「アスカ。織斑、オルコット、篠ノ之、凰《ファン》がいないうだがどうした？」

「はっ！一夏が他三名の手にかかつて星にされているばずです！」「そうか。後で全員ペナルティだな」

織斑先生の詰問に対し、友を庇いたてる言い訳もせずに正直に報告。腕組みをといて出席簿を振るう姿は、鬼教官のそれだつた。三人の魔の手から逃れたとしても、今度は鬼教官の手によつて地獄に突き落とされる一夏。悪いな……後で薬塗つたり、包帯巻いたりぐらいは手伝つから。

「授業には絶対遅れないようにな、シャルル。もし遅刻したら……」

「そうだね。ああなるのはちょっと遠慮したいかな」

そう言つてシャルルが目をやつた先では、四人が仲良く出席簿とスキンシップを始めている。バシンッ！ バシンッ！ バシンッ！ バシンッ！ 広いグラウンドに四つ、渴いた音が鳴り響いた。

「専用機持ちはアスカ、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。今回はハムグループになって実習を行う」

織斑先生が手を叩いて合図をする。今日からは実戦訓練だ。実践演習も見せてみよう、ということでの、さつきまで山田先生がセシリアと凰の相手をしていたんだけど……一人は見事に惨敗を喫していった。連携の取れてない二人を軽くあしらつた山田先生は、皆の見る目が変わったことに気付いて、自信ありげに胸を張っている。山田先生、あんなに動けたんだな……知らなかつた。入学試験では手加減してたんだろうな。

「アスカ以外の専用機持ち五人がグループリーダーを担当するようにな。出席番号順に一人ずつ各グループに入ること。いいな？ では分かれろ」

「へ？ あの、織斑先生。俺は……」

「お前は山田先生と一緒に各グループの見回りだ」

「あ、はい。了解です」

とりあえずテケテケと山田先生の隣まで歩いて、指示を待つことにする。山田先生は上機嫌で、いつもみたいに慌てた様子もなく各グループに訓練機を配っていた。これなら俺必要ないんじやないか？ ちょっと楽ができそうだ。

「アスカくんはグループを一つずつ回つてください。なるべく女子だけのグループの方にいてくださいね？ そうじゃないと不公平ですから」

「不公平？ や、山田先生、俺だけ外されたのって……」「がんばってきてくださいっ！」

につこり笑つて山田先生に送り出された。ああ、そういうことか。女子生徒のサービスに俺が各グループを回ることね……ちつとも楽できそうにないや。

愚痴を言つても仕方がないので、セシリアの班から順番に見ていくことにした。まあ、見てるだけなら大丈夫だろ？、と軽く考えてグラウンドを歩き出す。

そんな淡い期待は、脆くも打ち破られることになつたんだけど。

「……ゴメン、一夏。多分お前を見捨てたから罰が当たつたんだ」「いや、あれはどうしようもなかつた。失言した俺のせいだ」

昼休み。屋上。咲き誇る花と、石畳に円テーブル。華やかな椅子に。最高の日差し。まるで庭園のように手を入れられたその場所で、俺は天を仰いでいた。

各グループの見回りだつて？ 見ているだけだつて？ 「冗談じやない。

実質三班が全部、俺の担当の班みたいなものだつた。なにしろ、女子がみんな“俺に”アレコレ頼んでくるのだ。班長を無視して。

『アスカくん、私はパラメータの見方が分からないの！』

『私は起動シークエンス！教えて教えてっ！』

『実は動かし方から分かりません！手取り足取り教えてくださいっ！』

『アスカくんっ！』『アスカくんっ！』

……あらだけの要求を全てこなせたのだから、もしかしたら俺には教官の素質があるのかもしれない。いや、素質があつたとしても無理だ。教官には絶対になりたくないよ。先生方はいつもこんな苦労をしてたんですね、お疲れ様です。

そんなこんなので、セシリ亞班、鳳班、そしていたたまれない空気全開のラウラ班の三つを回るだけで俺の精神は限界を突破。逃げるようにな……というか、シャルル田当ての女子で埋め尽くされている食堂から本当に逃げてきて、ようやく人心地がついたところだった。

「失言は許してやるう。しかし……どうこうことだ」

「ん？ 折角の昼飯だし、天気もすげーいいし、大勢で食つたほうがうまいだろ」

俺の知らないところで昼食の約束をしていたらしい。なぜだか分からぬけど、篠ノ之が不満げに呟いていた。セシリ亞も鳳も、それぞれが妙な緊張感を保ちながら座っている。もうそんなことに気を遣つてられるほど元気じゃない俺は、椅子に力なく腰掛けながら、購買のパンの包みを開けていた。

「えつと、シン。本当に『』馳走になつて良かつたのかな？」

「遠慮するなつて。朝のお詫びと、転校祝いだからさ。それぐらいしかしてやれなくて悪い」

で、俺の隣に座っているシャルル。昼食は食堂でパンを買つとの話だったので、お金は俺が全部持つてそのまま屋上に誘つことに。女子の誘いを丁寧に断つていくその様子は、まるでテレビか映画に出てくる紳士そのものだった。どうしたらあんな振る舞いが身に着くんだろうな？ まあ、俺が知ったところで真似しても似合わないだろうから、いつか。

「困ったことがあつたらすぐに言つてくれ。数少ない男子なんだから、俺も一夏も協力するよ」

「ああ、EISのこと以外はなんでも聞いてくれ」

「ありがとう。一人とも優しくて助かるよ」

笑顔のシャルルに敬礼で返事。特に俺はシャルルと同室になるんだから、できるだけサポートしないと。俺も一夏も最初のうちは手探りの生活だったから、シャルルにはそんな苦労をかけさせたくない。いや、マジで大変だったからなあ。

「そうだ、一夏。午後の授業はEIS整備らしいけど復習してあるか？ 前に白式の調整した時に教えたことを覚えてれば、午後はバッチリだぞ？」

「おお、大丈夫だ。いつもいつも助かるぜ」

放つておけない仲間がもう一人。俺も一夏も学園生活には慣れてきたんだけど、まだ慣れないきやいけないものはたくさんある。機械の整備に戦術理論の勉強なんて普通の学校で教えることじゃないから、そういうた経験のない一夏は大変だ。なので、俺も手伝えることはなるべく手伝つようにしていた。ルナも言つていたように、困つた時はお互い様つてことだ。

「ははっ、シンつてば一夏のお兄さんみたいだね」

「え、俺が？」

「千冬姉よりよっぽど優しいからなあ、嬉しい限りだ」

そんな大したことしてるわけじゃないのに。でも、そう言つてく
れると俺もちょっと誇らしい。思わず鼻の頭をぽりぽりかいてしま
う。

「そんな、俺なんか」

「アスカが兄？ それにしてはコイツは大人気ないな」

「まあ、面倒見の良い所は認めますわ」

「あと似なくて良いところが似てるわね。鈍いところとか」

半眼の女子三人がチラリとこっちを見て、口々に冷ややかな言葉
を浴びせる。大人気ない？ 自分のことを棚に上げてモノを言いや
がつてコイツら……ちょっと力チンときたけど、出かかつた皮肉の
言葉を無理やりに飲み込んだ。もしここで

『へえー。優しくて大人なお姉さん方三人は弟をいじめたうえに、
その弟と一緒にになって怒られるんですね？ ああ、こういうことを
言うから俺は子どもなんだって？ 悪いなあ一夏。でも、大人気な
いお兄さんはお前をいじめたりしないからな』

なんて言おうものなら、ステラと約束した大切な明日が消し飛ぶ。

女尊男卑。女性は強い。男は弱い。

「はいはい、俺は大人気ないですよ」と

「そういう言い方が大人気ない ってシン、ビニイイぐのよ？」

「取りに行くものがあるから。みんなはここで待つてくれ」

パンをほおばったままさつさと走り出す俺。せっかくみんなで集

まつてゐんだから、今之内にアレを使うことにしよう。

「お待たせみんな。ほら、これ、お土産

テーブルの上に水族館の土産を置くと、みんなの視線がそこに集中する。

仲良しグループとの楽しい昼食。こんな時にぴったりのお土産、その名も

「あ、これ『ドキドキ！マリenkッキー！』じゃん」

「何だ、それは？」

「まあ、箱を開けてみたら分かるって」

女子の文化に疎そうな篠ノ之。知名度が高いといつこのクッキーも知らなかつたらしくて、首をかしげて覗き込んでいた。

サメの口の形になつている箱を開けると、中には説明書が入つている。それを取り出した篠ノ之がツラツラと読み上げた。

「なになに……『ゲームのルールだよつ！

- 一・順番を決めてねつ！
- 二・順番にクッキーを取り出してねつ！
- 三・サメの形のクッキーを取つた人が負けつ！
- 四・負けた人は、パッケージの底に書いてある罰ゲームだよつ！』

……だそうだ

「へー、なんだか面白そつだね」

「クッキーでしたら、食後のお茶うけにもちょうど良いですしね

「罰ゲームか……嫌な予感しかしねえ」

「シン、やるじゃない。順番どつするつ！」

「席の順で良いんじやないか？」

それなりに好意的な反応が返ってきたので、レツ・・プレイ。順番は鳳・セシリア・篠ノ之・一夏・俺・シャルルだ。みんながテープルの中央、サメの口に順々に手を入れていく。

「よつと……カメね。セーフ
「わたくしは……ペンギンですわ
「これは星か？ いや、ヒトデだな」
「どれどれっと、これはクラゲか？」
「俺は……タコか。セーフだな」

最初は和やかに始まつたゲームも、一巡、二巡としていくうちに嫌でも緊張感が高まっていく。サメの口に伸びる手は、噛み付かれることを恐れるように、次第に慎重になつていった。段々クッキーを味わう余裕が無くなつてきたぞ、おい。

.....

そして最後の一巡。未だにサメを引き当てたやつはいない。残りは六つ、俺の順番は最後から一番目。つまり、誰かが先にサメを引かなければ、俺の負けはかなりの高確率になる。ここまで来たら負けたくない。

わ、私の番ね……」

凰が恐る恐る箱に手を入れる。その手に掴まれていたのは

「イルカつ！ やつた、私はあがりねつ！」
「くうつ…………わたくしの番…………」

ぐつとガツツポーズを取る凰と対照的に、緊張した面持ちのセシリ亞。その手を残り四人が固唾を呑んで見守る。

「 ふふっ！ ラッコですわ。当然の成り行きですわね」

オホホと笑うセシリ亞。残り四人。次は篠ノノだ。

「ふーっ……はあっ！」

田を閉じて深呼吸をした後、気合を込めて箱から手を取り出す。頼む。そろそろサメが出てきてもいい頃だつ！

「ふん、シロクマだ。田の修練の結果だな

篠ノ乃是腕を組んで勝ち誇っていた。いつからお前はクッキーを取り出す訓練をしてたんだ？ ……じゃない。女子三人は抜けた。残りは俺たち男子三人。

「シン、シャルル」

「え、何？」

「一夏、どうしたんだ？」

一夏は手を箱の上に伸ばしたまま、クッキーを引かずに俺たちを見た。ニヤッと笑うと、コブシをぎゅっと握る。

「恨みつけなしだぜ？」 「うおおおおおつー 来いつ！」

確立三分の一！ 先に抜けた三人も俺もシャルルも、みんなが身を乗り出して一夏の手に掴まれたもの、勝負の行方を見守る。一夏

の手が、サメの口から脱出して天へと駆け上がつていいく。穏やかな午後の光に照らされたものは

「サメっ！ 一夏の負けだねっ！」

「ぐつ……ちくしょう、だから嫌な予感がしてたんだ……」

一夏は肩を落としてクツキーをポリポリかじる。その後ろを女子三人が取り囲んで『情けない』だの『田じろの行いのせいだ』だの言つて追い討ち。助かった俺とシャルルはその後ろでハイタッチを交わし、残ったクツキーに手をつけていた。さて、罰ゲームの内容は何だろうな？

「ま、どうせたいした罰ゲームじやな 」

ポトリ、空になつた箱が地面に落下する。箱の中の指示を見た途端、一夏は凍りついたように動かなくなつてしまつた。真つ青な顔で何もない虚空を見つめている。

「おい、どんな内容なんだ……」

箱を拾い上げて、五人で箱の中の文字を田で追つていく。

意地の悪そうなサメの絵と吹き出し。

その文字列の意味を脳が処理し終わつた時、俺たちは全員吹き出していた。

夜になつて部屋を移動した俺は、新しくなつた部屋でシャルルと談笑していた。一夏は事情があつて、今日は一日来れないだろう。

「それにしておいても……負けなくて良かつたね、シン」「うん……一夏は氣の毒だけど」

負けなくて良かつたってのは、あの『ドキドキ！マリンビスケット！…』のことだ。あんな恐ろしい罰ゲームだとは思いもしなくて、氣楽に買つてきてしまった自分が恨めしい。

恐怖の罰ゲーム。一夏が引き当てた罰は

『今日一日は語尾に“マリンッ！”を付けること…例外は認めないからなっ！』

という噴飯ものの内容。流石に織斑先生の前でそんな真似をしたらシャレにならないので免除はしたもの、それ以外では本当に一夏は語尾に“マリンッ！”を付けてしゃべるのために。

その様子はそれはもうおかしくて、今日一夏と話をして笑わなかつた人は（織斑先生を除いて）いないぐらいだ。きっと一夏の心には深い傷が残つたことだろう。明日から口数が減るかもしれない。ちなみに、一夏がこの部屋に来られない原因がコレ。語尾にマリンを付けたまま話すのは嫌だつて。さうに、それで済まなかつたのが一夏の不運なところだつた。

「食堂も大騒ぎだつたし、一夏は厄田だつたんだな」「すうじい盛り上がり方だつたね。びっくりしたなあ

一夏が受けた罰ゲームの事情を聞いた一年一組の生徒は『すうじく面白そうっ！』と言つて食堂に集合。第一回の『ドキドキ！マリンクッキー…』を開始してしまつた。そして一組生徒は強制参加。俺もシャルルも……一夏も参加することに。

それでも、ゲームに負けたのは一夏じゃなかつた。負けたのは、一夏の隣にいた篠ノ之。普段の固い口調に“マリンッ！”がつくるはさぞ面白い光景だらう。そう思つてみんな笑つていたんだけど…

…『ドキドキ…マリンクッキー…』の罰ゲームは一種類じゃなかつた。どうやら、箱毎に罰ゲームの内容が違うらしい。

篠ノ之が受けた罰ゲームは

『前の順番の人にロマンチックな告白を！　あ、告白された奴はちゃんと返事しろよ！』

だつた。前の奴？　もちろん一夏だ。今でも思い出すと…ダメだ、笑っちゃ…いや、でも、アレは…

『一夏…私はずっとお前のことが　つ！　好きだつた！　好きだつ、一夏あつ…』

『俺もお前のことが、篠のことが好きだマリンつ…』

コレを聞いて笑うなつてのが無理な話だろ？　一人とも顔を真つ赤にして、篠ノ之は耐えられなくなつたのか木刀で一夏に殴りかかり出した。アレは確かに恥ずかしい。ていうか一夏、よくあんな状況でまで罰ゲームにこだわれたな。

まあ、そんなこんなで心身ぼろぼろの一夏。今日はもう誰かに会いたくないそうだ。だよなあ。

「今日はにぎやか過ぎるぐらいだつたけど、これから少しすつ落ち着くと思うから安心してくれ」

「うん、分かつた」

「放課後の訓練も明日からかな。シャルルも良かつたりどつだ？　俺も一夏も歓迎するよ」

「いいの？　じゃあ、僕も仲間に加えさせてもらひつよ。専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「ああ、決まりだな。」

「コーヒーカップを片手に落ち着いた会話。一人部屋が寂しかったわけじやないんだけど、いつもって話しだすとく気持ち

が楽になる。シャルルは物腰が柔らかだから、いつも気を置かず
に話せるのがありがたい。

そう言えば、レイともこんな風にコーヒーを飲みながら話してた
つ。訓練の愚痴を言つたり、授業の予習を手伝つてもらつたり、
たまに怒つたり怒られたり、船に乗つてもそれは変わらなくて、時
には大事なことを打ち明けあつて……俺にとつて最高の親友だった。

なあレイ、俺もお前みたいになれるかな？ 厳しいところもあつ
たけど、頼りがいがあつて、優しくてさ。アカデミーからずっと、
俺の兄貴分はレイだつたんだ。お前のこと、俺すつじく尊敬してた。
だからさ、俺もお前みたいにがんばるよ。お前の分の明日も生き
て、みんなを守つてみせる。

「シン？ デラかしたの？」

「なあ、シャルル……」

「コーヒーを飲み干して、カップを置く。今は遠い親友と、今ここ
にいる仲間にむけて。

「俺が必ず、シャルルのことを守つてみせる」

「えつ……？」

「約束だ」

守つてみせる。大切な仲間達、大切なもの。今度こそ、全て。

「う、うん……ありがと、シン」

そう言つとシャルルは、はにかんだように笑つた。トクンッとい
つ、心臓が大きく跳ねる。えつと、どうしてだ？

「と、とつあえず明日からよろしくな。カップは俺が片づけるから
「うん、よろしくね」

顔を合わせていられなくて、慌ててカップを持ってキッチンに入
る。その後は早めに消灯して寝ることにした。

どうしてなんだ？

真っ暗な部屋で田をつぶついても、まぶたにさつきのシャル
ルの笑顔が張り付いている。思い出すたびに、なんだか心がざわつ
く。

どうして、だ？

シャルルの見せた、あの笑顔。

見た目も声もまるで違うのに、重なるものがあった。

メサイアで……最後の出撃の時に見せた、レイの笑顔に。

第六話『明日からまたしへね』（後書き）

いつも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて『グオレンダア
!』してしまいます。

お気軽に『感想をください』。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第七話『君がくれる明日』（前書き）

- 以下のことにご注意ください。
- ・今回も短いです。ごめんなさい。
- ・執筆時、頭が働いていません。本文中にも不備があると思いますので、ご指摘はバンバンお願ひします。

第七話『君がくれる明日』

フランス代表候補生シャルルと、ドイツ代表候補生のラウラ。二人の転校生を迎えて、俺の学園生活はますます賑やかになっていた。相変わらず勉強と訓練は大変だけど、シャルルという心強い仲間が増えたおかげで、それも随分とはかどるようになった。

なにしろシャルル、俺と一夏に欠けていたISの『知識』がある。完全素人の一夏に、戦闘に関する以外はダメダメな俺と比べたら、その差はまさに『月とすっぽん』ってやつだ。というわけで、いつものメンバーにシャルルを加えて、俺たちは午後の訓練に精を出していた。

「なあ一夏。シャルルの射撃を回避するのはいいけど、その後の姿勢まで考えられたか？ 崩れた姿勢に第一射、第三射つて直撃させられただろ？」

「確かに……第一射は避けられたんだけどなあ」

「最初の射撃は牽制だったからね。一夏はそれに引っかかっちゃつたんだよ」

「うつ……そうだったのか……」

軽い摸擬戦の後の反省会。今回は一夏とシャルルで試合をして、結果の分析をしているところだ。語尾にマリンというトラウマを乗り越えて、一夏も結構動けるようになつたんだけど、まだまだ射撃への対応が弱い。接近戦しかできない一夏が戦い抜くには、どうしても射撃をかいくぐる技量が必要になつてくる。

「射撃武器の特性も把握しないと、今みたいに回避先を誘導されて追撃されるからね」

「それに一夏は『イグニッシュン・ブースト瞬時加速』に頼りすぎだ。アレは奇襲をかけるた

めのものだつたろ？ 何度も使つてれば、いくら速くても簡単に捌けるさ。動きも直線的だし」

「うーむ……なるほど」

実際に模擬戦をした相手からのアドバイスに、それを觀戦していった側のアドバイス。これなら今までより効率良く戦闘のレクチャーができる。シャルルの説明は分かりやすくて丁寧だから、その分の上乗せもあつて更に効率的に。いや、今までだつて模擬戦の相手は俺以外にもいたんだけど、その相手が

「私のアドバイスを聞いていなかつたのか？ 軟弱な奴め」

「せつかく人が親切に教えてあげたつてのにさあ」

「わたくしの理路整然とした説明があつたというのに」

向こうで文句を言つている三人だ。篠ノ乃と鳳^{ファン}の二人は説明が感覚的すぎて、まず理解ができない。逆にセシリ亞の場合、説明が整然としすぎて意味が分からぬ。過ぎたるはなお及ばざるが如し、三人にちょうど良いつていう言葉はないらしい。

ちなみに篠ノ乃の奴は、この前の『マリンクッキー食堂大暴れ事件』以来、一夏と会つても顔を真つ赤にして無視をしてばかり。一夏も『罰ゲームとは言え、そんなに嫌だつたのか？ 結構ショックだな……』としょげていたので、俺も付き添つて二人で謝つてみた。そうしたら今度は『この鈍感朴念仁兄弟めつ！』って怒鳴られて……。その時は逃げ帰つたんだけど、どうやらもう許してくれたみたいだ。怒鳴られた原因が分からぬままなのは、この際置いておくとしよう。

「一夏の『白式』には後付^{イフライザ}武装がないんだよね？ それって多分、ワンオフ・アビリティーに容量を使つてるからかな」

「ワンオフ・アビリティーつて……シン、なんだっけ？」

「いや、俺も覚えてない……シャルル、それって何？」

後ろで呆れてため息をついている三人を無視して、俺たちはシャルルに尋ねた。繰り返すけど、俺と一夏に『知識』はない。でも、今はそれを補つてくれる仲間がいる。友情って素晴らしい。

「言葉通り、唯一^{ワンオフ}使用の特殊才能^{アビリティ}のことだよ。白式だつたら『零落白夜』だし、シンの『イグナイテッド』なら、あの特殊装甲がそうなのかな」

「『フェイズシフト』のことか？　へー、そうだったんだ」

特殊装甲フェイズシフトは、実体弾・実剣のダメージを相転移・無効化する。モビルスーツには結構搭載されてたし、インパルスにも使われたから特別なものって認識はなかつたんだけど……言われてみれば、今までフェイズシフト装甲が使われてる工^ワつて見たことなかつた気がする。

「第一形態でのアビリティーの発現なんて前例がないから、白式の^{バズズロット}拡張領域が空いてないのもおかしくないんだけど……」

「でも、シンのイグナイテッドはどうなんだ？　メチャクチャな容量があるぜ？」

「それは僕にも……戦闘中にパッケージの換装ができる機体つてのも聞いたことがないよ」

やつぱりシャルルでも分からないらしい。勝手に装甲を作るわ、追加武装の設計をするわ、それにプロテクトをかけて使えなくするわ……イグナイテッドは本当に良く分からぬ代物だった。そもそも、なんで女性にも使えなかつた『欠陥品中の欠陥品』が俺に使えたのかも分からぬ。ていうか、俺がこの世界にいるのも……ああ、やめたやめた。

「考へても仕方ないか。とりあえず話を先に進めよう」

「それもそうだね。折角だし、一夏も射撃武器を使ってみる?」

「え、他の奴の装備つて使えるのか?」

「所有者が許可を出せばね」

「そう言つてシャルルが銃を一夏に渡した。この調子なら俺が見て
なくても良さそうだし、自分の訓練でもさせてもらおうかな。」

「シャルル、一夏のこと見ててもらつていいか? 俺もコイツの練
習が必要だからさ」

「うん、良いよ。けど、その鉄パイプはどうしたの?」

「いろいろ事情があつてさ……」これを使いこなせるようにならない
といけないんだ」

俺の手に握られているのは、研究所で散々お世話になつたあの鉄
パイプだつた。次のシリエットの開放の鍵。それがこの鉄パイプだ。
長距離射撃戦対応装備、プラスチックシリエット 大口径ビーム砲
にレールガン、さらに連装ミサイルランチャーに接近戦用のビーム
ジャベリンを備える火力重視の装備だ。未だにプロテクトが解除さ
れていないこの装備。その理由は接近戦用のジャベリンだ。

モビルスーツでもIISでも、照準を付けて引き金を引く作業は変
わらない。プラスチックの装備はほとんど射撃武器だから、感覚の違い
に戸惑うことも少ない。きっと手早くプロテクトも解除されるはず
つて思つてたんだけど……ビームジャベリンのこと、すっかり忘れ
てた。槍を使った経験? セイゼイアカデミーで使つた銃剣が関の
山。

「というわけで、またしても俺はIISを装着して鉄パイプを振り回
すはめになつた。今度は鉄パイプをブン投げて、的に命中させられ
ないといけないらしい。傍から見たら、変なことやつてるよつて思

われるんだろうなあ……HSの訓練なのに、鉄パイプで槍投げって。 そうだ、セシリ亞のビットでも的にさせてもらおうかな。流石に怒るかな？

「ねえ、あれってドイツの第三世代型じゃない？」

「ホントだ。まだ試験運用中じゃないの？」

アリーナいつぱいに詰め込まれた生徒が一斉にざわつき始めた。 だれかにぶつけないようになると端っこに歩き始めていた俺も、そのままめきの中心に目を向ける。

黒い装甲を身にまとった、銀髪のその姿。ラウラだ。自分に視線が集まるのを意にも介せず、その赤い瞳の先には、一夏がいた。刹那、視界に映し出されたウインドウ。戦闘状態の確認、熱源の感知、発砲

「つー？」

「……ふん、また止めたか」

「アンタ、どういうつもりだ」

右肩のレールカノンが煙をあげている ラウラはいきなり、気付いてない一夏に向かつて発砲したんだ。なんとか割つて入れたけど、これだけ大勢の人がいる中で……何を考えてるんだ。

「やはり、な」

「何がだよ」

無表情だったラウラの顔に薄笑いが浮かんだ。冷たいその笑みが、周囲の空気を凍りつかせる。首筋には、俺が当てているナイフがあるにも関わらずに。

「どこでそのナイフを覚えた？　抜き方も構えも、素人のものじゃないな」

「アンタには関係ない。どういうつもりかって、聞いてるんだ」

「答える気がないならそれでいい」

そう言つとラウラはナイフに手を添えて、ゆっくりとそれを下ろした。薄笑いは消えて、表情のない顔を、俺と一夏に向ける。

「貴様はなぜそいつと一緒にいる？　貴様には力がある。そいつと違つてな」

「力があつたら、どうだつて言つんだ」

「簡単なことだ。ここは貴様の居場所ではない。こんな程度の低い場所で、何ができる」

「俺は自分の意思でここにいる。アンタに指図される筋合いはない助言だ。ここにいて強くなれるのか？　ここでどんな力が手に入るというんだ？」

「ここにいるから俺は強くなれるんだ。アンタの言つ力は、もう俺には必要ない」

「力は力だらう？　貴様も私と同じ場所にいたはずだ。そこで必要なのは、力だけだ」

「それで何ができる？　何が変えられる？　力だけで、何も変わりはしなかつたさ」

お互ににらみ合つたまま、その先の言葉は出てこなかつた。

『そこの生徒！　いつたい何をやつていい！』

「……今日は引いてやる。だがな、覚えておけ。私は貴様らを認めない。力の無い奴も、力を無駄にする奴もだ」

スピーカーからの声を聞くと、ラウラは戦闘状態を解除した。去

り際にもう一度はき捨てるよつて言つて、アリーナをあとにする。

「お、おい、シン。平氣か？」

「シン、大丈夫？」

「平氣だ。一人とも怪我はないな？ なら、もう今日は帰る

一人の返事を待たないで、アリーナの入り口に足を運ぶ。これ以上アリーナにいるのも氣分が悪いし、自分でも少し頭を冷やしたかった。

「さつあはゴメンな。ちよつトイライラしてて
「ううん、氣にしてないよ」

部屋に戻つてきたところで、少し氣持ちが静まった。帰りの道すがらも、三人ともほとんどしゃべらなかつた。何か言われても生返事しかしてなかつた氣がする。一夏にも謝つておかないと。

「夕食まで時間あるけど、シャワーはどつある？」

「.....」

「？ シャルル？」

「あ、ゴメン。先にいただいていいかな？」

「了解」

パタパタとシャワー室に入つていいくシャルルの様子は、どこか元気がなかつた。氣、遣わせちゃつたのかな。

「シン、シャルル、いるか！？」

「ああ、一夏か。どうしたんだ？」

ドアの前にいる一夏は、上機嫌なのが見てとれる。だいたいこういつ表情の時、一夏は浮かれていることが多い。

「機嫌良いみたいだけど、何かあつたのか？」

「さつき山田先生が教えてくれたんだが、今月下旬から大浴場が使えるらしいぜ！」

「本当か！？ やつたな一夏！」

小躍りしている一夏ほどじゃないけど、俺も風呂に入れるのは嬉しい。研究所では入れていた分、学園で入れなくなつたのは地味に痛かつたりする。風呂があるのに入れないつていうのはやっぱり寂しいし。

「へへっ、どうだ？ 二人とも元気なかつたけど、これで元気出しへくれよ？」

「ああ、サンキュー。シャルルにも伝えとくよ」

お互に敬礼をすると、一夏は自分の部屋に戻つていった。一夏にも気を遣わせてたみたいだ。はあ……こんなんじゃいけないつて分かつてんんだけど……それでもやつぱりラウラとの一件は、俺の胸に重くのしかかつっていた。

案の定その日の夜になつても、俺は寝付けないでいた。アリーナでの出来事、ラウラに言われたことが頭の中をぐるぐる回つていて、目がさえて、眠れない。

かつての俺と同じ、力への執着。自分を突き動かす、暴力的な衝

動。

田の前にいるのは敵だ、撃て、壊せ、なぎ払え、そうして動けなくさせればいい。力の叫びに飲み込まれて、何も考えられなくなる。はやる気持ち、思いを抑えきれなかった。振り返る余裕なんてまるでなかった。田の前の敵を倒すことが全てで、大事なものを無くしていった。

自分とラウラでは力を求める理由は違うはずだ。けど、理由が何であつても…… アイツは力を求めている。危険な方向に、誰かへの敵意を交えて。

俺を止めてくれたのはアスランだ。

なら、ラウラは誰が止めるんだ？ 誰かが止めてくれるのか？ もし止めてくれなかつたら、ラウラはどうなるんだ？ いつか俺みたいに、全部無くすのか？

そんなこと、させたくない。俺が止めなきや…… いけないんだ。力に囚われてた、俺が。

今月末の学年別個人トーナメント 誰にも負けるわけにはいかない。どんな奴が相手でも、俺は負けない。

ふう、とため息が出た。勝つって思うのは簡単だけど、実際に勝つにはまだまだ訓練が足りない。まずはブラストシルエットを使えるようにしないと。長距離射撃戦にまで対応できれば、かなりのアドバンテージになる。トーナメント戦では相手次第で相性が変わるから、全距離で対応できるってのは有利だ。鉄パイプには、もっとがんばつてもらわないとなあ。

それから、もう一つ。トーナメントに勝つための奥の手を考えてある。フォース・ソード・ブラストの三つが開放されれば練習もできるんだけど…… 訓練の手伝い、シャルルに頼むしかないか。シャルル、アリーナを出てから元気なかつたけど…… 大丈夫かな。

「……………ん」「ん? シャルル、起きてるのか……………?」

ベットから上半身を起こして、隣にいるシャルルに声をかけた。こっちに向けた背中が震えている。両手で自分の体を抱きしめるようにして、身を縮めて、何かを呑んでいる。小柄な体が一層小さく、か弱く見えた。

「お母さん…………」

「シャルル? うなされてる、のか…………?」

シャルルの口にした母さんといつ一言が、心臓を強く打ちつけた。スタンドの電気を点け、布団を蹴飛ばして、シャルルのベットに駆け寄る。放つては置けない。

「シャルル。大丈夫か? 起きろ、シャルル。大丈夫だから…………」「う…………ん、あれ…………シン、どうして…………?」

シャルルが向けた顔に光る、涙の跡。自分でも気付いたのか、慌てて「ゴシゴシ」とぬぐつたけれど、跡は消えなかつた。

「うなされてたみたいだったからね…………大丈夫か? 今、水持つてくる」「う、うん…………」

水を入れる間にも、脳裏には悪夢がよみがえる。俺も見てきた、何度も何度も。

バラバラの家族の死体。飛び回るモビルスーツ。雪の降るベルリン。目の前で吹き飛ぶステラの姿。

落ちていく青いモビルスーツ。とどろく雷鳴。夜中に跳ね起きるなんて、珍しくもなかつた。

「ほり……落ち着くから」

「うん、ありがと」

コップの水をじっくりと飲むシャルル。その視線は沈んだまま、布団をじっと見つめている。少しの間、沈黙が俺たちの間を包んだ。

「……なあ、シャルル。その、今日元気なかつたけど、何か悩みでもあるのか？ 俺で良かつたら、相談に乗るけど……」

「うん、ちょっと夢見が悪かつただけだから……気にしないで」

そう言つてシャルルは笑うと、コップを俺に渡してきた。前に見せた笑顔じゃない。いつも見せる笑顔でもない。明らかに無理をしている、作り笑い。

「お母さんつて、言つてた」

「…………」

誰にでも、触れてほしくないことはある。頭で分かっていても、聞かずにはいられなかつた。放つておきたくなかった。

「無理に聞くわけじゃないけど……何かあつたのか？」

「…………」

布団の端をぎゅっと握りしめて、シャルルはうつむいて黙つてしまつた。また長い沈黙が続く。やつぱり、みだりに人に聞かれたくないことなのかもしね。諦めて戻ろうかとも思ったその時、ポツリポツリとシャルルが語り出した。

「お母さん……僕をずっと、育ててくれてたんだけど……」

「…………」

「父はいないようなものだったから、一人で、ずっと……」

「うそ……」

「一年前に、亡くなつて……それから、僕は一人で……」

そこで一度言葉が止まつた。肩を震わせて、なんとか搾り出すような声で続ける。

「ここにいいか、分からんんだ。僕は……」

「ここにいて……？」

「シンと違う。はつきりした意志があるわけじゃない。僕は……ここにいいの？」

「シャルル……大丈夫だから」

「え……？」

震えるシャルルの手を握りしめる。自分の言葉でここまで伝えられるだろ？ けど、伝えたいことがある。大切なことだ。

「俺もさ、ちょっと今まで研究所にいたんだ。そこでずっと、悩んでた。自分はここにいいのか、自分がここで幸せでいいのか、つても」

「…………」

「けど、そこで教えてもらつたんだ。『誰だって、自分の大事な人には幸せでいてほしい』って。なあ、シャルルはここにいてどう思う？」

「ここにいて……」

田を閉じただけで、短い間だけ多くのことが思い出せる。

初めて一夏に会った時のこと。
セシリ亞と決闘した時のこと。

篠ノ乃が俺を助けてくれた時のこと。
凰に怒られた時のこと。

シャルルが来た時のこと。

「俺はすっごく幸せだ。たまに騒がしすぎることもあるけど、一夏
がいて、篠ノ乃がいて、セシリ亞、凰、それにシャルルがいて……
みんなが、大事な人たちがいて、一緒に笑ってられるんだから。シ
ヤルルは、どうなんだ？ 俺たちと一緒に嫌か？」

「そんなことない！ みんながいて、それにシンがいてくれて……
僕も、こんなに笑ってられることなんて、お母さんがいなくなっ
てからなかった」

「ならここにいていいんだ。それはシャルルが決めたことだろ？」
「僕が、決めたこと……？」

「うん。シャルルが自分で、自分の明日を選ぶってことだ。誰かに
するがるんじゃなくて、自分で決めた明日だから。お母さんだつて、
もちろん俺だつて、シャルルには幸せでいてほしいって思つてる」

明日に目を向けること。

ステラが教えてくれた。
みんなが教えてくれた。
ステラと約束した。
みんなと約束した。

だから、今の俺はここにいる。ここにいて、みんなと笑つていら
れる。

「もしシャルルの明日を奪おうとする奴がいても

「Jの世界で決めたこと。初めて『力』を手にした時に決めたことだ。

大切な全てを、大切な人の明日を守る。それを阻むなら

「俺がシャルルを守るから。どんなことがあっても、絶対に」
「……うん」

「こくん、とシャルルが肯いた。体の震えも収まつたみたいだから、落ち着いたんだろう。

その様子を見て、内心で胸をなでおろす。良かつた。自信なかつたけどなんとか伝わつたみたいだ。

安心して時計に目をやると……現在時刻は夜中の二時過ぎだつた。あーあ、夜更かししちやつたよ。明日が日曜日でホント助かつたな……授業があつたら間違いなく居眠りして、出席簿に『ありがとうございます』ってお礼を言わなきゃいけないところだ。

「さて、それじゃ寝ると シャルル、どうした?」
「うん、実はね」

ベットから離れようとした俺の手を、シャルルが掴んだまま放してくれない。あれ、まだ何かあるの?

「眠れるまで、手……繋いでくれないかな?」
「手? うん、いいけど」

そのままバフッと布団に腰を下ろすと、シャルルは「J」「J」しながら布団をかぶつた。

マコにもよくねだられたなあ、J。男同士のはずなのに、シャ

ルルが相手だと全然気にならないのが不思議ではある。多分ヴィーノの抱きつきと同じだ、柔軟で人懐っこいシャルルの人柄のなせる業なんだろう。俺と一夏でやつたら……怖いから、やっぱり考えるのはよしとこりう、うん。

「ねえ、シン。聞いていいかな？」

「良いけど……聞いたら早く寝ろよ？」そのままだと俺、眠れないよ」

「じゃあ、一緒に寝る？」

「冗談は止めて早く寝させてくれって。ほら、何だ？」

「ふふっ、つれないなあ……ねえ、シンの家族は？」

「……みんな、もういないんだ」

「あつ……ゴメン」

「いや、いいんだ。俺はもう、大丈夫だから」

ほんのちょっとだけ、シャルルの手の力が強くなつた。それに返すように、手を握り返す。

「お休み、シャルル」

「うん……おやすみ、シン」

手を繋いだまま、シャルルは目を閉じた。傍で座つたままぼんやりとしているうちに、寝息が聞こえてくる。そつと手を放して、眠つているシャルルにもう一度。

「お休み、シャルル。また明日」

そう言つて自分のベットに戻つて、布団をかぶる。頭の中ではまだごちやごちやと考え事があるはずなのに、今度は眠気はすぐに襲つてきた。また、明日か。ああ、訓練の手伝い頼むの忘れ

その日、夢を見た。ミネルバの 船のみんなが出てくる夢だ。
夢の中だけど、久しぶりにみんなに会えて嬉しい……嬉しいはずだ
つたんだけど、何かがおかしい。

みんな、俺のことを叱りつけるんだ。レイもルナもメイリンも、
ヴィーノもヨウリーンも、アーサーに艦長まで……みんながみんな（
特に女性陣）

『自分が今日何を言つたのか、お前本当に分かつてるのかつー！？』

つて。何か怒られるようなこと言つたっけ？

ああ、夢の中にはアスランも出てきて、俺のことをかばってくれ
た。みんなの怒りが収まるどころか、余計に怒り出したけど。

『シンが何を言つたんだ？ みんなで責めるようなことは言つてな
いだろ？』

『このつ……馬鹿野郎つ！』

それで、俺はアスランと一緒に、目が覚めるまでずっとお説教を
受けていた。

なあ、アスラン。俺たちの何がいけなかつたんだ？ 俺たちが何を
したつていうんだ？ なんでみんなため息ついてるんだ？ え、ア
ンタも分かんない？ 俺も分かんないよ……

第七話『君がくれる明日』（後書き）

いつも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくてダークネスと一つになってしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第八話『明日になつたり忘れるよ』（前書き）

以下の事に「」注意ください。

- ・今回アンケートに関するお知らせがあります。詳しくは後書きを「」参照くださいと助かります。奮って「」参加ください。
- ・お手間でしょうか、「」質問は遠慮なくおっしゃつてください。

第八話『明日になつたら忘れるよ』

二人の転校生が来てから一週間が経過した。放課後の第三アリーナで、三人の男女が親しげに言葉を交わしている。一夏、セシリア、鈴の三人だ。訓練の場であるのに、シンの姿は見られない。たいていの場合、一夏の特訓にはシンが同席しているので、珍しいことである。

「さて、それじゃあ摸擬戦始めるか。一人とも、よろしく頼むぜ」「アンタが自分から頼むなんてね。まあ、仕方ないから手伝つてやるけど」

「ふふふ、ようやくわたくしの実力にお気づきになつたのかしら」

ISを展開させながらセシリアと鈴が得意げに笑つた。お互いに隣をチラリと見て火花を散らしたが、一夏の目には映らない。グッと握りしめる雪片式型。その鋭い刃に映つて見えたのは、シンの姿だった。

織斑一夏は、誰かを守ることへの強い羨望がある。幼い頃から両親はおらず、強い姉に一人守られてきたことがその憧れの原因だ。偶然とは言えISを動かせるようになつたことは、その思いを現実に近づけるのに都合よい事態だった。これで、自分の守りたいものを守れる。守りたいという意志も、それを貫くための心の強さも、一夏は持ち合わせてはいた。しかし入学当初、それはまだ幼い、漠然としたものでもあつた。憧れ、目標とするものがどこか遠いのだ。確かに、織斑千冬は唯一の肉親であり、近しい目標のように思われる。だが、その実、千冬は異性であり、年も離れており、なにより世界大会優勝という経歴は、身近に置く目標にはあまりにかけ離れている。自覚はないが、一夏には意志を貫く強さがあつても、そ

れを求める。『渴望』が無かったのだ。おそらく学園に一人の男子であつたのなら、無意識のまま、その幼い憧憬を抱き続けただろう。姉のようになれたらしい、と。

しかし、学園に現れたもう一人の男子。シン・アスカがいた。

同じ年頃、同じ男同士、同じ守るという目標を持っているにもかかわらず、自分とは比べ物にならない力。自分を牽引し、周囲の信頼を勝ち取つていき、みんなを守つていくその力。一夏にとつては足りなかつた、競い比べる相手だつた。このようになりたいという、曖昧な気持ちではない。『この背中を超えて』という明確な目標を形作るには、シンは十分すぎる相手になつた。

一夏は剣を見つめ続ける。

今手にしている、雪片式型。姉の手にしていた雪片に似た刀。先ほど廊下であつたときに、その姉が自分に言つたのだ。

『アスカと一緒にいることが多いようだが、一つ言つておく。お前はアスカと同じにならなくていいんだ』

『千冬姉、それってどういう……？』

『おそらく、だがな。アイツも同じことを思つてゐるはずだ。お前にはお前の力がある。それを信じることだ』

『俺の力……』

『そら、分かつたら早く行け。ノロノロしていると、アスカはいつまでお前の先にいるぞ?』

雪片式型を、大きく振る。その切つ先に映つたのは、今度は一夏の姿。

自分を信じること。自分の力を見つけること。

それができなければ、きっとシンには追いつけない。ましてや追

い越すなんてできやしない。

ならば、シンと同等の訓練だけじゃ足りない。同量の訓練でさえ、追いつけるか分からぬのだ。

対峙する一人の姿を見据え、剣を構える。そこに迷いはない。

「行くぞっ！」

大きく踏み込み、剣を振りかぶつたその時
真横から、砲撃の重音が三人の間に割つて入つた。

「今日の訓練は第三アリーナだよな？ 一夏たちは先に行つてゐ
たいだし」

「うん。みんなで摸擬戦をするみたいだよ」

放課後になつて、俺とシャルルは特訓のために第三アリーナに向
かつていた。みんなに先に行つてもらつたのには、ちょっととした理
由がある。

「ねえ、シン。訓練の手伝いの話、僕でホントに良いの？」
「シャルルだから頼めるんだ。お世話になる」

今日から一夏たちとの訓練に加えて、シャルルに特訓を頼むこと
にしていた。学年別個人トーナメントを勝ち抜くための、言わば秘
密特訓つてやつだ。各シルエットを使いこなすのと、それともう一
つ考えてある奥の手。それができるようにするためには、シャルル
の助けが必須になる。シャルルも快く承諾してくれたから、とりあ
えずは安心だ。

……唯一、シャルルには訓練の内容が筒抜けになるつていう穴が

あるんだけど。対シャルル戦、考えておかないといけないな。摸擬戦のデータを収集して、手取り早くシミュレーションでも組むのが一番か？いや、それも少しまずい。持久戦が得意なシャルルだから、逆に対策をうたれた時が危ないだろう。新装備を使って新しい戦術に切り替えるのが良いか？ダメだ。これは時間が足りないから現実的じゃない。うーん、何か別に方法がないか

「し、シン。あんまりじつと見つめられると……」

「ん？ ああ、ゴメン」

「アスカ！ デュノア！ ここにいたか！」

慌てた様子で、篠ノ乃が廊下の向こうから駆けてきた。あれ、一夏の訓練に合流してくるはずじゃなかつたつけ？

「篠ノ乃、どうしたんだよ？」

「先に行つた三人が、ラウラと交戦している！ 急げ！」

「ラウラっ！？ アイツ、性懲りもなくつ！」

十中八九、仕掛けてきたのはラウラからだ。三対一で、しかも、同じ専用機持ちを相手にけしかける。並大抵の自信じゃない。

第三アリー・ナ近づくごとに、騒ぎが大きくなっている。観客席のゲートに飛び込むと、ステージでは四つの機影が空中を舞つていた。

いくつもの青いビットが、黒い機体を取り囲む。でも、ラウラが右腕を掲げた途端に、包围射撃をしようとする各機が動きを止めた。その隙をつくために近づいた凰ファンも、ラウラが上げた左腕に従うようピタリと静止する。真ん中から加速してきた一夏の攻撃をひらりと回避。右肩のレールカノンから放たれた砲弾が、白式を爆炎で包んだ。

明らかに一夏たちが圧されている。三人とも、攻撃のタイミングは合っていたはずだ。なのに、ラウラが腕を振るうだけで、三人はまるで身動きが取れなくなっている。

「くそつ、どうなつてるんだよ！？」

「シン、あれはA.I.Cだよ。シュヴァルツィア・レーゲンの第三世代型兵器だ。慣性停止能力、まさかあそこまで完成してるなんて……」

「ようするに特殊武装なんだな？ 分かった！ シャルル、ありがとう！」

「アスカ、待てっ！」

観客席を抜けて、ピットの中へ。くそつ、もたもたしてると三人ともやられる。一夏、セシリ亞、凰

イグナイトツドを展開しながら、シルエットはソードを選択。ピットの入り口を開けようとするんだけど、またもピットは開かない。使用許可申請だと、模擬戦闘中につき待機しろだとか……ああもうつ、じちゅうじちゅうとい！ じつちは急いでるんだよ！

「もういい！ 邪魔だつ！」

入り口の後方に飛んでいくて、対艦刀を引き出す。降りぬかれた刃が、そのきらめきをどんどん強くしていく。その切つ先をゲートに突きつけて、準備完了。

「シン！ ちょっとそれはダメ」

「はあああつつ！」

限界まで引き上げられた出力が、対艦刀の先にまでビームの刃を形作る。

瞬発力特化のスラスターを背負い、その勢いに任せたまま、無理やりにゲートに突っ込んだ。

刃が扉に衝突した瞬間、バリヤーの干涉が周囲に紫電を撒き散らす。

火を噴き続けるスラスター。次第に弱まる光の膜。聞こえてくる、ひび割れるような音。

特殊合金がへこみを作った次の瞬間、周りの壁「」と引きはがされ、ゲートは轟音と共にステージに投げ出された。

「一夏！ セシリア！ 凜！」

「シン！」

「アンタ、またやつたの！？」

「無茶なさいますわね、まったく」

戦闘を継続していたらしい四人が一斉にこっちを向いた。
みんなは……良かつた。ダメージは負ってるけど、まだ機体は維持
できる。

「ラウラ、お前……！」

「ようやく来たか。ここいらでは準備運動にしかならなかつたぞ？」
「これ以上、お前がみんなを傷つけるなら……」

対艦刀の大きな刃で、空中を何度も切り裂いた。頭の中は真っ白だ。

全身を赤く染めるソードシルエット。空いた片手でもう一本の対艦刀を掴んで、ラウラに近づいていく。

もうガマンの限界だ。堪忍袋の緒が切れた。トーナメントなんて気の長い話、していられるか……！

「叩き切つて」

「そこまでだお前達！」

俺の言葉を遮った、あの声。振り向いてみれば、間違いない。織斑先生だった。隣にはシャルルに篠ノ乃、山田先生までいる。

「アリーナを破壊されても困るのでな。決着をつけたかつたら学年別トーナメントでやつてもりおつ。それから、トーナメントまでは私闘は一切禁止だ。ラウラ、いーな？」

「教官がそう、仰るのなら」

少し不満がありそうだったけど、素直にラウラは肯へと、スタスタと歩み去ってしまった。

「お前達も、それで良いな？」

「あ、ああ……」

「返事は『ハイ』だ。アスカ、お前はどうなんだ？」

「……了解であります」

はつきり言つて俺の方は不満だらけだ。みんなを傷つけて、何も無しなんて……けど、ここで頭に血が上つたままじゃいけないってことも、一応理解していた。怒りとか憎しみだけで戦っちゃいけないって。それじゃ何にもならないって。まあ、やっぱり腹は立つんだけど。

仕方がないから、イグナイティッドの展開を解除。俺も入り口の方に歩いていこうとしたら、山田先生が立ちふさがった。困ったような笑顔で、どこかを指さしている。

「山田先生、どうかしたんですか？」

「あの、アスカくん、アレは……」

アレ？ 不思議に思つてぐるりと首を回すと、そこには鉄の塊さつきまでゲートと呼ばれていたものが転がっていた。それから、ちりぢりと壁の破片。なんであんなものが転がつて……はつ！？

ISのプログラムも驚くだらう速度で、俺は自分がやつたことを正確に整理し始める。

許可申請の不備。それにも関わらずアリーナに乱入。その結果の器物破損。

かううじて戦闘行為は避けられたのが、救いなのか？

どうにしろ、生徒指導室行きだよなあ……

迫り来る圧迫感に威圧感。心に忍び寄るのは焦燥感。むんずと首根っこを捕まえられた。誰がやつたのかなんて、見なくてもわかる。

「シン、俺たち先に戻つてるから……」

「こりない方ですわね」

「フン、バーカ」

「……今回は、私は何もしてないぞ？」

「アハハ……シン、後でね」

それぞれみんなが敬礼をして、俺の横を過ぎ去つていく。一夏、セシリ亞、凰、篠ノ乃、それにシャルル。さよならみんな。俺、みんなに会えて良かつたよ

「さあ、扉を壊したことばのよつて説明してくれるつもつだ？」

怒りで真っ白だった目の前が、今度は絶望で真っ暗になった。ねえ、ステラ。どうして俺はいつまでたつても成長しないんだ？

ね。

お説教という名の束縛から開放された時には、既に空に月が昇っていた。空腹と疲労のせいでフラフラになりながら、なんとか食堂にたどり着く。扉を開ければ、一夏たちが座っている席が見えた。最後の力を振り絞つて手を振ろうとしたけど、目の前にわっと押し寄せる人の波。たちまちに俺は呑み込まれた。

「アスカくん！ 私と組んで！」

「ペアは是非とも私と！」

「何も言わなくていいから、ここにサインして！ 幸せにするから！」

組む？ ペア？ 何を言われているかわからないけど、今の俺にはそれを聞き返す気力も尽きていた。あれよあれよ、波間を漂う木の葉みたいに流されていく。けど、力なく弄ばれる俺の両手を誰かが引っ張り上げてくれた。暖かい手が一人分。いったい誰が？

「おいシン！？ しつかりしろ！ コラコラ、そこ、ルール違反だつて！」

「シン、大丈夫！？ ほら、ペン握っちゃダメだよ！ サインしちゃダメっ！！」

一夏にシャルルだった。一人が俺を担ぎながら、人の波をかき分けて奥のテーブルに向かう。一夏も、セシリ亞も、凰も、みんな怪我が無さそうで良かつた。もしあのまま戦闘が続いていたら、大怪我をしていたかもしれない。

「みんな、無事で良かつた……」

「お前の方が無事じやないぞ、シン。ほら、今メシが来るからな？」

「一回もアリーナのドアを壊す奴がいる？ ホント、バカね」

「あら鈴さん。先程までシンさんの心配をしていた方の発言とは思えませんわね？」

「べ、別にこんな奴の心配なんてしてないわよ！」

セシリ亞と凰は仲良く喧嘩してゐるし、篠ノ乃とシャルルはそれを眺めながらお茶飲んでるし、いつも通りの光景だ。一夏が差し出してくれたお茶を飲むと、氣力がみるみる回復してくる。仲間って良いものだ。飲み干すお茶も、俺の目頭も熱い。

あ、そうだ。ペアって何の話だつたんだろう？

「みんな助かつたよ、ありがとう。とにかく、ペアって何のこと？？」

「ああ、コレのことだ」

篠ノ乃がひらりと紙一枚を渡す。なにに、『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な摸擬戦闘を行うため

「『一人組みでの参加を必須とする』、か。随分と急な話だな」

「それで、ペアをどうするかで話をしようと思つて、ここに集まつてるんだ」

食堂の賑わいもこれが原因らしい。ペア、か。いつものグループだつたら、全部で六人。一人ずつで上手に組み合わせができるところなんだけど。

辺りでは女子がみんなこつちの発言に聞き耳を立ててゐる。多分、貴重な男子生徒とペアを組みたいつてことなんだろう。相も変わらず、俺たちは珍獸だ。はあ、どうしよう。

「なあ、シン。今日は俺とお前、別々で戦わないか?」「え? 一夏、どうしてだ?」

俺にとつて意外な申し出だつた。一人組だつたら、多分一夏とペアになるかなつて思つてたのに。摸擬戦の回数も俺が一番多いし、セシリ亞戦で組んだ経験もあるから、一夏から誘つてくる気がしていたんだ。

一夏の表情を伺つてみれば、剣を握つている時と同じぐらい真剣な顔。それが真つ直ぐ俺を見ている。

「今日のこともやつだが……俺もいつまでもシンに頼つてられない。いつまでも誰かに守つてもらつだけじゃ駄目なんだ。だから、今は俺と戦つてくれ

「一夏……」

一夏の日に宿る強い意志。昔の俺もこんな風に真つ直ぐだつたら、力を誤らないで済んだんだろうか。でも、これが一夏の強さなんだ。それなら、その強さを全力で迎え撃つのが俺のすべきことだ。軽々と追い抜ける背中じや、申し訳が立たない。

「そうだろ? アスラン。

「ああ。でもな、一夏。俺は絶対に負けない

「今度こそ一撃、決めてやるぜ

俺たちはふつと笑いながら、お互いのじぶしを突き出して叩き付け合つ。一夏の本気、確かに受け取つた。けど、俺は誰にも負ける気はない。

「はー、男つて単純ね

「ついていけませんわ」

「だが男子たるもの、こりでなくしてはいかんぞ」

「う……気持ちが盛り上がりがってたんだから、水を差さないでくれよ。こういうの、女子には分かんないんだろうな。アカデミーにいた時から、ルナも呆れてたっけか。単純？ ついていけない？ 良いだろ、別に。」

「さて、本題のペアは……って、うわあつ！」

「織斑くん！ 私と私と！」

「ならアスカくんは私！」

「デュノアくーん！ お願 - い！」

俺と一夏が組まないことを聞いて、またもみんなが一斉に寄つてきた。みんなが来てくれるのにはありがたいんだけど、そんな即決できないし……

ん、ペア？ ペアを組むつてことになつたら当然だけど、相方とは試合しないんだよな？ 試合しないんだから、対策しなくても良いって事だよな？ 手の内を見せてても、秘密特訓の相手をしてもらつても、特に問題ないってことだよな？

「そうだ、その手があつた！」

「うおつー？」

「ひやあつー？」

突然大声を上げて立ち上がつたせいか、周囲が軽い悲鳴をあげた。いけない、落ち着かないと……

軽く咳払いをして着席し、シャルルの方に向き直る。

「シャルル、俺と組んでくれないか？」

「え、僕と？」

「特訓の時もそうだつたけど、シャルルじゃないとダメなんだ。頼む」

「う、うん……シンがそう言つなら喜んで」

「良かった。また明日からよろしくな」

しつかりと握手をきめて、交渉成立した。対シャルル用のシミュレ・シヨン作る手間も省けるし、これで心置きなく訓練もできるぞ。へっへーん、我ながら名案だつたな！

「うう……やっぱアスカくんと一緒に……」

「二人とも、すつごく仲良いもんね。アスカくんつてやっぱ……」

「シャルル×シンか……コレは良いわね」

俺とシャルルのペアが決まるごとに、囮んでいた女子の三分の一が退いていった。残り三分の一はまだ、テーブルの三人も交えて熱い討論を交わしている。

「「」」はクラスメイトのわたくしが！」

「セシリ亞ばっかりずるいよ！ 私もクラスメイト！」

「いや、幼馴染の私とでしょ！」

「うう、幼馴染は反則！ 反対！」

「それを言つなら私はクラスメイトで幼馴染だ！ 私と組め、一夏！」

「え、いや、あの、俺は」

「すごい様相だ。これは時間かかりそうだな……ああ、そう言えれば頼んでくれた食事、取りに行つてないや。一夏には悪いけど、先にいただいてるとしょ。」

「ふふ、一夏はすごい人気者だね」

「だな。俺はシャルルがいてくれて良かつたよ」

そう言つとシャルルはニッコリと笑つて答えてくれた。よーし、訓練がんばるぞ！ いや、今日はお説教で台無しにしちゃつたから……うん、明日からだな！

騒がしいテーブルを離れて、俺は意氣揚々と食事を取りに行つた。えーと、今日の定食は何だろな？

『 田の前の光景が信じられない。部屋を間違えたのかと思ってドアの番号を見直してみたけど、間違いない。正真正銘、俺の部屋だつた。』

食堂で定食を食べ、風呂に入りに行き、戻つてきただけ。そう、特別なことなんてしていない。いつものように、俺のルームメイトが部屋で待つてはいるはずだつた。それはずだつたんだ。

寝食を共にしていたルームメイトが、部屋の真ん中にちょこんと座つている。視線を部屋全体に巡らしても、見えるのはいつも目覚まし時計。制服。大事な携帯。やつぱり間違いじゃない。一つのベットもそのまま。俺たちの部屋だ。

大事な話があるって言つてた。どんな悩みだつて聞いてやるつて、答えた。

視線を前に戻す。金色の髪が眩しい、上品な佇まい。スポーティジャージを着ていても崩れない、その雰囲気。ただし、いつもと違うところがあつた。

後ろでまとめていた金髪は今、しなやかに背中に伸びている。ジャージから浮き上がるボディーは、丸みを帯びた曲線的なラインを

描いていた。全身から香る、甘い匂い。

それから導き出された結論は一つ。

「お、女の子……？」

「うん、そりなんだ。今まで黙つて『ゴメンね……』

胸に手を当てて、ほんのり顔を上気させて言った。柔らかな印象はそのままでも、その仕草が妙に心を揺さぶる。

「ねえ、健一。僕、本当は……女の子なんだ」

まさか、香菜が女の子だなんて』

「結局ここまで気付かなかつたのかよ、健一くん……嘘だろ？」

たまらずしおつも挟まらずに本を閉じて、ベットの横に放り出す。

“ボクはホントはオンナの口つー” マコと約束した映画の原作。時間もあるし、ちょっとした気分転換になるだらつって思つて読んだけど……甘かった。

香奈ちゃんが女の子だつてこと、健一くんはまるで気がつかない。まあ、お話としてはそういう構成なんだらうけど、後で気付いたり、発覚するシーンが来ると思つてたのに……

気付かない。健一くんはひたすら気付かない。そりやもう、見ていろ」いちが唖然とするぐらいたまに気付かない。

先輩の彰さん（言わざもがな鈍い）に相談すれば的外れなアドバイスをもらひ、友達の昴輝くん（これまた鈍かつた）とは変わらぬ

バカをやり、香菜ちゃんの胸を触れば『意外と肉ついてるな?』の一言で横つ面を叩かれる。香菜ちゃん、せめてコルセットぐらい付けておこうよ。健一くんはナチュラルにセクハラするラッキースケベなんだから。

まあとにかく。最終的に、悩みぬいた香菜ちゃんが告白するまで微塵も疑わなかつたんだから、この鈍いのは筋金入りなんだろう。恐れ入つた、健一くん。信じられねー。

「んな調子で物語は終盤に。いい加減読み進めるのが辛くなつたので、続きはまた今度に……というか、映画まで取つておこうかと。いう気持ちがふつふつと込み上げてくる。いや、ダメだ。事前知識もないまま映画でラストを観たら、その場でツツコミを入れないで座つていられる自信がない。

「マジ、どうしてこんな映画選んだんだ? お兄ちゃん分かんな
いよ……

「し、シン……頭を抱えたまま転げまわつてどうしたの?
「シャルル……実はさ……」

俺は情けない声で、事の顛末を話し出した。最初は一〇一〇笑つていたシャルルだつたんだけど、話が“ボクはホントはオンナの口つ!”の中身に触れるのに併せて、その笑顔がドンドンと引きつつていつた。シャルルにこんな顔をさせられるなんて、健一くんは本当にすごいな。

「……で、香菜ちゃんがついに自分の正体を告白したつてわけ。な
? 健一くん鈍いだろ? こんな奴、いるわけないよなー
「……僕の前にいる君は?」

「え? シャルル、何か言つた?」

「ううん、何でもないよ……」コーヒー淹れるね

なんだか重そうに額を押されると、シャルルが棚の方へ向かつていった。コーヒー パックを探しているんだろう。でも、もう新しいパックを箱から出さなきゃいけなかつた気がする。

「あれ、もうコーヒー パック無いのかな。新しいのはこの上にしまつてある?」

「ああ、俺が取るよ。シャルルじゃ危ないから」

「大丈夫だよ。よつ、とつ」

「あ、コラ。危ないぞ」

棚に手の届かないシャルルが、爪先立ちをして奥に手を伸ばす。前にマユが同じことやって、危うく転びかけた。慌ててシャルルの傍に行つたら、予想通り。コーヒー パックの箱を掴んだ途端に、体勢を崩した。

「きやつ！」

「ほら、だから言つただろ」

後ろに倒れかけたシャルルをキヤッチ。シャルルの体を抱きかかる俺の手は、シャルルの胸の辺りに……なんだ? なんだか硬い感触が……鉄みたいな……コルセット? どうしてコルセットなんてして そうか! 分かつたぞ!

「つ! し、しし、シン……そこは……」

「シャルル、そんなに体型気にしてたのか? 別にシャルルだつたら

「~~~~~つ! シンのばかーつ!..」

「ふふへつ!..」

バチンシ、とシャルルの平手が一線。避ける」こともできない俺の横つ面を引つぱたき、脳をぐるぐる揺らした。

急速に飛び去つていく記憶、暗転していく視界、そして薄れゆく意識。

かろいじて残つてゐる思考で、俺はかつての上司に答えを求めていた。

アスラン。俺、何か悪いことした？ してないよな？ やっぱりそうだよな？

じゃあ、なんでシャルルは怒つたんだ？

次の日の一ヶ月。

「アンタ、その顔どうしたの？ ま、どうせ女の手でめやられたんでしょうけど」

「そんなわけないだろつ！ 全然覚えてないんだけど……昨日突然、部屋で倒れちゃつたらしいんだ」

「で、それがアンタの顔の紅葉とどう関係があるの？」

「それで、シャルルが介抱してくれたらしいんだよ。その時、気付けで一発強いのを打つたつて言つてた」

「ふーん。私はてつたり、女の子に不注意なこと言つて引つぱたかれたのかと」

「だからそんなわけないだろつ！ ただ……」

「ただ？」

「……何か、すうじい勘違いをしてた気がする」

第八話『明日になつたら忘れるよ』（後書き）

いつも、ここまで読んでいただきありがとうございました。
みなさまの応援もあり、細々とですが活動させていただいてます。
死ぬほど感謝しています。返信は滞りがちですが、必ず返信はさせていただきます。なにせ作者、毎日のよつに皆様からの『』感想を眺めてニヤニヤしていますから。

さて、本題です。今回『祝！10万PV突破記念アンケート』を開催したいと思います。

アンケートのお題は『番外編日常パート、いつたい誰を主役にする？』というものです。

以前、各キャラクターの日常も書いてほしいとの『』意見がありました。

そこで、近いうちにシン以外のキャラクターを主役とした日常パートを、番外編として書きたいと思つております。

アンケートの内容は『この番外編の主役を誰にするのか』ということです。

対象キャラクターは……シン以外なら、自由にしゃいます。お一人様好きなキャラクターを一人、お答えください。

ただ、出て来られないキャラクター（レイ・ルナ・アスラン等）はカウントできないので、『了承ください』。

また、アンケートは、感想欄にて『』感想と共に答えていただきたいと思つております。感想乞食な作者はこうして、みなさまの声をいただきたいと思つていますので、お許しを。

締め切りは11月14日の0時までとさせていただきます。

長々と説明してしまい申し訳ありませんでした。

では、読者の皆様方に最大級の感謝を込めて。

第九話『強さと弱さ』（前書き）

以下の事にご注意ください。

- ・アンケートのご参加、誠にありがとうございました。次々回辺りに番外編の投稿となる予定です。
- ・第六話、クッキーを引く場面にて致命的なミスを発見したので、修正しました。シンの順番はシャルの前です。大変申し訳ありませんでした。

11月14日追記

- ・終盤をほんの少し加筆修正しました。まだ修正するかもしれません。

第九話『強さと明日』

じめじめとした梅雨もあつという間に過ぎ去つて、六月はいよいよ最後の週。学年別トーナメントの開始を待つことになつた。

生徒は全員がトーナメントの準備で大忙し。この忙しさときたら、ミネルバの進水式並だ。あの時もデュランダル議長やアスハのお姫様とか、偉い人がいっぱい来てたんだよな。今回は何もなく済めばいいんだけど……多分この世界なら大丈夫だと、思いたい。

それに、ハブニングの心配ばかりしていられるわけじゃない。今度こそラウラを止めなきやいけないし、一夏とも戦うんだから、しつかりしないと。葛城さんも今日は見に来ているらしいし。

「しかし、すげー人数だな……」

「政府関係者、研究所員、企業エージェント、スカウトまで人が来てるからね。一年の僕らには、あんまり関係ないことだけど」

「一夏、他の事に気を取られてると集中できないぞ？ 機体のチエツクも忘れるなよ？」

「おう、大丈夫だつて」

今俺たちがいるのは男子更衣室。男子は三人だけだから、貸切のようゆつたりと着替えができる。変わりに女子はすし詰めらしいけど。あの人数を収容するのか……大変だな。少数の男子で良かつたと思えることも、たまにはあるみたいだ。

「じゃあ、俺は笄のとこに行つてくる。一人ともまた後でな

「ああ。一夏、俺とシャルルは絶対に負けないからな」

「俺と笄だつて、負けるつもりはないぜ？」

「ふふつ。一人とも、まだ試合の予定も決まってないのに」

そう言って三人で笑い合つと、俺とシャルルは一夏のこぶしを叩いて、一夏もそれを受けて更衣室を出て行つた。一夏は篠ノ乃とペアを組んだから、試合前の最終調整は他の場所でやるそうだ。試合日程が詳細に決まつていれば、こんなに早く移動しなくて済むんだけど……どうもトーナメントがペア形式に変更されたせいで、対戦表を作るシステムが役に立たないらしい。そのせいで、試合の当日になつても、試合の予定は分かつていなかつた。準備も上手くできないのに、なんで仕様変更なんとしたんだろうな？

「は～あ。下手したらここで待ちぼうけか……」

「シン、ずいぶん落ち着いてるね。試合前つて、結構緊張すると思つてたんだけどな」

「えつと、俺はまあ、その、慣れてるから……」

『パイロットをしてたから、こんな状況には慣れてるんだ』つてのは……言えないよな、流石に。血運するようなことじやないし、言いたくないもない。

「ボーデヴィッシュさんのことは気になつてないの？」

「ラウラのこと？ うん、今日は大丈夫。落ち着いてる」

前とは違つ。緊張してないだけじやない。感情的になつてるわけでもない。

アカデミーにいた頃は、試験でMSに乗るたびに緊張もした。だけど、実戦になつてからは逆に、そんな余裕も消え失せるぐら……目の前の“敵”で、頭がいっぱいだつたんだ。叩き潰してやる……なぎ払つてやる！ そんなことしか考えられなかつた。

今、ラウラにとつて俺は“敵”なんだろうけど、俺にとつて、ラウラは“敵”じやない。叩き潰す必要も、なぎ払う必要もないんだ。ただ、これ以上ラウラが間違つて力を振るうのを止めればいい。

そう考えると、自然と心は落ち着いてくる。怒りと憎しみで戦つたら、昔の俺と何一つ変わっていないんだから。

「俺の」とより、シャルルは平氣か？ 緊張してないか？」

「僕？…………うん、そうだね。僕は緊張してるよ。だから……」

そう言つと、シャルルは俺の隣に座つて、手を伸ばしてきた。

「はいっ」

「寝ちゃダメだからな？ 試合前なんだし」

「うん、分かつてる」

シャルルがうなされていたあの日以来、俺たちの間にできた習慣。毎日シャルルが寝付くまで、手を繋ぐこと。それ以外にも何かと、シャルルは俺と手を繋ぐことが多くなつていた。意外にシャルルは甘えたがりなんだよなあ……年は一つしか違わないのに、小さな弟ができたみたいだ。あ、弟って言えば、一夏もいるな。じゃあシャルルは末っ子だ。優しくて、甘えたがりで……うん、イメージぴつたり。

「……ねえ、シン。一ついいかな？」

「ん？ どうした？」

手を握る力を少し強くして、シャルルが顔を向ける。レイが見せたのとそっくりな、あの笑顔だ。シャルルはこうやって笑うことが、最近は日を追う毎に増えていた。理由は良く分からないますまだ。

「トーナメントが終つたら……大事な話があるんだ。聞いてくれる？」

「Jの笑顔を見るたびに心臓が跳ねる。メサイアでのことを思い出しても、あの時、レイに何を言えば良かったんだらうつて……

「当たり前だ。もしシャルルに悩みがあるなら、俺はどんなことでも聞くよ。約束する」

「うん。じゃあ、約束」

それだけ言って、一人で手に込める力を強くした。
俺だってみんなに話せないことはいくらでも抱えてる。シャルルにも同じように、隠さなきゃいけないことがまだあって……きっと、どんな人にも多かれ少なかれ、そんなことはあって。けど、今度こそ俺は……何か言わなきゃいけないって思えるから。レイには言えなかつたことを。

「対戦相手、そろそろ決まる頃だね」

「ラウラとは早く試合したいな。一夏と篠ノ乃とは、なるべく後で」

更衣室のモニターが変わるので、首を長くして待つ。話し合わなきやいけないこともほとんどないから、一人で黙つて手を繋いだまま。シャルルが落ち着くなら、全然構わないんだけど おっと、モニターが変わった。トーナメント表だ。初回の相手は……いきなり、か。

「シンの気持ち、届いたみたいだよ」

「……ああ」

アリーナに出れば、そこに待つていてのは漆黒を纏つた少女。一回戦の対戦相手、ラウラだ。隣にいるのは……

「ハアハア……シン×シャルルをこの田で見るためにボーテヴィッシュさんと組んだけど、まさかいきなり当たるなんて……私の気持ちが届いたのね」

……気にしないでおいで。ラウラも思いつきり引いてるし。

「……一戦目から当たるとは運が良い。ここに貴様を倒せば、後は一人だけだ」

「今日こそ止めてみせるか。もうみんなを傷つけさせやしない」

言い終えた瞬間、試合開始のブザーが鳴り響いた。すぐに俺とシャルルは散開して、それぞれ一対一の状況を作る。俺の相手は当然 こっちを追ってきた。ラウラだ。

最初に選んだのはフォースシルエット。高速戦闘仕様の機体でできるだけラウラをシャルルから引き剥がす。シャルルがこっちに来れるようになるまで、ラウラの足止めだ。

「威勢の良いのは口だけか? なつばさつさと落ちろ」

六本のワイヤーブレードとホールカノンの砲撃が背後から追ってくる。

旋回、加速、緊急停止、また加速。多方向からの苛烈な攻撃を避けながら……これぐらいで十分だな。言われた通りに、落ちてやるさ。

「つー?」

最後のブレードを回避して、ぐるっと向きを変えながら、地面に

急降下した。

背中の高機動スラスターを、巨大な砲塔の付いたものに変更。空を駆けていた青い装甲が、黒い重厚な色に変わつて、地面上を滑るように移動する。

プラスチルエット・展開完了

「いけえつ！」

「ひつ……！」

砲身が回転して、肩からミサイルを一斉掃射。ハ基のミサイルは歪な機動を描きながら、空中を舞つていたブレードを吹き飛ばしていく。一、二、浅い。ラウラが操作しきれなつた一本のブレードをやつただけだ。流石に、一筋縄じやいかない。

「！」の程度で私が止まると思つてゐるのか？
「ならここつでどうだつ！」

地表を滑りながら、二つの砲身をラウラに突きつける。

ミサイルランチャー、レールガン、大口径ビーム砲を備えるプラスチルエットなら、射撃戦は圧倒的に有利だ。それに、利が働くのはそれだけじゃない。

ラウラの『SIS』『シュヴァルツェア・レーゲン』が備える特殊装備『AIC』、SISの動きを停止させてしまつ、慣性停止結界。一度捕まつてしまえば逃げようがない。だったら、最初から捕まらないように距離を取るだけだ。

AICを使う際にラウラは必ず、両手を突き出す動作をする。ラウラと見合つてさえいれば、停止させられる前に撃ち抜くことも可能だ。

ラウラもそれを理解している。だから、うかつにAICOを使つような真似はしない。

「射撃戦対応型か……パッケージの換装とは器用なことだ。だが、もう換装の隙は『えん。そのまま切り刻んでやる』

ラウラは一本のプラズマ手刀を展開せると、残り四本のワイヤーと同時に接近してきた。レールガンを弾き飛ばし、ビーム砲の波状攻撃を潜り抜け、俺を捉えきる。無防備な俺の懷に入り、勝ち誇った顔で両手を振り抜く　　はずだった。

「なつ！？　馬鹿なつ！」

ラウラが驚愕の目を向ける。それもそうだろう。

両手のプラズマ手刀は俺の体に食い込む前に、盾と“サーベル”で止められていたんだから。

遅れたその反応を見逃さない。手刀を防いだ盾でラウラの腕を払いのけ、そのままもう一本、“背中のサーベル”を抜刀。勢いのままラウラの胴体に叩き付けた。

「ぐあつ……！」

「遅いっ！？」

サーベルが削り取つた装甲の上に、胸部バルカンが打ち込まれていく。ラウラの体を蹴飛ばして離脱しながら、右手でライフルを手に取る。照準はワイヤーブレード。意識が操作に回つていないう遠く離れた一本を、緑の閃光が打ち抜いていった。胴体装甲損傷拡大の文字が視界によぎる。先制はいただいた。

「馬鹿な……！　換装の隙などなかつたはずだつ！」

ラウラの表情が歪む。ダメージを負つただけじゃなくて、俺の装備が一瞬で変わったことが不可解で仕方がないようだ。

今イグナイテッドを包むのは、空に吸い込まれそうな青色の装甲。背中には高機動型スラスター。シルエットを変更したのは、ラウラが腕を振り上げたあの一瞬。

トーナメントまでの間シャルルと訓練してきたことは、インパルスの欠点でもあつた『換装にかかる隙』を克服することだった。イグナイテッドが全距離に対応できても、戦艦の援護がないISでの戦闘では、換装の隙が命取りになる。換装の機をうががう以上に、隙を減らすことが肝心だった。それで参考にしたのが、シャルルのISと戦い方だ。

シャルルの『ラファール・リヴィアイヴ・カスタム^{バッスロット}』は、大容量の拡張領域を備える専用機。さらにシャルルは、それを存分に活かすことのできる武装の『高速切替』が得意だった。

莫大な容量による換装装備の豊富さ、それを瞬時に量子変換、呼び出しへするための時間短縮。一人でずっと訓練してきて、ようやく形になつた。これでイグナイテッドの特性を最大限に引き出すことができる。

「認めるものか……あいつも、貴様もつ！ 貴様の言つ力などつ！」

「俺だけの力じゃないさ……それも分からぬお前に、俺はつ！」
俺たちは負けないつ！」

残つた三本のワイヤーブレードを射出しながら、肩のレールガンを撃ち出すラウラ。

冷静さを残しても、数の減つたワイヤーでは牽制も難しいはずだ。なら次に来るのは

「終わりだつ！ 私の田の前から消えろつ！」
「くつ！？」

突き出された両手が交差されて、俺の動きをピタリと止める。A I Cに捕まつたみたいだ。

一人なら脱出も難しいだろう。でも俺は、一人じゃない。一人で戦つてゐわけじやない。

ターゲットサイトが俺に向けられた。けど、発射の直前、ラウラの後方から機關銃が浴びせられる。上方に回避動作をしたところで、俺の全身に自由が戻つてきた。

「シン、待つたかなつ！？」
「助かつたよ、シャルル。そつちは大丈夫だつたか？」
「うん。彼女はまだ鼻息荒くしてゐるけど」
「そつか、ハハ……」

ちらりとセンサーを見遣る。食い入るようにこつちを見ているあの姿……やっぱり気にしないでおこう。うん、気にしちゃダメだ。気を取り直して、もう一度サーべルを引き抜く。シャルルが来てくれたならもう遠慮はいらない。シャルルを信じて、一人で戦うだけだ。

「シン、切り込める？」
「ああ、任せてくれ」

そうシャルルに答えたとき、思わず俺は笑つてしまつた。

切り込む……か。俺が前に出て、後ろであいつが援護してくれて

こんなところまで、レイに似てなくていいのに。

でも、なんだか久しぶりの感覚だ。なら今回も思いつきり、頼つてもいいよな？

「行くぞ、シャルル！ 援護してくれつー！」

「了解！ ベストをいくぞう！」

迫り来るワイヤーブレードは無視して、真っ直ぐ前にだけ飛び込んでいく。周囲のブレードはシャルルが撃ち落してくれるから、俺はラウラだけを見つめ、加速を増す。

「シンはやらせないつー！」

「だが、馬鹿正直に飛び込んできたとこひでつー！」

「はあああつー！」

再びプラズマ手刀の光が伸びて、俺とラウラは切り結んだ。右腕の手刀は盾で防ぎ、左腕はサーべルで応戦。縦、斜め、横にと幾筋も光が交差していく。

「一Jの程度で、私があつー！」

苛立ちを募らせたまま、ラウラが強く吼えた。両手を力任せに叩きつけて、盾Jと俺の体を吹き飛ばす。すぐに肩のレールカノンがシャルルを砲撃。シャルルが回避に気を取られた隙に、ワイヤーブレードを一本だけ俺の足に絡めて、地面へと放り投げた。

「ちいつー！」

「貴様は後でいいつー！ まず田障りな骨董品からだつー！」

「シンつー！ くあつー！」

AICがシャルルを縛りつけ、レールカノンが次弾を装填する。普通に援護に行つただけじゃ間に合わない。

でも、ラウラの意識がシャルルに行つたこがチャンスだ。

「間に合えよつー！」

地面に叩きつけられる前にワイヤーを切断。空中を旋回しながら、手にしていた盾とサーべルを放り捨てて、急加速をかける。

「ふふつ」

「勝負を諦めたか？ 殊勝なことだ」

「違うよ、信じてるだけさ。シンは約束してくれたから」

「戯言を……消えろつー！」

火を噴くカノン砲。傍から見れば絶体絶命だろつその状況で。それでもシャルルは信じてくれている。俺を、俺との約束を。俺は約束は守るぞ。今度こそ、絶対に。

「僕のことを……守ってくれるつー！」

「うおおおおつーつー！」

動けないシャルルの前に躍り出て、砲弾の直撃を浴びる。着弾の瞬間、黒煙が俺の全身を包んだ。激しい衝撃が俺の体を揺さぶる。ダメージはフェイズシフトが防いでくれてるけど、衝撃だけは吸収しきれない。それでも、この程度

「はつ、身を挺してかばつたかつー！？ だがこれで貴様は

」

「ほひ、ね

「うああああつつつつ！」

衝撃と黒煙を振りほどいて、スラスターの最大加速がラウラを正面に捉える。

俺が振りかぶっているのは、身の丈ほどもある巨大な大剣。ソードシルエットに搭載されている対艦刀が、その光の刃を生み出していつそう強く輝く。

換装することなしに、装備だけの呼び出し。

エネルギーの消費は甚大だけど、引き換えにされた必殺の一撃。シャルルとの特訓で身に着けた正真正銘、最後の奥の手だ。

決めるのは今、ラウラが勝利を確信したこの瞬間。

俺を信じてくれたシャルルのために。

袈裟懸けに大剣を振り下ろした。

「うおああああつつつつ！…！」

「ぐああっ！」

黒い装甲に食い込んでいく光の刃が、シールドエネルギーを瞬時に消しとばし、けたたましく損傷拡大のアラートを鳴らす。

最後に一押しして切り抜けると、ラウラの体が傾いて、地面に力なく落下していった。

俺たちの勝ちだ。

そう思つたとき、突然に異変は起きた。

「ああああああっ！…！」

「つー？ ラウラっ！…？」

絶叫と共に、黒い装甲が電撃を纏い、ぐにゃぐにゃと形を変えていく。光の全てを呑み込むような漆黒の塊が、腕を挙げ、足を放り出し、歪に何かを形作つていいく。

今まで一度だって見たことのない、奇妙で気色悪い光景だった。

何が起きているのか分からなくて、思わず息を呑む。

地面に降り立つたのはさっきまでの機体じゃない。一筋の光も差さないだろう、真っ黒な機体だった。腕と足に着けられた申し訳程度の装甲。その手にしているのは、同じ真っ黒な刀。まるでそれは一夏の『雪片式型』で

「 つ！ なつ！？」

赤いセンサーアイが俺を捉え、居合いの構えのまま飛び込んでくる。刹那の一瞬、刀が振るわれて、対艦刀に食い込んでいく。速いなんてものじやない。防御するのが精一杯だった。いや、まだ相手は構えを解いてない。不味い

「くつ……でやあつ！」

咄嗟に大剣を投げつけて離脱したけど、剣は目の前で真つ二つにされた。

「シンつ！ 今そつちに

「来ちゃダメだつ！ 近寄つたらやられんつー！」

いつたい何が起きたのか分からぬ。とにかく、ラウラを止めないと……くそつ！

シルエットをブラストに変更。砲塔からジャベリンを抜くと、その切つ先を目の前の黒に突きつける。間合いさえ取れれば

「つねおおつー！」

「つー？ 一夏つー？」

観客席のバリヤーを突き破つて現れたのは、黒と対照的な純白。一夏の百式だ。

一夏が振るつた刀をたやすくかわして、漆黒はまた居合いの構えから痛烈な一撃を浴びせる。白式は回避しきれないまま胴体に直撃を受け、上段の構えから叩き伏せられた。

「がつ……！」

「一夏あつー！」

地面に投げ出された一夏を追つて、観客席から篠ノ乃が飛んでくる。俺とシャルルも二人を追つて地面に立てば、一夏は真つ直ぐに黒い機体を見つめて叫んでいた。

周りの何も見えていない。ひたすら黒を、怒りのまま見据えて、吠え立てている。

「どけつ！ あいつ、許さねえつ！ 千冬姉のデータでつ！ くそつ、ぶつ飛ばしてやるつ！ 放せつ、放せよつ！」

瞳に映る怒りと敵意。ラウラと、昔の俺と変わらない瞳だ。初めて見る、一夏の強い憤りの感情。それはとても危険なもので、きっと一夏は後悔する。

ああ、これは何か言わなきゃいけないな。

「放せ、第一 邪魔をするつて言つならお前も」

「このつー！ この馬鹿 アスカつ！ 何のつもりだつ！」

篠ノ乃の手が一夏を張り倒す前にその手を止めて、一夏の前に歩いていく。

篠ノ乃には悪いけど、これは俺の役目だ。

「一夏……」

「シンっ！ そこを退けよっ！」

深く息を吸い込んで、腹に力を入れて思い切り

「食堂S定食二回分っ！…」

ペナルティの内容を叫んだ。

「……は、はあ？」

「食堂……？」

「S定食……？」

怒り狂っていた一夏を筆頭に、みんながぽかんと口を開ける。

「無理を聞くんだから、これぐらい当然だろ？ 俺にシャルルに篠ノ乃に、あとセシリアと凰^{フア}の分もな」

「お、おいシン。どうこうことだよ……？」

唚然とする一夏は、ようやく周りが見えてきたみたいだった。これなら話も聞けるようになつただろう。

「なあ一夏。もしあ前があのまま突っ込んでいつて負けたら、みん

なはじうなる？ もしあの黒いのがみんなを傷つけたり、お前はその時……何かできるのか？」

「つ！ それはつ……！」

「力が足りなかつたつて悔やんで、闇雲に強くならうとして。結局……同じことを繰り返すだけなんじゃないか？」

きつと一夏なら分かつてくれる。俺は信じてるから、こりやつて話ができるんだ。

「一人で何でもできるって勘違いして、敵に向かつて行って……それで大切な人が傷ついたら、何の意味もないんだ。たとえ敵を倒しても、みんなを守れなきや……そんな力があつても、辛いだけだ」

「俺はバカだつたからさ。何を言われても、ぶん殴られても、そのことが分かんなくて……一つも守れなかつた。でも、一夏は違うだろ？ お前は俺と違つて、ずっと真つ直ぐなんだから」

「……俺は……」

力任せに握られていた刀が、少しづつ緩んでいく。

一夏は俺と違う。失つていられないから、真つ直ぐでいられる。まだ何も、失つてないんだ。

失わせない。そんな悲しい思い、俺だけで十分だ。

「一人で背負い込まなくて良いんだ。俺たちが……みんながいる。お前のこととは俺が守る。みんなが守つてみせる。だから一夏も、少しづつできるようにすればいいんだ。それが分かるのも、できるのも、一夏の強さだ」

「俺の強さ……」

一夏は強い。それはただ、力があるってことじゃない。『力』を

持つて、真っ直ぐでいられる」ことだ。

「もう頭も冷えたよな？」

「あ、ああ……」「……」

「行くんだろう？　俺は一夏を信じる。お前が俺を信じてくれたみたいに」「……」

「シン……」「……」

「後ろには俺たちがいる。だから今は遠慮なく……」

一夏の胸を、ドンドンと強く叩いた。

「アイツをぶつ飛ばして来いっ！…」

一夏なら分かってくれる。一夏ならできる。レイ、テ、ルナに、アスランに……みんなのおかげで、ようやく俺も言えるようになったんだ。みんなを信じていいいんだ。頼つても良いんだって。

「……ああっ！　みんなありがとなっ！　行つてくるっ！…」

そう言つて笑うと、一夏は刀を強く握りなおして、空へと駆けていった。

空に昇る白の姿を見守りながら、俺は『生徒指導室行きの覚悟はしつけよ?』って言つのを忘れてたことに気付いて、思わず苦笑いをしてしまつ。

一夏。無茶をするのはいいけど、大変なのはその後なんだぞ？

(参ったな……やつぱりシンには敵わねーや)

空中で雪片式型を構えながら、一夏は苦笑が取まらなかつた。

気付かなかつたのだ。世界一尊敬する姉も、越えたいと思つた兄貴分も、自分の強さにとつくて気付いてくれたといつのこと、自分だけが。

信じることは、一人で思い込むことじゃない。真つ直ぐに、信頼をしてみせることだ。

それだけのことには気付かずに、頭に血を上らせていた。さつと今まで、ずっとだ。

甘く見ていたんだね。シンのことを。簡単に追いつくと、追い越せると。

それがどれだけ遠いものかすら、見えていなかつた。

シンの言葉の一つ一つが、殴られるよりよほど応えた。自分の幼さを痛感させられた。

あれほど姉に、強わとこつもの教えてもらつていたといつのこと。

けれども、もう間違えはしない。

誰かを守るために、どこまでも気高く、強くあり続けた姉と。強さを貫くために、何が必要なのかを見せてくれた友と。その強さを抱かせてくれる仲間達と。

みんなを守るために、自分も強くありたいと、心から思つ。

そうでなければ、シンを追い越すことはできないのだから。迷う必要はない。みんなが信じてくれているのだから。今は、財布の心配だけをしていればいい。

一夏が田の前の黒を睨みつけ、エネルギー刃を開放する。雪片式型の刃が細く鋭く、まるで一夏の意識に呼応するかのように変形していった。

日本刀 洗練された刃が形成され、居合いの構えを取る。

衝動に身を任す黒。対照的に静かな白。

そして、黒と白の激突。

黒い刃が鋭く切り込まれた。

それを弾いたのは、白い刃。

横になぎ払われた雪片式型が相手の刀を吹き飛ばし、続けて頭上に構えられた刃が、まがい物の強さを断ち切った。

『一閃一断』。それはただの剣技ではない。

一閃には、自分の信じる強さを込めて。

一断には、自分を信じる仲間の思いを込めて。

一夏が今まで関わってきた全てに教えてもらった、強さだった。

「ガ、ガ……」

黒い影が離れ、中から出てきたのはどにでもいる、弱さを持つた少女。

崩れ落ちるラウラの体を抱きとめて、ひとつ大きなため息をつく一夏。

「俺も兄貴に勘弁してもらつたから……ぶん殴るのは、止めといてやるよ」

そう言ってシンの方に顔を向け、また一夏は苦笑いを浮かべた。シンが拳を突き出すのを見て、剣を握つたまま同じように拳を突き出してみせる。

まだ一夏は、笑っていた。

後になつて厳しくも優しい姉に、首を掴まれ引きずられ、ぶん殴られることに気付かずに。

第九話『強さと明日』（後書き）

いつも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて光の結社に入ってしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

第十話『君と生むる明日』（前書き）

以下の事に「注意ください」。

- ・感想の返信まで間に合いませんでした。必ず返信しますので、少しだけお待ちください。
- ・後日修正の可能性が大有りです。

第十話『君と生むる明日』

ラウラの一件のせいで、今日のトーナメントは中止が決定されたらしい。俺とシャルルは事情聴取、観客席から乱入してきた一夏は生徒指導室送り。それが終つて俺たちは、よつやく食堂に戻つてくれた。

ラウラはあの後保健室に運ばれていったけど、命に別状はないそうだ。意識もすぐに戻つたらしくて、それを聞いて俺もほつとしている。明日になつたら会いに行こう。今なら少し落ち着いて、話ができるかもしれない。

「ぐつ……一枚、一枚、三枚……」

ある意味、ラウラより重症なのはこっち。織斑先生からの魂の指導を受け、一夏は絶賛沈没中だ。片手は殴られた頭を押さえて、もう片方の手でお札をめくつていい。

「S定食の……五人分×三食分……マジかよ……」

冷静になつた頭が今になつて、S定食三回分の恐怖を理解したみたいだ。

食堂での一番高価なメニューであるS定食。IS学園の学食は、学生にも手の届きやすい値段に設定されている。それにも関わらず一夏が嘆いているのは……理由は推して知るべし。スペシャルのSが付くというのは伊達じやない。

「フン、勝手に突つ込んでいつたお前が悪い」
「バカな兄貴の癖がうつったのかしらね」

「これで少しばは反省するのでは?」

全員で腕を組みながら、冷たい視線を向ける女子三人組。トーナメントが中止になつたせいで、今日は殊更機嫌が悪い。実力を見せる機会が無くなつたのが、よほど気に入らないんだろう。でもみんな……それは奢つてもらつ側の態度ぢやないぞ？ それと鳳、バカな兄貴つて誰のことだ？ いつもいつも人のことをバカ呼ばわりして……まあ、今はいいや。

「一夏、お前の定食代は俺が払つから。元氣出せつて、な？」

「ほら、一夏の好きな緑茶だよ？」

「うう……一人とも、ありがとな……」

シャルルと二人で、できる限りのフォローを入れる。篠ノ乃も、セシリ亞も鳳も、優しい言葉の一つぐらいかけてやれば良いのに。

「アスカにデュノア、一夏をあまり甘やかすな。今日はそいつの自業自得だからな」

特に不機嫌なのが篠ノ乃だ。そんなにトーナメントが大事だつたのか？ それは、一夏と一緒に気合が入つてたのは知つてたけど……もしかして、何か賭けでもしてた？ いや、篠ノ乃の性格からして、あんまりそういうことも無さそうだし……うーん、分かんねー。

「トーナメント中止……せつかくのチャンスが……」

「トトカルチヨが……ビジネスチャンスが……」

「もつとシン×シャルルが見れると思ってたのに……」

「二人のプロマイド……予約してたのに……」

ため息を吐いてトボトボと食堂を出て行く集団。トーナメントの中止を聞いて、みんなショックを受けていた。けど、何だか試合に

出られなかつたことが残念なわけじゃないみたいだ。プロマイドって、何のことだらう？

「あ、そう言え。篠、先月の約束だが付き合つても良いぞ？」
「そうか。それは 何？ い、いい、今何と言つた？」

「なつ！？」

「なんですつて！？」

「いや、付き合つても良いつて」

思い出したように言つ一夏と、それを何度も聞きなおす篠ノ乃。それから慌てたように身を乗り出すセシリ亞に鳳。俺の知らないところで話が進んでたみたいだ。へー、一夏そんな約束してたのか。知らなかつた。あれ？ でもさ

「どうこつ」とですのつー？」

「説明しなさいよつ！」

「つ、つにに私と一夏が……ああ、苦節何年だらうか

「なあ一夏、聞いていいか？」

「ん？ 別に構わんが

「篠ノ乃と付き合つて、何に？」

食堂にいたほぼ全員の頭が、まるで吸い込まれるように机にぶつかつた。さつきまで騒いでいた三人も、隣で穏やかに笑っていたシヤルルも、周りで話を聞いていた人たちも。

え？ みんな、どうしたの？ 何かあつたのか？

「信じられませんわ……まさかこじまで……」

「こ、こここ、この、このバカは……」

「落ち着け、篠ノ乃篠……もう私は木刀を振り回す必要はない……」

顔も上げないで机に突つ伏しながら、三人がブツブツと呟く。なんだか怖い光景だな……みんな、そんなことは止めてくれよ。ホラー映画みたいで怖いから。

シャルルはゆらりと顔を上げると、俺のことをまるで深海魚でも見るかのような目で見てきた。いや、俺は人間だから。コーディネイターだけ同じ人間だから。

「みんなどうしたんだ？ シャルルもどうしたんだよ？ なあ？」

「シン……君って実はこの世界の人間じゃなくて、遠い銀河ゲキーブ星からやって来た王子様なんじやないかな？」

「へ？」

そんなわけないじゃないか。違う世界から来たってことは合つてるけど。

「あのなあ、シン」

唯一頭を沈めなかつた一夏も、俺のことを少し呆れるように眺めていた。一斉に上げられたみんなの顔が、一夏を見つめる。え？ 一夏は分かるのか？

「お、おい一夏。みんなどうしたんだ？」

「みんなも呆れるつて。付き合つて言つたらわ」

「　　買い物だろ、多分」

「あ、そつか」

机が割れんばかりの勢いで、みんなの頭が叩きつけられた。

「え？ え？ え？」

もはや怪奇現象だ。今度は一夏にも理由が分からないうらしい。俺たちの頭には今頃?マークが浮かんでいるんだろう。しちゃうがないだろ? だつて全然分かんないだから……

「シン、とりあえずここからようかん

「え？ でもまだ夕食が……」「

「後にしてね」

シャルルは素早く俺の手を掴むと席を立つて、出口に引っ張つていつてしまった。畠山とする一夏を置いて。

「ノヤラル」一夏

「ああいう風になりたい？」

「^?」

食堂のドアを閉めた途端、中からもの凄い怒声と一夏の悲鳴が聞こえてきた。

「――」のゲキーブ星第一王子があああ――つ――「――」
「シン、シャルル、助け ぎやあああああああつ――」

卷之三

ビリーハンナ」と

買い物に付き合ひつけてこいつことなのか？ そんな買い物、俺は嫌だ。

「もつ……シンもみんなも、相変わらずなんだか……」れじや

「ん？」

「言い出す」とも、言えなくなつたやうじやない……」

「え？」

そう言つたシャルルの言葉は、どこか寂しそうだった。

手を引かれて後ろを歩いていたから、表情を見ることはできない。

「……シン、今日から大浴場が使えるんでしょう？ 行ってきなよ。
その間に僕も、準備するから」

「う、うん。じゃあ、風呂に入つてくる」

「うん、ありがとう」

そう言えば一夏の念願かなつて、今日から大浴場の使用が解禁されたんだつけ。一番喜ぶだらう一夏が、あの惨状だけ。湯船には入れるのか？ 傷がしみて痛そうだな……可哀想に。

あと、シャルルが言つた準備つて何のことだらう？ 大事な話つて、準備のいることなのかな？

そんなわけで、俺は一人で風呂に入つてきた。大浴場なんだから当たり前だけど、一人で使うにはちょっと大きすぎだつた。あの大きさなら、調子に乗つて泳いでも平氣だらうな。まあそんなこと置いといて、シャルルが待つてゐる部屋に戻るとしよう。

「シャルル、ただいま」

「あつ……おかえり、シン」

お互に声を掛け合つてから俺は中に入つていく。部屋に座つていたのは、スポーツジャージを着た金髪の女の子で、へ？ ヤバイ、部屋間違えた！？

「う、ゴメン！ 部屋間違えたっ！」

「シン、待つて！ 部屋なんて間違えてないよっ！」

「そんなわけつ！ な……い」

目の前の光景が信じられない。部屋を間違えたのかと思つてドアの番号を見直してみたけど、間違いない。正真正銘、俺の部屋だつた。

食堂で定食を食べそこね、学園生活初の風呂に入りに行き、戻つてきただけ。そう、特別なことなんてしていない。いつものように、俺のルームメイトが部屋で待つてはいるはずだつた。そのはずだつたんだ。

寝食を共にしていたルームメイトが、部屋の真ん中にちょこんと座つてゐる。視線を部屋全体に巡らしても、見えるのはいつもの目覚まし時計。制服。大事な携帯。やっぱり間違いじゃない。二つのベットもそのまま。俺たちの部屋だ。

大事な話があるつて言つてた。どんな悩みだつて聞いてやるつて、答えた。

視線を前に戻す。金色の髪が眩しい、上品な佇まい。スポーツジャージを着ていても崩れない、その雰囲気。ただし、いつもと違うところがあつた。

後ろでまとめていた金髪は今、しなやかに背中に伸びている。ジャージから浮き上がるボディーは、丸みを帯びた曲線的なラインを描いていた。全身から香る、甘い匂い。

それから導き出される結論は一つ。

「お、女の子……？」

「うん、そうなんだ。今まで黙つて『ermen』……」

胸に手を当てて、ほんのり顔を上氣させて言った。柔らかな印象はそのままでも、その仕草が妙に心を揺さぶる。

「ねえ、シン。僕、本当は……女の子なんだ」

まさか、シャルルが女の子だなんて

ちょっと待てよ？ 妙な既視感が……どこかで見た気が……じゃなくてっ！ そんなこと今はどうでもいいだろっ！？ 深く深呼吸をする。大事な話だつて言ってたんだ。どんな悩みでも聞いてやるつて言つたんだ。慌てちゃダメだ。慌てちゃダメだ。慌てちゃダメだ。

「やつぱり、驚かせちゃったかな？」

「いや、もう平氣。だから」

深呼吸を繰り返して、シャルルの前に座つた。

「話、聞かせてくれるか？」

「……うん」

「僕が男のフリをしてたのは、父からの命令なんだ。デュノア社社長から、直接の命令」

シャルルが語り出したことは、耳を疑うような内容だった。

「僕は妻の子どもで……お母さんが亡くなったときに、引き取られただんだ。たまたまエリ適正があつたから、テストパイロットすることになつて……」

自分の知らない世界の話。遠い、自分と関係ない話。そう思つことはいつだって、本物は自分のすぐ傍にあるのに。

「それから、経営危機に陥つたデュノア社の復興をかけて、僕が送り込まれたんだ。男子生徒としての広告塔の役割と、同じ男子生徒の機体データを盗む……スペイとしての役割で。ああ、もちろんデータは盗んでないから安心して」

また俺は、気付いてなかつたんだ。

「それに、これでもう終わりだから。僕は本国に帰るよ。デュノア社は……今更、僕には関係ないことか」

理解できぬことだらけだった。

家族つてなんだ？ いつも優しくて、温かくて、大事なものじゃないのか？

どうして親が、自分の子どもを苦しめるんだ？

どうして親が、子どもを実験動物みたいに扱えるんだ？

親つて、子どもを守ってくれる存在じゃないのか？

それに、元のシャルルは

「……………どうして、俺に話したんだ？」

分からなかつた。どうしてシャルルが、俺に話してくれたのか。

「俺はシャルルのことに気付いてなかつた。データを盗む機会だつて、いくらでもあつた。なのに、どうして？」

「……………懺悔、みたいなものかな。みんなをずっと騙してきて……もうそんなの嫌だつて、思つたんだ」

話を始めたときから、シャルルはずつと表情を変えなかつた。淡淡と、何の感情もないように、自分の思いを押し込むようにしか、話をしなかつた。

「シンが言つてくれたんだよ？ 自分の明日を選んでいいつて。だから僕はこの道を選んだんだ。僕はフランスに帰るよ」

「そんな…………ここにいればいいじゃないか！？ なのにどうして！？」

「？」

シャルルが首を横に振る。少し笑みを浮かべるけど、無理をしてるのが見て取れた。

「HS学園にいれば、三年間は自由だつね。でも、みんなを騙したままなんて耐えられないよ。僕のことを信じてくれる人たちのことを……騙し続けるなんて」

「それでも、シャルルは言つたじゃないか！ みんなと一緒にいて、嬉しいつて！ 楽しいつて言つたじゃないか！」「

たまらずに声を荒げる俺を、シャルルが静かに見ている。嬉しそうで、寂しそうで、胸の締め付けられる表情。

「……これが僕の運命だから。今まで、本当にありがとうございました」

シャルルはそう言って頭を下げる後、もう一度笑顔を作つてみせた。

初めてシャルルが来たあの日と、何一つ変わらない笑顔だ。

そしてそれに重なる親友の笑顔。レイが見てくれた、最後の笑顔。

何を言えばいいのか、ようやく分かった気がした。

『レイの運命は変わらないのか?』

メサイアで議長に会つて、話をしてもらつて、どうしても分からなくて……だからレイに聞いたんだ。

『議長は運命を受け入れるのが幸せだつて言つたけど、レイの運命は……』

アスランの言つことも、議長の言つことも、どっちかが正しくて、どっちかが間違つてるなんて思えなかつた。両方とも納得できるところはあつて、違つて感じられることもあつて……正直なところ、今でも分からない。そう簡単に答えが出るものじゃないし、簡単に結論付けちゃいけないことなんだと思う。

それでも、教えてもらつたこと、分かつたことはある。

誰だつて自分の明日を生きていきたいし、それを諦めたらいけないんだ。

生きてこる限り、明日はやつてくるんだから。

『そろそろ出撃だぞ』

あの時笑つたレイに、俺は何も言つてやれなかつた。答えも貰えなかつた。

だけど今、俺は勝手に答えを言おうと思つ。レイの分を、自分で勝手にだ。

レイ、怒らないでくれよ？ だつて

「……変わらないなら、切り開けばいいんだ

「え？」

もう俺は大切な人たちの、その明日を諦めたくないから。

「シャルル、諦めちゃダメだ。まだシャルルには明日があるんだから

「ら

驚いた表情のシャルルを、まっすぐに見つめる。伝えたいことはこの際、思いつきつり言つてしまおう。

「シャルルはここにいる。ここで明日を選べる。明日を生きていられるんだ。それを自分から捨てるなんて、そんなのダメだ」

「…………」

「シャルルは……本当はどうしたいんだ？ 誰かが言つたことなんて、運命なんて、今は気にしなくていいから。本当のことと言つていいんだ」

「…………」

「俺は自分の意志でここにいる。みんなが後押ししてくれたことだけ、決めたのは俺自身だ。それと同じで、前にも言った通り、最後に決めるのはシャルルだ。他の誰でもないシャルル自身だ」

伝えたい。

伝えたいことが止まらない。

伝えたいから。

伝えたいことを。

伝えたい人に。

「誰にもすがらないで、シャルルが明日を選んで……それでいいんだ」

シャルルは俺の信じる、大切な人なんだから。

「でも、僕は……」

「大丈夫だから。俺は約束は守るぞ。もしシャルルの明日を奪おうとする奴がいても」

シャルルを信じる気持ちは、ずっと変わっていないから。

「俺がシャルルを守るから。どんなことがあっても、絶対に」「…………！」

はつとした顔をした後、シャルルはうつむいた。手をぎゅっと握りしめて、肩を震わせながら。

「…………僕は…………僕は…………」

ポタリと一つ、シャルルの手に雲が落しきりめこた。

「僕は、ここにいたい……」

「……うそ」

雲がシャルルの言葉に重なるように、いくつも零れ落ちていく。シャルルの気持ちを押し出すように、いくつもいくつも。

「僕はここにいたい……」

「僕はここにいたい！ もっとみんなと一緒に笑ってみたい！」

「もっとみんなで！ ズットこの先も！ ズット、シンと一緒に！ 一緒に笑つてみたい！ これからもずっと、ずっとずっと……僕はシンと一緒にいたい！ 一緒に、いたいよ……」

涙の雨が、少しずつ収まつていった。顔を下に向けたまま、シャルルは言葉を紡いでいく。

「シン、本当にいいの……？」

「ああ」

「僕、今までずっとシンのこと裏切つてたんだよ？」

「気にするなよ。俺は気にしてない」

「これからずっと、シンに迷惑かけるかもしねないんだよー？」

「シャルルがここにいる。俺はそれでいいわ」

シャルルの震えが止まつた。袖で顔を何度もぬぐつて、息を整えて、それから

今まで見たことのない、初めての表情。

冷たい雨を吹き飛ばす、晴れ渡つた空の下。

「うん！ 約束つ！」

シャルルが笑つた。

「うん、約束する」

返事をしながら俺も笑つた。シャルルと同じよつこ、自然に笑えていた。

「のど渴いただろ？ たまには自販機で、飲み物買つてくるよ。シャルルは何がいい？」

「……シャルロット」

「え？」

立ち上がりつてドアに向かう俺を止めたのは、まだ赤い目をこすつているシャルルの言葉だった。

「シャルロット。お母さんがくれた、僕の本当の名前。二人でいるときだけいいから、僕のことを呼んで。本当の、名前で」「うん、分かった。じゃあシャルロット、何が飲みたい？」「うん、シンにお任せするよ」

「了解だ」

敬礼を一つして、俺は部屋を後にした。廊下に出た時に深く息を吐いて、それから歩き出す。

これで良かつたんだよな？ レイ……
俺つて勝手だから、あんなこと言つたやつたけど、それでも良いよな？

ああ、セツキはお前が言つたこと真似をさせてもらつた。
だつて、お前のモノの言い方つていつもクールでさ。それでいてはつきりしてて、頼りがいもあつて。一々格好良いんだよ。
へへへ、じゅうやつて褒めても、レイは涼しい顔してるんだもんな。
人がせつかく褒めてるんだから、もつと喜べよ。

……ありがとう、レイ。お前がいてくれて良かつた。
それと……「メンな。お前との約束、守れなくて。
でも、今度こそ守るから。約束は絶対に。
だから、またな。レイ……

自販機で「一ヒー牛乳といちじゅうミルクを購入。パックを手にしながら、俺はシャルのことに考えを巡らしていた。

さて、シャルル　じゃなくてシャルロットか。じゃあシャルでいいよな？ ルナみたいに愛称で呼んで。
で、シャルにはここにいていいと言つたけど……現実問題として先送りするわけにもいかないし。とりあえず明日、こういうことにも詳しそうだから、葛城さんに相談かな。困った時の葛城さん頼みか……自重したいとは思つんだけどなあ。結局、自分では考えてないや。

「見つけたつ！ アスカくんよつ！」

「アスカぐーんっ！」

「え？ みんな、どうしたの……？」

クラスメートが数人駆け寄ってきた。みんなの目がぱらんと輝いている。非常に嫌な予感しかしない、マジで。

「！」の後食堂に集合… “アレ”持ってきてねっ…

「もちろんユノア君も一緒に…」

「あ、あのや。アレってもしかして…」

食堂に集合で、アレ。嫌な予感がするどこの謡歌じやない。また誰かのトライウマが生まれる気が…

「それではこれより！ 第二回『ドキドキ！ マコンクッキー…』を始めまーす…」

「…………イエ—————イフ————」

食堂の中央で開始の宣言。一斉に沸き立つ生徒一同。

嫌な予感が的中し、恐怖のゲームが再来してしまった。こんなことになるなら早く処分しどけばよかつた…

「アンタたち……随分仲が良さそうね？」

「おー人とも、やっぱりその気が…」

「事情があるんだよ……放つておいてくれ」

参加者の中にいたセシリ亞と凰が、半眼で声をかけてきた。ジト
ーつとした視線が痛い。ついでに言えば一人だけの視線じゃなくて、
周囲の視線全部が痛い。

理由？ 今度は俺でも分かるさ。コレだ。

「シャル……もう大丈夫だよな？」

「うん」

「じゃあ、そろそろ離してくれないか？」

「ヤダ」

「はあ……いつまで繋いでればいいんだ？」

「ずっと」

「はあ……そうですか……」

「えへへっ」

部屋に戻つてから食堂にいるこの時まで、シャルは俺の手を握つて離してくれない。こうも堂々と言われてしまうと、俺も何も言えなくて……みんなの視線で、針のむしろだ。ヒソヒソ声が心をチクチク刺して、居心地が悪い。それにさつきからフラッシュが連続でたかれて、眩しくてたまらない。うあ……シャルが元気になつたのは嬉しいけど、コレはキツイ……

「嫌だ……もう語尾にマリンだけは嫌だ……俺はもう誰も信じねえ……」

「事故だつたんだ、アレは……仕方がなかつたんだ……」

俺とシャルを見ていないのは、隅っこでトラウマを再発させている一人ぐらいだ。ていうか誰だよ、一夏と篠ノ乃を呼んだの……二人とも来ちゃってるし……あ、しつかり順番を決めるくじ引きは引いてる。律儀だよな、あの二人は……

「さあ、アスカくんから引いてねっ！」

「ああ。えっと……四十一番だ」

「僕は……四十一番だね」

最後から一つ前と最後。俺とシャルは最初にゲームをしたときと同じ順番だ。四十人超の参加者なんだから、これは流石に当たらないだろうな。クジ運だけは良かつたみたいで、ちょっと安心した。

「では、一番の方からどーぞっ！」

「えいっ！ マグロ、サーフだねっ！」

真ん中に置かれた箱から、一人ずつクツキーを引いていく。どうせ俺たちには回ってこないだろ……当たった人には可哀想だけど、罰ゲームの様子を見て笑わせてもらおう。

「……イカだ。まあ、まだ当たらないわよね」

一桁台。当りが出るには早いだらうな。

「今日は……クジラですね」

一桁に入った。ゲームが長引いたほうが盛り上がるもんな。

「……私の勝ちだぞ！ イワシだ！」

一十番台。まだ半分だしな。それと篠ノ乃、おめでとう。

「サバだつ！ やっぱり俺はみんなを信じじるっ！」

三十番台。一夏、今度は助かつてよかつたな。信じてくれるみた

いで良かつた。

「さあ、最後はアスカくんとデュノアくんの一騎打ち… 愛し合つ二人、勝負の行方は…？」
「…へ？」

気が付いたら、残りは俺とシャルだけになつてた。え？ 嘘だろ？ あれだけ人数がいて… 残り一人！？

「ほり、シン。行こうよ
「ま、マジっ！？」

手を繋いだまま真ん中に歩いていくと、さつきまでより視線が俺たちに集中していく。

箱に書かれたサメの口が、俺にはとてもなく大きく見えた。俺かシャルか… 確立一分の一…

「さあアスカくん、どうぞっ！」
「迷うなっ！ 僕はどんな罰ゲームでも…」

司会の子が嬉々として案内する。こりやダメかもしれない。半分諦めて、さめの口に手を突っ込んだ。

「いぐぞ、レイ！ 援護してくれ！

中を「いそ」そとあさり、手に触れたものを掴んで引きずり出す。これは

「 シャチ、だ。ってことは…」「アスカくん、セーフ！ つまりデュノアくんの負けです！」「あーあ、負けちゃったなあ」

周りから湧き上がる歓声。笑いながらシャルはサメのクッキーを取り出して、ポリポリかじり出す。助かったけど、罰ゲームはシャルか……なるべく、軽いものであつてほしい。

「それではテュノアくんに罰ゲームを読み上げてもらいましょうー。」

マイクを差し出され、シャルは箱の中を覗き込みながら罰ゲームの内容を発表し出した。何だらうな？ みんなの前でマリンダンスとかか？

「ええっとね。『前の順番の人には、海よりふっかい』

そこから先が言えないシャル。首から顔がみるみる赤くなつて、てっぺんまで赤くなつたとき、よつやく続きを口にした。

「『ふっかい、キス。キスの場所はもちろん、分かつてるよな？』だって……」

時間が止まつたように、食堂の音が消えた。

「へー、罰ゲームはキスなのか。前の人、……つあつ、俺だ。アレ……待てよ？」

「キス……？」

「キッス！？」

相手は

「お、俺にいつー!?」

「キヤー……………」

「

爆発する女子の歎声。食堂が消し飛ばないのが不思議なぐらいの衝撃が伝わっていく。

「アスカくんと、デュノアくんが、キスー!？」

「ウソーー!? 信じらんないつー!」

「デジカメはつー!? 撮影用機材はビリヒー!」

「レーダー持つてきましたつー!」

「お宝プロマイドだよつー一枚千五百円で予約開始つー!」

「生きてて良かつた……あ、鼻血が……」

地に足がついている感覚がしない。ど、どつするつー!? 一夏たちに助けを

「シン、トライアを乗り越えて男は強くなるんだぜ?」「クッキー

「乗り越えてみせる、アスカ」

「せつかくの機会ですし、よろしかつたのでは?」

「そうね。お似合いだわ」

俺たちを笑う気満々だった。くそつ、こんな危険物一度と買つもんかつー! 今度行くのは動物園にしてやるつー!

「アハハ……流石にちよつと、恥ずかしいね?」

手をさわつとしながら笑うシャル。ちょっと? いやいやいやいや、俺はものすつぐく恥ずかしいんだけど……そんな、何でシャルは平気なんだ?

「ねえ、シン……」

周りがまた静かになる。拾音マイクに囲まれながら上田遣いで、シャルが言った。

「僕とじや、嫌かな……?」

「煽り立てるよつなことを言わないでくれつー」

また大きく、女子の歓声があがつた。顔に血が上つて行つてのがわかる。演技派のシャルは、罰ゲームにノリノリだつた。

「もう……こつもほあんなに優しくしてくれるので誤解を招く言い方は止めてくれえつー!」

三度、女子の歓声。分かつた。シャルも恥ずかしくて、少しおかしくなつてゐるんだ。きつとそつだ。そうに違ひない。そういうじやなければ……はつ! そういうことかつ!

「ああつー! キスつていつても、オーテ「とかほつべとか、そういうところだよなつー? だよな、シャルつー?」

「大丈夫。場所はもちろん……」

自分の脣に指を押し当てるシャル。それを今度は俺の脣に押し当てる

「……だからね？」

「~~~~~つー？ 霧だろおおおおー！？」

四度目の歓声で俺は腰を抜かしちゃなった。顔は真っ赤なのを通り越して……今の俺なら変形して空を飛べるかもしない。アスラン、俺を助けてくださいお願いですコノヤロー……頼みますよ、アスラン……

それともいっそ、気絶でもしちゃおうか？ そりゃれば楽に

「気絶しても、すぐに目を覚ましてあげるから……僕の王子様……」

もうダメだ。シャルがおかしくなりすぎて、読心術まで使えるようになってる。

はやし立てる周りの声。早鐘のように打たれる心臓の爆音。

片手が俺の頬に添えられた。シャルの顔がどんどん寄せられて

「シン・アスカはいるか？」

食堂に入ってきた声で、シャルの顔が止められる。みんなの視線の先にいたのはなんと、ラウラだった。とりあえず体をシャルから離そう……あ、捕まつた。

「ツツツといつちに歩み寄つてくるラウラ。いつたいどうしたんだろ？ もしかして助けてくれるのかな？

期待に満ちた視線を送ると、それに気付いたラウラは深々とお辞儀をした。無理だつて？ やっぱり

「今までの非礼を詫びたい。お兄様」

お兄様?
へ?
おににれま?
おににぢやん?

みんなが一斉にポカンと口を開けた。もう俺の頭は状況に何一つ追いつけていない。

「……………？」

「織斑一夏が言つていた。シン・アスカは自分の兄のようである。だから強いのだと。故に、私も今日から妹にさせてもらひ」「はあ！？ なんだそれ！？ 一夏、お前何を言つたんだよ！？」
「俺だつて、別に変なことは言つてねえぞつ！？」

慌てて自己弁護をする一夏。俺の知らないところで、何がどうなつていいやう。

「お前が言つたことだらう？ 私を守るとも、偉そうに。」織斑一夏、
わたしはまだお前に負けたつもりはないからな
「ま、まあ確かにそり言つたけど、……」

ラウラはそう言つて、フンと鼻を鳴らして笑つた。ああ、初めて笑つた顔をみたな。自然に、笑えるんじやないか

ドカンッ！

突然、砲撃音が食堂を揺らした。

衝撃砲、
だよな?
あの音は...

「せいかく良いところだつたのに……シン、逃げよつか」

「へ？ 逃げていいの？」

「逃げないと危ないから。じゃあ、ボーデヴィッシュさん。シンは連

「ああ。それではな、お兄様」

俺の手を引いたまま、みんなの中をするりと抜けて食堂の入り口に向かつた。

呆然とする俺の目の前で繰り広げられる戦闘行為。三対一。女子三人対一夏だ。

「ところで一夏、私の分のS定食はないのか？」

「ラウラ！ 何でお前の分まで払わなきやいけねーんだよつー！」

「一夏、アンタはいつまでも懲りないのねつー？」

「ここで星に還して差し上げますわつー！」

「遠い宇宙で学びなおして来いつー！」

「何のことだ うおああああああつー！」

……可哀想な一夏。でも、一夏なら大丈夫だつて信じてるから。だから俺は手を出さない。手が出せないわけじやないぞ？

「ねえ、シン。ほらっ」

「ん？ ああ、分かつた」

シャルと一人で、みんなに向き直る。

片手は繋がれたまま。もう片方の手を、額に掲げて。

全員に聞こえるように大きな声で。俺とシャルの二人で言った。

「「みんな、また明日つー！」」

「あ、一人とも待つてよ！」

「キスシーンはつー？」

「それはまた今度ね」

「今度でも嫌だつー！」

食堂を後にして、まだ手を繋いだまま、俺とシャルはずっと笑っていた。

みんなといられること、明日があること。
それが一人とも嬉しくてたまらなかつた。

明日から、また騒がしくなるんだろうな

そう言えば、部屋に戻つたときに感じた、あの既視感は何だつたんだ？ どこかで、全く同じ事を見た気が……いや、本で読んだ気が……まあ、思い出せないんだから大したことじやないんだろ、きっと。

第十話『君と生むる墨口』（後書き）

いつも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて余話のダッヂボールをしてしまいます。

お気軽にご感想をください。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

番外編の一『今日のマガジン』(記書き)

以下の事に「注意ください」。

・今回は小ネタです。いつかちゃんとした番外編を書きますので、アンケートに「」に参加いただいた方々は、今しばらくお時間をください。本当にすみません。

番外編の一『今日のマコちゃん』

プルルルツ、プルルルツ、ピッ。

『もしもし、マコか?』

「うん…お兄ちゃん、こんばんは～！」

『ああ、こんばんは。みんな元気にしてるか? 風邪ひいたりしないよな?』

「大丈夫、マコもお父さんも、研究所のみんなも元気だよー。お兄ちゃんも怪我とかしていないよね?」

『わかったわ。まあ、毎日のように頭は叩かれてるけど……』

「あーーーお兄ちゃん、また授業中に居眠りしたんでしょー。もー！ 先生のお話はちゃんと聞かないとダメだよー！？」

『寝くなるから仕方ないだろ? マコだつて、理科とか算数とかやつてると寝くならないのか?』

「マコはそんなことないですよーだ。反省しないと、今日作ったクッキーあ~げない』

『はは、分かった分かった。明日から気をつけよう。クッキーは家で作つたのか?』

「うん、家庭科の授業で作つたの。ラッピングも完璧で、先生か

「うるさいもんね~」

『「すいごじやないか、マコ。それは明日真うのが楽しみだな~』

「えへへ~。あ、でも、これから居眠りしちゃダメだからね?』

『大丈夫だつて ん、ああ。妹と電話してんだ。顔がにやけてる~。余計なお世話だよつ! ポメン、マコ。ちょっとみんなに』

』

「お兄ちゃんのお友達?』

『「うん。今は食堂にいるからね』

『「お兄ちゃん、お友達と仲良くなってる? ケンカしたりはしてない?』

『「ほんとうにみんな女子だから、俺の方がからかわれてばっかりだよ。マコの方こそ、友達と仲良くなってるか?』

『「うーー。今度はみんなでカラオケに行こうって約束してるのー!』

『「それなら良かった。何か困ったことがあつたら話さよ? 俺が飛んでいくて、一言言つてやるから』

「お兄ちゃん、過保護~。ふふ、でもありがとなつ~。」

『「過保護つて、そんなことないだろ?』

「じゃあ、お兄ちゃんシスコンだ~」

『し、システム…？　シリアル…　そんな言葉はじで覚えた！
そこ、笑うなよ！』

「本に書いてあつたよ？　妹のこと大好きな人のこと、システムって言つんだって。お兄ちゃんはマコのこと大好きだもんね？」

『そんな本読んだらダメだつ！　まったく……そりや、俺はマコのこと好きだぞ？　だつて大切な妹なんだから……マコ、ちょっとゴメンな？　シャル、どうかした？　え、手？』

『あゆー

『シャル、みんなの視線が痛いんだけど……はあ、仕方ないなああ、ゴメンな』

「またお友達？」

『ああ、大事な人なんだ』

『あゆ、ひつひつひつひつ

『シャル、ちょっと強く握りすぎじゃないか？　それで、お兄ちゃんが妹のことを大事に思うのは当然だろ？』

「へへへ、そうだね。マコもお兄ちゃんのこと好き。マコは明日のデート、楽しみにしてるからね？」

『で、デートお？』

卷之三

『痛い、シャル。視線だけじゃなくて手が物理的に痛い。どうしたんだよ、もうマユ、デートって言い方はなあ……』

「良いでしょ？ 明日はお父さんも来れないから、一人きりなんだ
し。それともお兄ちゃん、マコヒテートは嫌？」

『嫌じゃないよ。それじゃ、俺も張り切ってテートに』

ミシシ、ミシシ、ミシシ、ミシシ、ミシシ、

『痛い痛い痛い！
マジで痛いから止めてくれシャル！』

「…………ねえ、お兄ちゃん。シャルって人もしかして、お兄ちゃんの
彼女?」

『か、彼女お！？』

わざわざ！

「だつてさつき大切な人つて言つてたし、何だか仲良さそうだし」

違うって！俺とシャルはそんなんじゃな

ハキハキハキハキッ！

『いだだだだだだつ！ シヤル、何で怒つてゐんだよつ！？』

「……お兄ちゃんってやつぱり鈍いんだね」

『ハアハア……、マコ、何か言つた?』

「マコは何も言つてしまへん。とにかく! 明日はしつかりエスコートしてよねつ! ?」

『う、うん。明日は映画を観に行くんだよな?』

「うん! “ボクはホントはオソナのコト! ”の公開初日だよ! 明日行けば特典が貰えるの! 」

『へへ、特典か。何が貰えるんだ? ストラップとか?』

「もげろつ! 健一くん特大ぬいぐるみ! 」

『も、もげ? マコ、それってどう? ……』

「えつとね、ちょっと待つてね? 確かこのチラシ? ……」

『ええ、ええ! 』

「あ、あつた。ええと、『読者の皆様からのいじ要素でお応えして、遂にもげる健一くんのぬいぐるみが特大サイズで登場つ! 皆様、思つ存分もいでやつてください! 僕ももぐぜつ! 』だつて」

『ま、マコ……も、もげるのは、その、ビコが……?』

『大変残念ながら、諸事情により健一くんからもぎ取れるのは頭部に変更されていますので、男性の方はご了承ください。だからといつて、危険なので爆発もさせないでください。チクショウ! 』

だつて」

『あ、そつなんだ……アハハ……』

「楽しみだね！ 貸した本、ちやんと読んでくれた？」

『ああ。健一くん鈍かつたよな～。何で香菜ちゃんの「」と「」気付かな……』

「？ お兄ちゃん？」

ガチャーンッ！
ツー、ツー。

「あれ、切れちゃった。お兄ちゃん、どうしたのかな？」

プルルルツ、プルルルツ、ピッ。

「お兄ちゃん、今電話が切れちゃったけど、どうかしたの？」

『け、携帯落としちゃった……が、マコ……ちよつと聞こえていいかな……？』

「うそ。ナビ、何を？」

『“ボクはホントはオンナのマコー”の、あらすじを……』

「あ、お兄ちゃん、ホントはちやんと読んでないんでしょ～？」

『いや、読んだから聞きたいんだ……頼むよ……』

「？ じゃあ、恤つね？ えつと……『主人公の香菜ちゃんは高校一年生の女の子です。けど香菜ちゃんはお家の事情で男子校に通つゝになりました』」

『…………』

「『高校のルームメイトになつたのが、健一くんつてこいつ男の子です。女の子つてバレたら大変なので、香菜ちゃんは一生懸命に正体を隠しちゃう』」

「『でも鈍くてたまらない健一くんは、お友達の昴輝くんや先輩の彰さんと一緒に楽しく学校生活を送つてこます。香菜ちゃんの正体になんてつらつとも気付かせん』」

『昴輝くん…… 一夏…… 彰ちゃん…… アスラン……』

「『それでも、香菜ちゃんのことをひとつでも大事にしてくれる健一くん。香菜ちゃんは健一くんを騙していくことが辛くなつてきます』」

「

『…………』

「『健一くんはそんな香菜ちゃんの様子に、今はいらない親友の俊彦くんの面影を見ていました』」

「俊彦くんが…… レイ……」

「『そして最後… 遂に香菜ちゃんは自分が女の子である』ことを、健一くんに告白つまづく…』」

『香菜ちやんが……シャルで……』

「『健一くんはこれからずっと、香菜ちやんを叶ふ』ことを約束して
くれるのでしたー。つてこののがおひかえ」

『け、け、けけけけ……お、おおおお……』

「お兄ちやん、どうしたの？ 変な声出したりして……」

『「メン、マコ、ちよつとだけ待つてくれ！ み、みんな。も、
もしかしてだぞ？ 僕つて、いや、そんなわけないけど、僕つて、
そ、その、け、けけけ、健一くん並みに』

『ツクン
ル・シピ・シ・ル・シ・ツ・

「お兄ちやん？ ひびが入ったみたいな音がしたけど、大丈夫？」

『ダ、ダイジヨウブダヨ？』

「なんでカタコトなの？」

『ソントナコトナイゾ？ ナアマコ、デウシトコノホンコハランダン
ダ？』

「？ マコがこの本好きだから。だって……」

「健一くん、お兄ちやんにやつべつなんだもん」

『 パシピシッ、パッキーンッ！

「 とりても優しくて、かつよくて、でも呆れるぐらい鈍くてあれ？ お兄ちゃん？ お兄ちゃんつてば」

『 大変だ、シンが倒れたぞっ！ みんな、ビックして放つておくんだよっ！？ 自業自得つ！？ 何のことだよっ！？ 待ってるシン、今俺が保健室に運んでやるからな』

「 へ？ へ？ へ？」

『 えっと、マユちゃん？ 始めまして、僕はシンのクラスメートのシャルル・デュノア』

「 あ、葛城マユです！ お兄ちゃんがいつもお世話になます！」

『 うううう、シンにまじつもお世話をなっています。それでシンは今運ばれていたから、今田はもう電話できないんだ。何か用件があつたら、伝えておくね』

「 運ばれたっ！？ お兄ちゃん、大丈夫なんですか！？」

『 大丈夫。自分が鈍いことに気付いてショックを受けただけだから』

「 あ、そつなんですか。なら心配しなくていいですね」

『 そつだね。少しばかり反省するところと想つよ』

「それじゃあ、後はお願ひします」

『連絡は何かない?』

「大丈夫です。どうもありがとうございました! えっと、シャルルさん、これからもお兄ちゃんをよろしくお願ひします!」

『うふ、じつに。それじゃあマコちゃん、僕は失礼するね』

「はーい」

ペッ。

「お兄ちゃん、やっぱり激鈍だなあ……」

「シャルルさんって多分……でもお兄ちゃんのことだから……あれだけ言つても、まだ気付かないんだろうなあ……」

「ふふ、マコもお兄ちゃんのこと好きだからね?」

「だから、また明日ね? お兄ちゃん」

番外編の一『今日のマガジン』（後書き）

いつも、ここまで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字は是非ご指摘ください。

また、作者は感想乞食です。感想が無いと寂しくて全速前進してしまいます。

お気軽に「感想をください」。

では、もう一度読者の皆様方に感謝を込めて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1524v/>

IS インフィニット・ストラatos シン・アスカの激闘
2011年11月20日16時36分発行